
名探偵魔女

愛華哀歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵魔女

【Nコード】

N4167X

【作者名】

愛華哀歌

【あらすじ】

野田縁は普通の高校生……とはすこし違う。だが決して彼自体が特別というわけではない。ただ状況が特殊なだけ。

彼の先輩には魔女がいる。それも飛び切り性質の悪い奴だ。

今日もいつもどおり部活をしていると魔女である道絵梨紗から明日部活の交流会に参加する事を聞かされる。でも縁はまったく乗り気にならない。

何故なら彼は明日交流会で人が死ぬのを知っているから。

一章 目的（1）（前書き）

電撃の一次で落ちた作品です。個人としてはミステリーとして書いたつもりですが人によってはミステリーと思えないかもしれません。

一章 目的（１）

はつきり言おう。僕にとってこの物語の目標は既に九割方終了している。

これはそのたった一割で人が死んでしまう物語だ。

ぶっちゃけ言うとな殺人事件が起きるのは予想出来ていた。

先輩の事だ、きっとコレぐらいの出来事じゃないと刺激が足りないのだろう。

ボーっと立っていると美奈^{みな}は急に僕の腕にしがみ付いてきた。

ああ、そう言えば美奈は死体を見る事が始めてなのか。

僕は僕で死体を見るのは二度目だけどやっぱ死体って言うのはどうも慣れない。なんだか気分も悪くなってきた。

犯人はどうせ……と言うか絶対に先輩だ。

まったく、なんで此処まで感情が歪んでいるのか理解しがたい。

やはり永遠と続く歳月が先輩を狂わせてしまったのだろうか？

いや、そんな事を考えても無駄だな、起こってしまった事は仕方が無い。

……死体には無数に刺した後があつた。左胸にも刺し傷があるからこれが致命傷だろうか？

刺し傷良く見るとその部分から赤いものがドクドクと流れ出している。

——コレではまるで赤い池だ。

「……………」

考えても無駄だと分かっている。分かっているのに……。

「……ほんと」

どうしてこんな事になってしまったのだろうか。

それはいつも通りの平穏な日々。

時間をまき戻してから一ヶ月程が経過し、いつの間にやらゴールデンウィークの初日だった。

僕がいつも通り幼馴染の小山美奈こやまみなと部活の為に美術室で絵を描いている時、部長のが言った。

「いきなりだけど、明日。隣町の高校の美術部と交流会をします。集合時間は九時、現地集合だからその所よろしくね」

そのいきなりの要求に美奈は嫌な顔一つしないで従う。

「わかりました、先輩！」

その元気の良い返事に先輩は目を細くし微笑む、そしてその細い目のまま、先輩は僕を見た。

「で、野田君はどうなの？」

「あ……………」

僕には拒否権はない。

先輩は魔法使いだ。何をされるか分かったものではない。

「……………行きます」

「そう」

先輩は上唇を舐め、口を三日月の様にしてもう一度微笑む。

「それに伴って私が一昨日書き上げた作品は明日行く予定の高校に送つといたから」

「……………！」

送ったのかよ。

「あら？ 如何したの、野田君。顔色が悪いわね」

「……………そりゃ、そうでしょう」

先輩の嫌がらせと来たら吐き気がする。あの絵を送っただって？

勘弁してくれ。

「そんなにあの絵が不満なのかしら、それともアレは野田君のお気に入りか何かだったの？」

お気に入りか、たしかに綺麗な絵だった。多分僕なんかよりもずっと上手い絵だ。でもそれは表面の美しさ、裏面は――

「たしかに先輩の描いた絵、素敵だった。良いなー。あたしもアレ

ぐらい上手く描ける様になりたい」

そう言って美奈は赤いフレームのメガネをグイッと上げた。

メガネのフレームが赤って事は美奈の調子が良いって事だ。コイツはその日の調子でメガネを変えてくるからな。

「大丈夫よ、練習すればアレぐらい描ける様になるわ」

「そうかなー」

美奈が首を傾げる。

……まったく、くだらない。

僕達みたいに二、三年絵を練習した程度であれ程描ける訳が無いじゃないか。どうせ、数十年越しで練習したのだろう。先輩には腐るほど時間があるのだから。

「そう言えば、縁もいきなり絵が上手くなったよね？」

「え……ああ、気のせいだろ？」

美奈のいきなりの言葉に少し焦った。まあ、僕も人の事が言えた義理では無い。僕も先輩と同様に時を戻したのだから。

これは、人生の中で置いて最大のズルだろう。

そう思っているからこそ。僕は余計に美奈を意識してしまう。中学生の時から伸ばし続けて、セミロング位になっている髪をツインテールにした美奈は何度も見てきた。何度も見てきたのに、どうして今はこれ程までに魅力的に見えてしまうのだろうか。

美奈はそこまで目立つタイプでは無く、派手なタイプでもない。

どちらかと言えば地味だ。それに美奈よりも可愛いと思う女の子だつてクラスにはそこそこいる。

だが決して美奈が可愛くない訳では無い。しかし『美少女か？』と問われると首を傾げてしまう。そんな奴。

そして、そんな奴の幼馴染が僕。

……何だか僕と美奈が釣り合っているのだから釣り合っていないのか、良くわからないな。

「それにしても明日が楽しみねえ。交流会なんて何ヶ月ぶりかしら？」

先輩は何時の間にか窓際に移動し、空を仰ぎ見ながら呟いていた。きつとこの人が楽しみにしている事は交流会自体ではなく、交流会の際に起きる出来事が楽しみなのだろう。

なにせこの人は名探偵魔女だからな。

名探偵と言うものは実際、とても大変だ。

どの物語でも名探偵は確実に事件に巻き込まれる。それも殺人事件とか、その類の凶悪な事件だ。

その強制発生イベントを自力で解き明かさなければならぬ。まあ、名探偵と言う位なのだから謎を解き明かすのは朝飯前だろう。

でも、どんな名探偵だろうが事件を起こさない様にする事は出来ないのだ。それが名探偵の最大の弱点。

しかし、今僕の視界に入っている、名探偵はそれが出来る。

先輩……道絵梨紗みちえりさには人から狂気を取り除く事が出来る力がある。狂気と言うのは、まあ、殺人衝動とか欲望とか人の暗い部分の事だな。

されど彼女は名探偵なのだ。名探偵である以上、事件を解決しないでいけない。だからあえて逆の行動をする。狂気を取り除く事が出来るのなら逆も然りって奴だ。

先輩は名探偵と言う役柄を演じる為に、人に狂気を植え付ける。彼女には狂気を取り除くと同様に凶器を植え付ける力もあるのだ。しかも、その方法がまさに美術部独特の方法で、先輩らしいと言えば先輩らしいのかも知れない。

その方法とは先輩が描いた絵を見る。たったそれだけの事である。

ただ見るのでは無く、彼女が絵に魔法を掛けた後に見る。するとランダムでその絵を見た人間を狂気に変えてしまうと言うとんでも設定。これには個人差があるらしく、魔法の体制的な物が全く無い人だと、本当に性質の悪い殺人鬼になってしまうとか。

以上、これが魔法使いの道絵梨紗、美術部の先輩、名探偵の魔女。全てをひっくりくるめた彼女の素性である。

……きつと先輩も自分自身が狂気そのものになっている事は分かっているのだろう。分かっているのに止められないのだ、きつと。

その日の部活帰りは美奈と一緒に帰る事にした。いや、むしろいつも一緒に帰っているのだけれど。

美奈から少し遅れる様にして生徒玄関から出ると美奈はニコリと軽く笑う。

「じゃ、行こっか」

「……………ああ」

僕と美奈はゆっくりと歩き出す。

僕は前に比べて美奈と会話する事がヘタクソになった気がする。時を戻してから少し美奈を意識しすぎているのかも。

余り意識しすぎると変に思われてしまうかも。

しかし、意識せずには要られない。何せ美奈が最大の目的で時を戻したのだから。

「ちよつとコンビニに寄りたいんだけど良い？」

「いいぞ」

僕は適当に返事をして肯いた。

「ありがと」

「おう」

僕と美奈はコンビニの方向へ向う。

短い会話。でもコレはいつも通りの事だからたいした気にならない。

コンビニに着くと美奈は即行で漫画本が並んでいるコーナーへ向かった。

「今日は発売日だからね」

そう言って美奈が手に取ったのは週間で出ている漫画雑誌。

「……なあ、毎週それ買っているけど、お金大丈夫なのか？」

心配したつもりで聞いた。が、

「もう！ 漫画家目指す物が漫画を買うお金を惜しんでいられる訳無いでしょう！？ その所を縁は全然分かって無いよ！」

いや、怒られる様な事を言った記憶は無いぞ、って言うかそこまですムキになるなよ。

「じゃあ、読み終わったら次僕に貸してくれ」

すると美奈は顔をひそめながらも、ため息を吐き答えた。

「りようかい。明日貸してあげるわ」

「ども」

僕だつて漫画は読む、むしろ大好きなぐらいだ。『漫画家ぐらい絵が上手になりたい』って理由で美術部なんかに入ってたぐらいだし。美奈が漫画雑誌を片手に他のものには目もくれず、即行でレジに向かう。

よくよく考えて見ると漫画家って凄いよな。物語と絵を描くこと両方をしているんだから、普通の精神力じゃ出来ない事だと僕は思う。大体僕には物事を継続させる力は余り無い。一番続いているのが美術部の活動で絵を描くことぐらいだ、勉強をすれば五分と経たずやる気を無くすし、夏休み中のラジオ体操なんて一回やっただけで心が折れた。

そんな僕でもしつかりとやり直したい事が在るのだ。

「何ボーっとしているの？ 早く行こ」

「あ……」

いつの間にやら会計を済ませていた美奈が漫画雑誌の入ったレジ袋を片手に僕の前に立っていた。

「悪い、考え事していた」

美奈は眉毛をグイッと上げる。

「変な事じゃないでしょうね？」

「まさか、そんな事言っていないで早く行こうぜ」

僕はそう言い、美奈を放置して一人コンビニから出る。

「ちよっと待ちなさいよ！」

美奈が物凄い勢いでコンビニから出て、レジ袋をブンブン振りな

がら僕を追いかけてくる。

美奈は今、僕を僕だけを見ている。そう思うと途轍もなく嬉しかった。

美奈を家まで送った後、僕は特に何処かへ寄るつもりもなかった。で自宅に向かって歩いていった。さすがに二度目の高校一年生なんだ、ここで失敗する訳にはいかない。毎日しっかりと美奈を家まで送る事になっているのだ。しかし、僕と美奈の家は近い訳では無いのでコレが案外きつかったりする。

でも、あんな辛い思いをするぐらいならば僕は美奈を家まで送る選択をするけれど。

「ふー」

結構な距離を歩いているので足が少しダルイ。毎日同じ距離を歩いているのに足は全然なれていない様だ。

ノロノロ歩きながらどうにか家までたどり着くと家の前には見覚えのある女の人がタバコを吸いながら立っていた。

女の人は此方に気付くと、左手を振ってくる。

「やあ、少年。一週間ぶりかな？」

「なんの用ですか？」

「いやあ、いつもお宅の部長さんにお世話になっているってお礼を言いに来ただけさ」

「だったら本人に言うてくださいよ。大体彼方がそんな理由でここまで来る人じゃないって事ぐらい僕でも分かります」

「ま、たしかに他の様があるから来たんだけどね」

そう言いながら持ち歩き用の灰皿にタバコを入れる。この人の名前は櫻庭彩子さくらばあやこ、警官だ。

きつと二週間前に起きた事件関わりでここに来たのに違いない。

「で、その後お二人さんはどーよ？」

「どうよって、何がですか？」

「何事も無く過ごせているかって話」

そう言いながら櫻庭さんは頭を搔く。

何事も無く、ね。残念ながら明日変なイベントの予約が入っているから無理だな。どうせ、ろくでも無いイベントだし。

僕が黙り込んでいると櫻庭さんは片目を閉じてウイंकをしているみたいな感じで言った。

「なに、特にコレと入った問題が無ければ良いのさ。大体私が危険視しているアンタじゃなくて部長さんなんだからね」

「……何故です？」

分かりきっているのにあえて聞いてみた。それはきっと櫻庭さんがどんなリアクションを取るのか気になったただけだ。それ以外の理由はない。

櫻庭さんはハツと笑い答える。

「君も分かりきっている事を聞くね、部長……道絵梨紗ちゃん。どう考えても事件に巻き込まれる回数とその事件を自分で解決する回数が多すぎるだろ？ それにあの雰囲気、普通殺人事件とかに巻き込まれてあそこまで冷静になれる女の子は余り居ないと思ってね」

確かにその通りだ、一年前の先輩は良く知らないけど、先輩の所為で僕は既に一つ事件に巻き込まれた。おかげ様でトラウマになりそうだよ。

「彼女は本当の意味で名探偵って事なのか、または……魔女とか？」

そう言ってニヤニヤしながら櫻庭さんはポケットからタバコをもう一本取り出し、火を付けて口にくわえる。

……名探偵と魔女。どちらにせよ先輩に当てはまる言葉だ。まあ僕は名探偵魔女って事にしているけれど。

「もしも、魔女の方だったら此方も仕事の関係で黙っていられない訳ね。あーやだやだ時給は変わらないのに仕事が増えるなんて目眩がする」

たしかに給料が変わらないのに仕事が増えるなんてテンションが下がる事以外の何物でもない。まあ、それを堂々高校生の前で言う

警察官もどうかと思うが、それも櫻庭さんらしいと言えば櫻庭さんらしいな。僕だったら特別何か得する様な事が無いと面倒臭い事なんてしたくない。ぶっちゃけ明日の交流会なんてサボりたいぐらいだ。でもサボればきつと先輩は黙っていないだろう、最悪の場合、美奈を狂気に変えかねない。

櫻庭さんは煙を吐き出し、片方の手をポケットに入れる。

「あ、そう言えば最近となり町で行方不明になっている男子高校生がいるんだけど、知ってる？」

行方不明？ 初耳だ。

「いや、まったく知りませんでした」

「そうか……それなら良い。それじゃあ、私は帰るわ。あんたも殺人事件には気を付けてね」

あたかも僕がこれから殺人事件に巻き込まれる事を知っている様な台詞を残し、櫻庭さんは一人早歩きで去っていった。

結局なんの用で来たんだ、あの入。

そう、思いながらも僕は二週間前の事件を思い返す。

あれは夜の出来事だった。何故か僕は十時を回っているのに物凄くお腹が減ってコンビニにパンでも買いに行こうと家から出た時だ。家の前にヒーロー者の仮面を付け、右手に竹刀を持っている男が立っていた。

僕がそいつに襲われた事を知ったのは竹刀で顔面を殴られて視界が五十度程回転した後である。あっさり気絶させられた僕は町外れの小屋みたいな所に手足を拘束されて閉じ込められ、口をガムテープで止められた。

気がついた時は本当に気が滅入ったなあ。冗談じゃ無いって思った。本当に殺されてしまうのではないかと思った。

まあ、その後先輩が小屋まで来てくれて助かったのだけれど、今考えてみれば僕を閉じ込めた犯人も先輩によって狂気化された被害者って事だな。

結局、全て先輩が悪い。

どうか、犯人捕まえたけど結構犠牲者とか出ていたみたいだし……。

きつと先輩は本当に人の命を軽く捉えている様だ。

「僕も美奈も、何時先輩に飽きられて狂気にされるか分かったもんじゃないな」

そう、此処で一番回避する事は、僕。または美奈が先輩に狂気されてしまう事だ。僕が狂気になれば多分美奈を殺すし、美奈が狂気になれば僕を殺しに掛かる。核心は無いけど先輩ならばそう言う展開にしてくるはずだ。だから、僕は絶対に先輩に飽きられてはいけない。

僕は人をまだ殺したくない。

もちろん美奈が人を殺している所なんて持つてのほかだ。もしそうになったら僕は人生を捨てる覚悟で先輩を殺しに掛かるだろう。

自分に人を殺せる覚悟が有ればの話だけど。

はたして僕には人を殺せる度胸、もしくは覚悟があるのだろうか？

「……………ないな」

そう呟いて玄関扉を開け、家に入った。

一章 目的 (2) (前書き)

一章 目的(2)

風呂から上がってアイスを頬張るのはいつもの事だけど、風呂から上がっていきなり誰かと話したいと思ったのは初めてだったかも知れない。

どうも明日の事ばかり考えてしまい既に気疲れを起こしているようだ。だからきつと誰かから安らぎを貰いたいのだろう。そういう場合はやはり女の子と会話するのが一番だ。

とは言っても僕の携帯に入っている女の子の携帯番号は美奈と先輩だけだ。どうも女の子との交流は苦手で何を話せば良いかわからない。しかも僕はイケている男子でも無いので女の子の携帯番号を入手するのは困難を極めるだろう。

別に欲しいとも思わないけれども。

結果電話を掛けた相手は美奈。先輩に電話を掛けた所で余計に疲れるだけだ。あの人は癒しを与えというよりも苦痛を与えてくる人だからなあ。

携帯でコールをすること、一回、二回、三回、四、五、六、七……。

もしかすると出ないのではと焦りながらも九回目のコールで美奈が出た。

『もしもし、縁どうしたの?』

電話に出てくれた事にホッと胸を撫で下ろしながら答える。

「いや、余りに暇だったから」

癒して欲しくて。なんて言える訳が無い。そんな事を言えば羞恥で死んでしまうかも。

美奈は『はは』と軽く笑う。

『縁がそんな理由で電話掛けてくるなんてね。思っただけど最近縁はやたらあたしに構ってくれるよね?』

ギクリとした。確かに構いまくっている。でもそうしなければ誰

かに美奈を奪われそうで怖いのだ。

僕は心拍数を抑えようと必死になりながら喋る。

「違うよ、やる事無いからお前に構っているだけだ」

『またまたあ、寂しかったんでしょ？ もう少し素直になりなさい』
お母さんかお前は。

「そんな事より、今お前はなにしてるんだ？」

話を逸らす為に別の話を振ってみた。美奈は基本突っ込んだ話はしないので、この手は良く使う。

『今？ 今は風呂上がって部屋に戻ってきたばかりだよ？』

「…………ヘー」だから、電話に出るのが遅かったのか「俺も丁度風呂から上がったばかりだ」

『ふーん…………縁っていつもお風呂入る長さってどれ位？』

「ん？ 風呂に入っている時間？ それってお湯に使っている時間の事か？」

『違うわよ。髪とか洗うのも全部含めての時間』

…………全部含めてか。実際に計った事とか無いからよく分からないなあ。大体計った奴とかいるのか？ いや、世界の何処かに居るだろうな。きつと。

「大体…………二十五分ぐらい。かな？」

大体と言つか、完全適当に答えた。だって分からないものは分からない。

『男の人ってそれぐらいか。あたしの場合は四十分ぐらい掛かる』

「ちょ、四十分も風呂で何しているんだよ？」

『あたしはアンタと違って、髪が少し長いから頭を洗うのも大変だし、お湯には長く浸かりたいタイプなの』

ああ、なるほど。それなら納得だ。僕だってお湯に長く浸かりたい時はある。そう言えば最近温泉とか行った事ないなあ。行ける暇があつたら行きたいけど、行ける暇は…………ないな。

「あんまり長く浸かるとのぼせるんじゃないのか？」

『慣れればいける』

「……………」慣れってなんだ？

でも一度だけ、温泉で粘って一時間ぐらい浸かっていたらのぼせて気持ち悪くなったんだよな。おかげでコーヒー牛乳飲めなかった。まあ、どうでも良いけど。

『かるーくのぼせた後のアイスがたまらないのよ』

結果のぼせているのかよ。まあ、アイスは美味しいけどさ。大体のぼせたら食べ物食べる気分じゃなくなるだろう………さてよ。アイスとかスーッとしたものだったら食べたくなってもおかしくないのか？　もしも僕がのぼせたとしてアイスが目の前にあったとしたら

『そう言えば縁はどうして明日の交流会が嫌なの？』

「えっ」

『何よ、とぼけるつもり？　あたしでも縁が交流会に行くのを嫌がっている事ぐらい分かるわ』

「……………」

とぼけるつもりは無いが、相変わらず勘の鋭い奴だなあ。いや僕が単純だから分かり易いだけなのか？　確かに僕は直ぐ態度で表す所があるからそう思われても不思議ではない。

『ちよつと黙ってないで何か喋ってよ。もしかして今ので期限悪くした？』

「あ、いや。機嫌は悪くしていないよ。まあ交流会に行くのが面倒臭いんだ。知らない人と関わるのは得意じゃないし」

すると美奈は『ふふっ』と笑る。

『たしかに縁は初対面の人と話すのヘタクソだもんね。ま、明日はあたしが付いているから大丈夫よ』

「ああ、ありがとう」

『って言うか話し始めたばっかだけどそろそろ髪を乾かしたいから通話を止めて良い？　放置しておくとか変な癖が付いて直すの大変なのよ』

「別に良いぞ」

『うん、せっかく掛けてくれたのにごめんね、じゃ』

そう言つと美奈は通話を躊躇う事なく切つた。僕の耳にツーツと通話が終わった事を示す音が入り込む。

「大丈夫なものか」

僕はそう一人で呟いた。

明日の交流会。美奈だけは絶対に参加などさせたくなかつた。無理にでも休んで欲しく位だ。だって狂気に染まつた人間が最低一人はいるんだぜ？ そんな危険な場所に行かせたい訳無いじゃないか。でも、時間は確実に明日へ向けて進行する。

……たぶん明日一人は死ぬな。

そんな予想をしたくも無いのにしてしまつた。まるで自分が人の死に少しずつ慣れているみたいで気持ち悪くなる。

先輩に突き合わされていれば何時か慣れてしまふのだろうか？

何とも思わなくなつてしまふのだろうか？ それとも――

それが快樂になつてしまふのか？

「ありえない――よな？」

そう言つのは先輩の様に無限の時間が手に入つた場合だろう。あの人の場合自殺すれば簡単にリセット出来るだからいくらでもやり直しは利く。

「それが魔法使いの最大のメリットであり、デメリットである。か」別に魔法使いがうらやましいとは思わない。むしろ魔法使いなんぞなりたくない。普通で良い、普通に生きて普通に恋をしたいんだ。でも、たしか誰かが言つていたなあ。

普通ほど難しいものは無い。と、

たしかにその通りかも知れない。

次の日。僕と美奈は同じバスで隣町の高校へ向かつていた。

美奈は僕の隣で窓際の席に座りずっと外を眺めている。ちなみにメガネのフレームは白だ。白と言う事は余り調子が優れていないら

しい。

僕も調子は優れていない。だってこれから人が死ぬ場所へ向かうようなものだから調子が良い訳が無いのだ。

「はぁ」

僕がため息を付いて俯くと視界の左側に美奈の太股が入り込んだ。少し地味目の美奈でも制服のスカートは結構短い。美奈はなかなか魅力的な太股をしており、どうしてもそこに目がいつてしまう。

——僕も男だな。

実際に触ってみたくなる程に美奈の太股から魅力は感じたのは初めてだった。きつと柔らかいのだろう。サラサラしているのである。しかしながらここで触って美奈との関係を壊す積もりは無い。そんな事をしてしまつては全てが水の泡だ。

だから、今は美奈を眺めるだけで我慢しよう。

そう思つて顔を上げると偶然にも美奈と目が合った。

「なに？」

太股を見ているのは駄目だと思つたから顔を上げると偶然目が合った。なんて口が裂けても言えない。

「いや、今日のフレームが白だから、なんか嫌な事でもあったのかなーって思つただけ」

そう言つと美奈はおでこに手を当てて顔をしかめた。

「なんと言つか。妙な気分なんだよね。別に嫌な事とかがあつた訳でもないのに気分が全然上がらない。それに朝から背筋が寒いというか、体を上手く動かせないような寒気がする」

まるで、これから危険な事が起きるのを察知している様な物言いだな。しかし、本当に起きてしまうのだから仕方がない。

……果たして仕方ないで済ませて良いのか？

先輩を止めるだけ、それだけで防げる事なのにそれが出来ない僕は……。

「……………うう」

こんな事を考えるのは止めよう。どうせ考えた所で僕に先輩を止

める度胸など無い。

考えれば考える程、自分を追い詰めて苦しくするだけだ。

「あ、そう言えば先輩はどうしたのかな。このバスに乗っていないって事は自家用車？」

「ああ、それなら朝連絡が来て、私は部長だから一本先のバスに乗って交流会の準備を手伝うって言ってたな」

美奈が首を傾げて不満そうな態度を取る。

「え、どうやって先輩から連絡受けたの？」

「え、ああ。いや」しまった。余計な事を言ったか？

どうも美奈は自分が知らない間に僕が他の女の人と連絡を取り合っていたら機嫌が悪くなるんだよな。一度へそを曲げるとなかなか機嫌が直らないし。

今、思えばそれは美奈が僕の事を思っているからこんな態度を取ってくれているんだよな。昔の僕はそれに全く気付けなくて、ウザッたか思っていた程だ。

「ごめん。美奈が知らない内に先輩とメアドと携帯番号を交換した」素直に頭を下げた。美奈に謝ったのは久しぶりっと言う程では無いけど、ここはしっかり誤っておこう。その方が楽だし、自分の為にもなる。

頭を上げると美奈が引き気味になって驚いた顔をしていた。

「ど、どうしたの？ やけに……素直……」

裏目に出てしまった様だ。逆に引いている。けど怒らせるよりマシ……だな。

「別に、美奈が気にしているみたいだから謝っただけだよ。僕は素直なんかじゃない」

「何そのツンデレみたいな態度は……ヒロインでも狙っているの？」

ヒロイン？ 僕が？ あり得ない。と言つかあつて欲しくない。

「ヒロインねえ」

僕は意味も無く手の平を見た。相変わらず生命線が短い、頭脳線も長いわけじゃない。テレビでよく手相の番組がやっているけど、

そういう番組で僕が唯一見つけたのは性欲がずば抜けて強いって言うものだった。正直ふざけるなと思った。

用は性欲が強い男のヒロインを求める人物の趣味は大体特定されるから、僕的には願い下げという訳だ。

「なあ、美奈は漫画家目指しているんだろ？」

美奈は窓際に肘を着いて外を眺めながら答える。

「そうだけどうかしたの？」

「いや、物語を書く際に主人公を男にしたとしたら、ヒロインは飛びつきり可愛い子を描くのかなーって思っただけ」

「うーん……あたしの場合可愛いヒロインと言うよりカッコいいヒロインを描くタイプだからなあ。あの一緒に戦ってくれる頼りがいのあるヒロイン。それに今まで描いてきた物語の大体は主人公よりヒロインが強い設定だね」

なるほど。ヒロインが敵ボコボコにして、ここぞと言うときに主人公が活躍する。見たいな話か。僕も嫌いじゃないけどな、そういう物語。

「じゃあ縁に聞くけど主人公はヘタレタイプが好き？ それとも強い系？」

「強い系かな？」

ヘタレだとまるで自分を見ているみたいで嫌だ。いや、実際僕はヘタレ主人公以下だ。本当に何一つ行動を起こせない。

「強い系か。あたしはヘタレの方が好きかな？ 強いヒロインがヘタレ主人公を救うなんて見ていてたまらない」

「ふーん」

やっぱりこういう話になると美奈は急に熱が入るな。さすが漫画家を目指しているだけある。

そう、感心しながら美奈の話を聞いていると、美奈は急に落ち込んだような顔をして、俯いた。

「でも、漫画業界で厳しいのよね。あたしみたいな実力じゃ足元にも及ばない」

僕はそんな美奈を見ていられず、目を逸らしながら肩に手を置いた。

「まあ、自分の夢が簡単に叶うんじゃないだろ？　むしろ難しい夢があるって良い事だと僕は思う」

僕は自分が絶対にそう思えない様な言葉を平気で美奈にかけていた。

それでも、美奈は笑って言うんだ「ありがとう」て。

そして僕は「別に良いよ」て、答える。

ああ、僕はまた自分に嘘をついてしまった。

そんな後悔をしながら僕も外の風景を見ようと窓に視線を移した時であつた。

「おい、前のお二人さん。もしかして西高の美術部員かい？」

少し高めの声が後ろから聞こえてくる。

僕と美奈が同時に後ろを振り返ると、そこには髪をポニーテールにし、目がパツチリとした女の人が僕達の座席に手を付いて此方に乗り出していた。雰囲気的には年上に思える。

美奈はその女の人に礼儀正しく挨拶する。

「はい、西口高校美術部の小山美奈と申します。あのー、どちら様ですか？」

女の人はニコツリ笑い自己紹介を始めた。

「ワタシの名前は多野田志乃得^{たのたしのえ}、北口高校美術部部长さ。その様子からすると今日の交流会に誘われたの？」

「はい、そうです」

「やっぱりそうだと思った。それにしても東高の部長さんも生きな事を考えるね、交流会とは確かに他校の人が書いた絵は気になるのは納得できる。ワタシだって一度で良いから見てみたいと思っていた矢先にこの企画が来たもんだからビックリしたよー。まあ、ここ出会えたのも何かの縁だから仲良くしましょー！」

「あ、はい。よろしくお願いします」

そう言い美奈は座りながら礼をした。

よく初対面の人にここまで口が回るものだ。ある意味才能だな。

余りの口数の多さに美奈も圧倒されているみたいだ。

「それにしてもさー、北高から東高ってやたら遠いんだよねー、おかげ様で休日なのに六時起きになっちゃった。凄く眠くて今にも寝ちゃそう。でも、交流会が楽しみだから眠気なんか吹っ飛ばしていこーみたいなね」

「は、はあ」

「そう言えば君達は絵を描き始めてどれ位なの？　ちなみにワタシは三年目！　人ってある程度まではすぐ上達するけど、そこから進歩するのが大変なんだよねー。ワタシなんか一向に上手くなる気配ないし、でも描かなきゃ上手くならないし、やっぱり積み重ねって大切って事かな？」

「……………」

向こうが質問したのにその後の話が長くて質問に答えられねえ。

「あ。でもさ、いくらやつても上手くならないものってあるよね。

人間って結構才能で左右されやすいから、大した努力もしていないのに大物になれる人もいれば努力しまくっても未だ報われない人とかも大勢いるしね。ワタシが思うに人間誰でも何かの才能を持つている。でも、大体の人物は自分の才能に気付けなくて死んでしまうみたいな人が多いんじゃないのかなーって思っているんだ」

「そ、そんなんですか」

美奈もこのマシンガントークにたじたじのようだ。てかこの人、ほつといたらずっと一人で喋っているんじゃないのか？

バスの中で大きい声で喋り続ける志乃得さんは明らかに周りから浮いていたが、そんな事を気にする様子も無く喋り続ける。

「あ、そういえばさー。ワタシの後輩の池田って奴がいるんだけどね。そいつが東高へは自家用車で行くって言ったから、ワタシも一緒に乗せてって頼んだら。先輩は色んな意味で無理ですって言われたの。ちよつと酷くない？　一応ワタシ先輩だよ？」

いやあ。多分その池田とか言う奴は自分の自家用車に彼方を乗せ

ると確実に彼方一人で喋りすぎるから嫌だったんじゃないのでしょうか？　と心の中で呟く。

僕が呆れながらも志乃得さんを眺めていると、志乃得さんは急にハツとした顔になり僕と美奈を交互に見た。

「ところでさ。お二人さんどちらが北高の部長さん？」

志乃得さんにしては凄く短い言葉だった。

「あの、部長は一本先にバスで東高校に行っちゃったんです」

美奈の丁寧な説明に志乃得さんは「おお、なっとく」と言っただけとらしく右手で握り拳を作り、それを振り下ろして左手に当て、その後直ぐに気まずそうな顔をした。

「あちゃー、そっちの部長さんが早く行ったのならワタシも早く行けばよかった」

きつとこの人が早く来てしまったら、東高の美術部員はマシンガントークの餌食になっていたんだろうなあ。

志乃得さんに気を使ったのか美奈が声を掛ける。

「交流会の開始時刻は九時過ぎですし、遅刻した所で美術部員以外に美術室を使う人なんて普通いませんから時間は余り気にしなくても大丈夫だと思いますよ？」

すると、志乃得さんは指を立てて左右に振りながら舌を鳴らした。
「ぶっちゃけ言っと今日の楽しみで交流会は二番手なんだよね、さで。ここで問題！　今日ワタシが一番楽しみにしている事はなんでしょーう！　ヒント、あなた達の部長」

「……………」

ほんと元気な人だな。いや、元気すぎる。

「こーら、無言にならない！　ワザワザこの暇なバス時間を利用して問題をだしたのだからしっかり答えなさい！　あ、あと二人で相談してもオツケー」

はあ…………　まあ、実際相談するまでも無い。うちの部長に関わりなのならばほぼ確実にアレだな。

「先輩、名探偵道絵梨紗を一目で良いから見てみたい、または先輩

と一緒にいると高確率で何かしらの事件に巻き込まれるから、自分も事件に巻き込まれたい。のどちらかって所ですかね？」

志乃得さんが目を見開いて僕を見る。とっても大きな目だった。

「ほうほう、少年。どちらも正解だ。一度で良いからあの名探偵を拝見してみたかった。で、運が良い………ううん。運が悪ければ事件に巻き込まれる予定なの」

運が悪ければ、ね。あの人と関わっていたら運が良くても事件に巻き込まれてしまう。

「じゃあきつと、今日は志乃得さんにとって最高の厄日になりますよ」

「ちよ、縁！ 何失礼なこと言っているのよ！」

志乃得さんは無表情ながらも目が明らかに笑っている感じで言っ
た。

「良い厄日になると良いわね」

なんだか波乱の予感がする。

一章 目的(3)

バスから降りて歩く事五分で東口高校に到着した。

ちなみに僕と志乃得さんはあれから一言も会話をしていない。でも変にギクシャクした感じはしないからきつと大丈夫だろう。

校門通りぬけを高校に敷地内に入る。校門には宮殿とかについていそうな檻っぽい扉が付けられていて、後は三メートルはあろう堀で校舎は囲まれていた。

東高には時を戻す前に一度、今みたいに交流会で着たことがある。でもその時、北高は交流会に参加していなかったはずだ。やはり先輩の言うとおり、まき戻した時間には誤差が生じるのか。

生徒玄関に入り、元々持ってきておいた上履きに履き替える。

「ワタシこの学校に入るの初めてなんだけど、お二人さんは美術室の場所分かるの？ 言っとくけど知りませんとは言わせない」

じゃあ本当に美術室の行き方が分からなかったらどう答えれば良いんだよ。

「いや、僕知っているから大丈夫ですよ」

「えっ？ 縁この学校来たことあるの？」

「来たことあると言えばあるし、無いといえは無い」

「何、その曖昧な答え」

そんな、疑いの目をされても、実際にそうなのだからこれ以上どう説明すれば良いか分からない。

美奈の視線を気にしつつ美術室へと向かう。前にも思ったがこの東高は西高と違って何かと豪華な気がするな。なんというか全体的に広い。学校全体は圧倒的に広いし、廊下も少し広めだ。僕の記憶が正しければ美術室も西高に比べて約一・五倍は広かったはず。

田舎者の僕にとっては実際の所、この学校が大きいのか僕が通っている高校が小さいだけなのか良くわからない。これは悪魔で僕からの視線で大きく感じるだけだから、実際は普通の大きさなのかも。

生徒玄関から続いている廊下をまっすぐに歩いていくと体育間の扉から右方向に廊下は続いている。その先に進んだ場所に美術室があった。

「どうやら僕の記憶力も捨てたものではないらしい。」

「少年、ここが美術室かい？　もしそうならばこの学校相当裕福だとワタシは推測するけど、そちらさんはどう思う？」

「多分裕福な学校なんじゃないんでしょうか？」

「そう適当に答えて僕は美術室の扉を開けた。」

美術室には夥しい量の絵がズラツと並べられており、どれもコレも途轍もなく綺麗で繊細な美しさを漂わせていた。そして、部屋の真ん中当たりにあるテーブルを囲む様に座っている三人が此方に視線を向ける。

「あら、野田君。思ったより早く着たわね」

「……………」

すでに分かっていると思うが座っている三人の内一人は先輩だ。残りの二人は多分この高校の生徒だと思われる。

一人は短髪で頭に可愛らしいリボンをつけている女の人。もう一人は目つきが悪く余り人を寄せ付けない様な雰囲気を出している男の人だった。

テーブルの上には先輩が書いた絵が置かれており、どうやら三人でその絵を見ていた様だ。

女の人の方が言う。

「えっと、道さんの後輩さんですか？」

「ええ、そうよ。男の子の方が、野田縁、女の子の方が小山美奈よ」とすると女の人は立ち上がり一歩前に出てお辞儀をした。

「はじめまして、東高美術部部長の佐井光と申します。さいひかりせつかくの交流会ですので仲良くしましょうね」

「よ、よろしく願います」

美奈は何だか慣れない様子でお辞儀をした。これは……まあ、僕のお辞儀をするべきなんだろうな。

「よろしく願います」軽くお辞儀。

光さんは可愛らしい笑みを見せて手招きをする。

「立っているのもなんですから、どうぞ此方に来て腰掛けてください」

……魅力的な人だ。

僕はこのたった数秒間のやり取りでそう思った。僕の勘が外れていなければきっと五回は別々の男子に告白された事がある筈だ（もちろんその全てを断る）ある意味、女性から妬まれるタイプの女性だな。

僕と美奈は光さんに吸い込まれる様にテーブルの所まで移動し近くにある椅子に腰を下ろした。右隣に美奈、左隣に先輩が座っていると云う形だ。

テーブルを挟んでほぼ僕の正面に座っている光さんが言う。

「野田さんも小山さんも余り緊張せずリラックスなさって結構ですからね」

「はあ、どうも」「お気遣いありがとうございます」

僕は思った。

こういう人に限って、心の闇は大きい。

もしかすると今回に狂気になるのはこの人かも知れない。と、

いや、偏見でものを思いすぎだな。実際は本当に心が綺麗な妖精っぽいという可能性も無い訳では無い。人の内面ほど詠みにくいものは無いからな。

僕が一人でそう納得していると突如後ろから奇声が沸きあがった。

「あんたらワタシを無視するなあアアアアアあああああああああああああああ！」

奇声のような声で叫んだのはもちろん志乃得さんだった。どうやら仲間はずれにされた事が相当気に食わなかったらしい。それにしても非常に不快な気分になる叫び声だなあ。「ワタシは！？ワタシの自己紹介は何処に行ったの！？部長の癖に一番来るのが遅かったからワタシをいじめているの！？」

なんだか面倒臭い事を言い出したぞ。変に被害妄想が膨らまなければ良いが。志乃得さんを見た光さんはガタツといきなり椅子から立ち上がって、驚いている様な顔をした。

「えっと……道さんの後輩さんですか？」

「違うわ、見た事も無い」

「ひどい!?」

たしかに酷い。志乃得さんは確かにウザいかも知れないけど、先輩の扱いは酷い。本当に酷い。「ワタシは北口高校の美術部部长よ！」

すると光さんはハツとした顔になった。

「あ、そういえば北口高校も誘っていたんでした！完全に忘れてました、すいませんね」　うわぁ。

もしかしてこの人天然なのか？

「酷い！　誘つといて忘れるなんて酷すぎるよ！　佐井さんとやらあー！」

でも、志乃得さんのテンションを見る限りでは問題なさそうだ。と思ってしまうた。と言うかウザさに磨きが掛かっているのは気のせいだろうか。

「取り敢えず自己紹介お願いしますね」

志乃得さんのウザい行動に対しても笑みを崩す事ない光さんは大人だなあ。

「うい、ワタシは多野田志乃得、北口高校の美術部部长、趣味はペン回し、本業は絵描きさん、そういえば北口高校を誘った事を忘れていたって事はまだ池田は来ていないのか……　まったくけしからん」

おい、自己紹介のはずが後半全然違う事行ってるぞこの人。

「多野田さんですね。どうぞこちらにお座りください」

「おお、すまんね」

途轍もなく丁寧な光さんと途轍もなくガサツな志乃得さん。なんだか対照的で見ていて結構面白く感じるぞ。

僕が光さんと志乃得さんを見てみると、光さんの隣に座る目つき

の悪い男がいきなり立ち上がった。

それにより回りの皆は一斉に視線を男の方へ向ける。

そんな状況に彼は焦ることなく口を開いた。「……篠崎敬、副部長だ」それだけ言っただけで男は座った。

まさかこのタイミングで強引に自己紹介してくると思わなかった。

なんだか篠崎さんだけ、回りとは少し違う感じがするな。さきほどから何が起きても全く動じた様子を見せないし、無表情だ。きつと元々顔に出さない人なんだろう。

「大体の人はそろいましたね……ええと人数的に後お一人でしょうか？」光さんが言う。

後お一人って事は今回の交流会、南口高校は参加しないって事か。志乃得さんが軽く舌打ちをする。

「池田の奴め、もう少しで遅刻だぞ……もし遅れてきたら叱ってやらないと……」ああ、そうか。後一人って多分志乃得さんの後輩の池田って奴か。

僕が意味無く志乃得さんを眺めていたら左隣に座る先輩が話しかけてきた。「ねえ、野田君。なかなか個性的なメンバーがそろったと思わない？」

「……………」

個性的、か。たしかに無表情な奴もいればマシンガントークをする人や丁寧な人もいる。個性的といえば個性的かもしれない。

先輩は目を細めて言う。

「誰が……狂気になるのかしら？」「誰、でしょうね」知りたくも無い。「安心しなさい。野田君と美奈ちゃんは狂気にならない用に細工しておいたから、犯人は今日ここで今テーブルに置いてある私の絵を見た人間よ」

「そいつはどうも」

たぶん先輩の事だから嘘はついていないと思う。

実は先輩の絵には人間一人を狂気にする力しか無いらしいので、

犯人は一人、共犯は無しだ。それに突発的に人を殺そうと思うのではなく、少しずつ体に毒が回るように心が狂気に染まっていくそうだから。犯人になった人間はある程度冷静に行動してくる。

まったく、やっかいな魔法だ。

取り敢えずここですべき事は絶対に美奈に単独行動をさせない事だ。いや、僕が付いていない状態で行動させる事は絶対にさせてはいけない。はっきり先輩の絵を見た時点ですでにここにいる人達は美奈以外信用する事ができない。できるはずが無い。

「美奈」

呼んだつもりは無かったのだけれど、名前を呟いた事により美奈は髪を揺らしながら此方を見る。「ん、なに？」「勝手に何処かへ行くなよ」

「なによ、急に。変なの」

「わるかったな」

くそ、ワザワザ心配してやっているのになんて奴だ。

まあ、仕方ないか。これから誰かが殺されるなんて僕と先輩しか知らない事だし、そんな事を言った所で信じてくれる人なんているはずが無い。

「それにしても、綺麗な絵ですね」光さんが言った。

そんな絵に注目を集めるのは正直簡便してほしい。綺麗な絵だが僕は見たくもないね。

「なんというか、色合いが独特ですよ。私にはとても出来ない。

はかない美しさを漂わせいる気がします」

はかない美しさねえ。僕は絵を描く事は好きだけど。芸術とかそういうのは良く分からないんだよ。実際名のある芸術家の絵を見て、凄いと思うけど感動まではしない。

「うわー本当だ。すげー、これは普通の上手さじゃないね。なんと
いうか才能？ センス？ またはそれらと違う何か？ 取り敢えず
常人の腕じゃないね。それに相当細かい。ワタシなんて色は基本的
に適当に塗っちゃうから絶対描けないね。これ何処かの賞にでも出

したら受賞するぐらい上手いとワタシは思うよ」

志乃得さんのマシンガントークを始めた。まいったな、ここにいる人達じゃきつと付いていけないぞ。大体志乃得さんは言いたい事を一気に言いすぎなんだ。もう少し分割して話せれば相当喋りが上手い人になると思う。

「しかもさ、この絵の大きさね、大きすぎず小さすぎないこの大きさが何とも言えない魅力を生み出している、それに何より見やすい。変に激しい色合いじゃないからとっても見やすいんだよ。たまに激しい色を使いすぎて目がチカチカする作品とかあるじゃん。ワタシはああ言うのはちよつと、と言うか凄く嫌いだね」

志乃得さんは皆が困っているが分からない様だ。いや、困っているのは分かっているが喋る事を我慢できないだけなのか？

ホントに、まったく。やれやれ……だ。

ようやく志乃得さんのマシンガントークが収まったのは時刻が十時過ぎになってからだった。

もちろんこの場に居る人々は志乃得さんが喋っている間、得に何かする訳でもなく、ただただマシンガントークに圧倒されるだけであつた。

志乃得さんの喋りが収まった後は光さんが「皆さん個人個人で絵を描いて見せ合いましよう、お題は《春》です」と言つた事をきっかけに皆は個人で絵を描く事になったのだが僕や美奈、志乃得さんと先輩は絵を描くための道具を持ってきたていなかったので光さんが学校に置いてある道具を貸してもらい描く事に。

まあ貸してくれたと言っても、絵を描くためのキャンバスとそれを立てる為のイーゼル、あとは鉛筆である。色を付ける時間は無いので下書きが出来上がった程度で良いらしい。

僕は鉛筆をキャンバスに走らせながら回りを見た。

「うわぁ」

光さんは細かさ、志乃得さんは描くスピードが以上に突出されているようで上手かった、そして何より篠崎さんの絵の描き方が恐ろしく独特で、普通ならば何度も線を入れて形や立体感を出す所をほとんど一筆描きの様に描いて見事に《春》を表現し始めている。

僕も一度時をまき戻しているから前より絵が上手くなっているはずなのだが、全然敵う気がしない。

少しショックを受けながらも僕は自分の絵に集中する為目の前のキャンバスに視線を移す。するとある事に気づいた。

そう言えば、前にこの高校の交流会に参加した時の部長は光さんじゃなかったはずだ、大体副部長が篠崎さんでもなかった気がする。たしか……男の部長で……。駄目だ、思い出せない。

記憶に霧が掛かった様な感覚にイライラしていると志乃得さんがぼやいた。

「あー、つか。今日池田は完全に遅刻だな。いやむしろ来ないかもしれない。もし来なかったら退部にしてやるアイツ」

そんなアツサリ退部って、確かに遅刻したり来なかったりしたらそいつが悪いけどワザワザ退部にするのはちょっと可愛そうな気がする。

僕は横目で美奈を見る。

なんだか必死にキャンバスに向かっていているなあ。多分回りの人達の絵が上手いから焦っているんだろう。事実、凄く困った顔をしている。

……もう少しだけ美奈を眺めていよう。

そう思った途端である。

美奈と目が合った。

「なに？」

「いや、なんでもない」

少し焦ったので、急いでキャンバスに向かい絵を描く作業にもどった。

ああ、もう少しだけ眺めていたかったんだけどな。ちょっと残念。

「……………うお!？」

作業に戻って十秒も経たない内にいきなり僕の携帯がなった。しまった。マナーモードにする事をすっかり忘れていた。

回りを気にしながら僕は急いで携帯をポケットから取り出して液晶を確認する。単なる登録サイトからのメールだった。くそ、タイミングが悪すぎだっつーの。

急いで携帯をマナーモードにしてポケットにしまうと篠崎さんが「あ」と声を上げた。

「そう言えば、携帯を教室に忘れた」

そう言い残し、篠崎さんは美術室から出て行った、多分忘れた携帯を取りに行ったのだろう。

それと同時に光さんが席を立った。

「すいません、ちょっとお手洗いに行ってきますね」

「あ、あの!」

美奈が物凄い速さで立ち上がる。

「あたしも付いていつて良いですか!？」

どうやら美奈トイレをずっと我慢していた様だ。そりゃ初めて来る所ならトイレの場所なんて分からないし美奈の性格からして光さんとかにトイレの場所を聞く事も気が引けていたのだろう。

光さんは美奈に対して微笑む。

「大丈夫ですよ、分からない事があつたら気にせず私に聞いてくださいね」

「は、はい」

美奈は顔を真っ赤にしながら光さんと共に美術室から出て行った。急に人が減ったな。

そう思い、美術室を見渡していると志乃得さんがニヤニヤしながら此方を見ていた。

「なんですか?」

「いや、なんだかね。こうも急に人が少なくなると事件が起こるんじゃないかと思って」

その志乃得さんの言葉に反応する様に先輩が体を反転させてキヤンバスから志乃得さんに体を向ける。

「それは、それは私からすれば血が騒ぐわね」

「やっぱり名探偵って呼ばれているだけあって、そう言うタイプなの道さんは？」

「そうね、私は一つの事件を解決する事で最高のカタルシスを得る事が出来る、だから事件が起こると楽しくて仕方ないわ」

「ほうほう、楽しそうだね。ワタシも混ぜて欲しいくらい」

「じゃあ、もし事件が起きたのならば一緒に推理でもしましょうか？」

「あ、良いねそれ。物凄く楽しそう！」

まったく、血の氣が多い人達は嫌いだ。今回の起きるイベントは何だか荒れそうだぞ。

「もちろん野田君も参加してくれるわよね？」

先輩は僕に乾いた笑顔を向ける。

「……………どうでしょうね」

茶を濁す感じに答えておいた。絶対に先輩の推理ごっこに付き合わされる事が分かっていても素直に『はい』と答える事だけは絶対したくない。

「そう言えば今日の交流会って何時までを予定してるの？　ワタシ全然分らないんだけど」

何時まで交流会をするの聞いていないなあ。結構長い時間のような気がするけど。

志乃得さんの質問に先輩が答える。

「たしか十二時までじゃなかったかしら？　まあ回りの反応しだいでは引き伸ばして良いらしいけど」

「おお、だったら事件が起きるまで引き伸ばしてくれるとありがたい！」

僕は全然ありがたくない。

「ま、私がいるのならば何時何処で事件が起きてもおかしくないわ

ね。私、相当事件に好かれているみたいだし。ま、私自身もそう言う出来事が好きだけど」

「うう。わくわくする。ワタシもそう言う体質にならないかな？ 毎日エキサイティングに生きる事が出来そう」

「そう？ 私の中ではそう言う爆発した様な楽しみではなくて、冷ややかに淡々と楽しいって感じの毎日なのよね」

「それでも良いじゃん楽しいのならさー。ワタシなんて毎日退屈に暮らしているだけよ？ その内怠け者にでもなってしまうかも知れない」

志乃得さんは「はあ」とため息を付いて窓から外を眺める。

「とんでもない事件おきないかな」

すると先輩は「ふふ」と笑い近くのテーブルに頬杖をした。

「でも私並に事件に巻き込まれ続けたら警察に疑われ始めるのよ。最近はその事件を解決した後の事情聴取が長くて長くて参ったわ」

たしかに。前回の事件も僕は直ぐに終わった事情聴取が先輩だけやたらと長かった。やはり櫻庭さんは先輩を怪しんでいる様だ。でも――

でも、警察なんかでは先輩を止める事なんて出来ない。この人はすでに人間を超えた力を身に付けているのだから。

先輩は言葉を付け足す。

「まあ、事情聴取されるって言うスリルも嫌いではないのだけれどね」

その台詞を聞いた瞬間、志乃得さんの目つきが変わった。

「スリルね……じゃあやっぱり――今まで道さんが関わった事件は全て、道さんが引き起こしたって事？」

先輩は無表情で喋らない。

「だって、わざわざ事情聴取でスリルを感じるって事はスリルを感じてしまう様な事をしたって事よね？ スリルを感じてしまう事ってやっぱり悪い事なのかな？」

すると、先輩いきなりギリギリと歯軋りをならして目つきを鋭い

刃のように変化させて志乃得さんをにらみつけた。

「あてずっぱうで言ったつもりだけど、当たり前？」

「……………さあ、どうでしょう？」

……………めずらしい。

先輩がここまで憤慨するなんて滅多にない。きっと一般の人の隙を見せてしまい、そこ見事に付かれた事に苛立っているんだ。どうも先輩は人を見下す傾向があるからな。

「……………ずっと絵を見ていたから少し疲れたわね。ちょっと外の空気を吸ってくるわ」

そう言って席を立ち足早に美術室から先輩は出て行った。

志乃得さんは僕「えへへ」と笑いかけてくる。

「なんだか少年の先輩を怒らせてしまった様だね」

「あのー、先輩を怒らせると後々厄介ですよ。執念深い人ですし」「なーに、大丈夫だって。あの人普段は冷静そうだけど一度でもその冷静をぶち壊されたら何も出来なくなるタイプだよきっと、大体すこし自分の力みたいなものに自惚れている感じがビンビンするね。自惚れは自分を何時か陥れる。まあ、エンターテイナーとかの場合には自惚れ位が丁度良いと思うけど。だって自分の力を信じないと人を楽しませる事なんて出来ないもん。でも道さんは違う自分を楽しませる為の自惚れは意味をなさない。まあ、分かりきった様な事を言っているワタシも少し自分に酔っている所はあるけどね」

自分に酔う、か。僕は多分そんな事ないだろう。第一に僕は自分が大嫌いだからな。

「ところでさ、少年も何か道さんについて色々知っているじゃないの？」

「えっ？」

「だって、道さんに対する時だけ回りと少し態度が違うよね。なんて言うか怯えているって言うのかな？」

「……………」僕は答えない。

志乃得さんは自分の頭を掻いて怪訝そうな態度を取る。

「まあ、答えたくないのなら答えなく良いッス。尋問するのはワタシの柄じゃないし」

少しホツとした。多分問い詰められたのならば吐いていたか、この場から逃げ出していたがどちらかだろう。それにしても志乃得さんがここまで鋭い人とは思わなかった。

もしかすると今回の事件、先輩が解決する前にこの人が解決してしまうのんじゃないのか？

まあ、この人が狂気に染まっていなければの話だけど。

そう思った時だった。

「いやああああ！」

近くで高く透き通った様な叫び声が上がった。

この声は——美奈？

何時立ち上がったのか、何時美術室から出たのか分からなかった。ただただ急いでいた。急いで廊下に出たんだ。

すると長い廊下で僕と対向になるように立ち尽くす光さんと崩れ落ちる美奈がいた。

そして僕と二人の間に挟まれる様になっていたのは。

壁に赤いものを飛び散らせている物体。いや、物体ではない。人か。

体重を滅多刺しにされて血の池を作ってる死体。

それだけならまだ良い。それだけじゃない。

最大の問題は——

その死体の人は見覚えの無い男の人だった。

二章 仮面の下の狂気（1）

僕は取り敢えず死体を恐る恐る横切つて美奈と光さんの所に向かった。

光は立つてはいるものの放心状態。美奈はへたり込んで泣きじゃくっている。

「よくまあこんなにするまで……」

ぶっちゃけ言うとな殺人事件が起きるのは予想出来ていた。

先輩の事だ、きっとコレぐらいの出来事じゃないと刺激が足りないのだろう。

ボーっと立っていると美奈は急に僕の腕にしがみ付いてきた。ああ、そう言えば美奈は死体を見る事が始めてなのか。

僕は僕で死体を見るのは二度目だけどやっぱり死体って言うのはどうも慣れない。なんだか気分も悪くなってきた。

犯人はどうせ……と言うか絶対に先輩だ。

まったく、なんで此処まで感情が歪んでいるのか理解しがたい。

やはり永遠と続く歳月が先輩を狂わせてしまったのだろうか？

いや、そんな事を考えても無駄だな、起こってしまった事は仕方が無い。

……死体には無数に刺した後があつた。左胸にも刺し傷があるからこれが致命傷だろうか？

刺し傷良く見るとその部分から赤いものがドクドクと流れ出している。

——コレではまるで赤い池だ。

「……………」

考えても無駄だと分かっている。分かっているのに……。

「……ほんと」

どうしてこんな事になってしまったのだろうか。

僕は何をすれば良いのか分からずただ死体を見ながら立ち尽くし

ていると美術室から志乃得さんが出てきた。

「え」

志乃得さんは死体を見てちよつと驚いた後に死体の近くまで移動し、しゃがみ込んだ。

「……池田？」

……池田？ 池田つて志乃得さんの後輩だったよなあ。じゃあ目の前で死んでいるのはその池田なのか。

志乃得さんは泣き叫ぶ事も取り乱す事も無く立ち上がり頭を抱える。

「……だれよ。こんな事したの」

先輩だ。先輩しかいないだろう。

志乃得さんは顔を上げて喋りだす。

「これは警察に連絡した方が良さそうね……少年、ワタシ携帯を持つていないから代わりに掛けてくれない？」

「はい」

僕は携帯を取り出すそうとポケットを探りながら思った。

なんだ、あの志乃得さんの妙な落ち着きは、目の前で死んでいるのは自分の後輩なんだぞ。普通はもつと落ち着きの無い態度になるはずだ。

ポケットから携帯を取り出し、110番にコールする。

「あれ？」

『ただいま電波が届かない場所にいます』

と、言う事は――

僕は急いで携帯の液晶を見た。

「……………圏外、です」

「えっ？」

先輩め、魔法で何か細工をしたな。

「う…………じ、じゃああたしの…………携帯は？」

美奈が泣きながらそう言い僕に携帯を差し出してきた。

女の子の携帯を見る事は少し抵抗があるけれど、この際仕方ない。

もしかすると僕の携帯が壊れているだけかも知れないし。

そんな淡い希望を持ちながら僕はおそろおそろ美奈の携帯を開き電波状況を確認した。

「……………くそ」

やはり圏外。どうあがいても文明の力では魔法に適わないようだ。

「だめ……だったの？」

鼻をヒクつかせながら涙目で僕を見上げる美奈を見るとどうしても心が痛んだ。

「ごめん」

「縁は、悪く……ないよ」

「ごめん」

どうしても謝る事しか出来なかった。やっぱり昨日を無理やりにも来させない方が僕にとっても、美奈にとっても良かったんだ。それなのに僕は。

「携帯が無理なら取り敢えず皆を美術室に集めた方が良さそうね。でもどうやって皆を集めれば……え？」

志乃得さんが突如表情を変えて、驚愕の顔をする。

そして、物凄い勢いで叫んだ。

「少年！ 後ろお！」

それに反応して僕が反射的に振り返ると物凄いスピードで接近する黒い何か。

——人だ。ただの人じゃない。顔には般若の仮面、後はただ全身が黒尽くめ、両手には刃渡り二十センチ程のナイフ。

その片方は——真っ赤だった。

本能的に、流れるに僕は光さんの手と美奈の手を思いっきり引っぱり、美術室に向かって思いっきり走った。志乃得さんは一味先に美術室の扉を開いて何かを叫びながら手招きをしている。

くそ、光さんも美奈も死体を横切るのが怖いのか、全然走ろうとしない。これじゃあ追いつかれる。

焦りながら後ろを見ると黒尽くめはすでに僕の背後でナイフを振

り上げていた。

刺される。

そう思った刹那。

「しやがめえええええええ！」

志乃得さんが叫びながら美術室の椅子を片手に振りかぶっていた。僕は強引に前かがみに倒れる様、重心を移動させ手を掴んだ二人の体を無理やり倒させた。倒れると同時に僕達の頭上を椅子が通過して――

「——っ!？」 黒尽くめの奴に命中した。

「今のうちに早く！」

僕は急いで立ち上がって、二人を無理やり立たせ、黒尽くめが怯んでいる内に二人をほぼ引きずる様な形で美術室に逃げ込んだ。

「閉めるわよ！」

美術室に入ると同時に志乃得さんが扉をしめてガチャリと鍵を掛ける。が、

パンツと何かはじけ飛ぶ音がした。

「つ！」

黒ずくめの奴はナイフで扉のガラス部分を叩き割った様だ。コレでは美術室に侵入されてしまう。

「少年、ちよつと手伝え！ 撃退するよ！」

志乃得さんは近くにあったイーゼルで中に入って来ようとしている黒尽くめを殴りつけ始めた。

僕は少し戸惑いながらも近くにあった椅子を持ち上げて志乃得さんに加勢する。

「う……ががああああああああああ！」

さすがに二人係で殴りつけられた黒尽くめは美術室に入れないと判断したのか、いきなり咆哮をあげて真つ赤に染まつた方のナイフを物凄いスピードで投げつけてきた。

「うわあ！」

ナイフは僕の顔を横切って篠崎さんの書いていた絵に突き刺さ

った。この距離で突き刺さるってどんな腕力だよ。

「がががあああ！」

黒尽くめはナイフを廊下の壁ガンガン打ち付けて、怒り狂ったかの様に走り去って行った。

「……………」

そして、数秒の沈黙。

「あー、疲れた……………」

志乃得さんはそう言ってその場にへたり込んだ。僕もそれに続く様に床に座り込む。

「アレは何？ 人じゃない声上げているしさ。それに多分池田を殺したのアイツだよ。その証拠に片方のナイフが真っ赤だった。しかも、人をナイフで突き刺す事にまったく躊躇が無い。きつとあそこでワタシが椅子をぶん投げてなかったら三人のうち誰かが指されてたわ、まったく危ないったりやありやしない。しかも携帯が繋がらないって、篠崎とか言う奴と、名探偵さん殺されるんじゃないの？」

こんな状況でマシンガントークは健在かよ。

「いや、篠崎さんはどうか分かりませんが先輩はきつと大丈夫ですよ。あの人はああ見えて何度も修羅場を潜りぬけているはずですから……………」

そうさ、先輩は簡単に死ぬ人じゃないし、死んでも大丈夫な人間……………いや、死ねないって言ったほうが正しいのか。

僕の言葉に緊張感が一気に外れたのか志乃得さんは噴出した。

「ははは、そうだね。名探偵がナイフを持った奴程度に殺される程弱い訳ないもの。てか、そういう風に言うって事は道さんってなかなかの武道派なの？」

まあ、けっして強くないって訳ではないよな。

「まあ、強いんじゃないですか？」

「適当な答え方だね。まあいいや、そんな事より佐井さん。この学校の放送室って何処？」

「え？」

光さんは思いも寄らないタイミングで話しかけられた所為か途轍もなく焦っていた。

志乃得さんはもう一度質問を繰り返す。

「だから、この学校の放送室って何処って聞いているの。携帯が繋がらないんじゃない？ 篠崎さんと道さんに変な奴がうるついてるって伝えられないじゃん。でも構内放送でその事を伝えればワザワザ二人を探し出して伝える必要は全く無い。まあ、あの黒尽くめの男が放送室の場所を知っていたらちよいと厄介だけど」

なるほどね。たしかにその方がさっさと伝える事が出来る。

僕はそう納得しながらも、一つ引掛かる事を志乃得さんに質問した。

「志乃得さん」

「ん、なんだい少年？」

「確かに放送室でこの事を伝える事は正しい判断だと思います、でも、何であの黒尽くめの奴が男って断定できるんですか？ 顔に仮面をつけて全身は黒いマントみたいなもので覆われていたんですよ？」

すると志乃得さんは首を傾げた。

「え、だってアイツの叫び声からして明らかに男の声だよ？ それにアレ！」

そう言っただけで志乃得さんは篠崎さんの絵に突き刺さったナイフに指を刺した。

「あんな距離までナイフを飛ばして尚且つあんな綺麗に突き刺さる程の力があるって普通は男の人じゃない？」

「……たしかに」

納得だ、普通に考えて女の人があんな距離までナイフを飛ばし、そしてそれが突き刺さる程の力で投げられる訳が無い。それに声は男性特有の低さがあつた気がする。

「あのー、光さん。今学校に僕達以外で居る人っていますか？」

すると、光さんは少し考えてから答えた。

「えーと、多分学校を開けてくれた教頭先生と業務の人が二、三人程だと思いますけど」

「その内、この美術室に来た人はいますか？」

「え……たぶん居ないと思いますけど」

「そうですか」

と、言う事は普通に考えてあの黒尽くめの男は篠崎さんって考えるのが筋ってもんだ。

「あ、でも。わたし達が来る前に業務の人が何人かこの美術室に着たかも知れません」

「え？」

じゃあ業務の人が犯人ってパターンもあるなあ。たしか昨日の時点で先輩の絵はここに届いていたはずだし。

いや、僕が考えた所でたかが知れているな。この情報を先輩に伝えてこの事件をさっさと解決してもらうのが一番の近道だ。

「少年、なんでそんなどうでも良い事を聞くの？」

志乃得さんが、不審そうに此方を見ている。

「いや、ただ何と無くですよ。どんな情報で犯人が割り出せるか分かったものじゃないですから」

「ふーん、まあ良いや。ところで佐井さん、いい加減に放送室の場所を教えて欲しいのだけど」

「あ、はい。放送室は三階で丁度この美術室の真上です。でも放送をするのなら二階にある職員室の方が近いのでそっちらに向かった方が私的に良いかと」

「職員室ね、それならこここの教頭とやらにも会えると思うから丁度良いわ。職員室の場所は良く分からないから佐井さん、ワタシを連れて行ってくれない？」

光さんは少し間を置いてから躊躇いがちに首を縦に振った。

「よし、決まり。で、アンタたち二人はどうする？ ついてく、それともここに残る？」

安全を考えるのならばついていくべきだ。でも――

僕は美奈を見た。美奈は未だに混乱しているらしくずっと泣きじやくっている。

――もし黒尽くめの男に出会ってしまい逃げる事になったらこんな状態美奈を連れて逃げきる自身は僕には無い。それにもし何かの拍子で逸れてしまったら僕は確実に冷静じゃなくなるだろう。

「僕達は残ります。こんな状態の美奈を連れて歩くななんて僕には出来ない」

それにここで居ればいずれ先輩が戻ってくるはずだ……たぶん。

「わかった、取り敢えず放送が終わったらここにもどってくるわ。」

もし、帰ってきて二人が居なかったら黒尽くめの男に襲われたって判断して、校内を探し回るからね」

「分かりました」

「じゃ、行きましょう佐井さん」

「はい」

そう言って二人は美術室から出て行った。

美術室に残ったのは僕と美奈、二人だけ。

僕は床から立ち上がり立ったままずっと泣いている美奈に寄り添って、近くの椅子に座らせた。ついで僕も近くの椅子に座る。

さて、後は先輩が帰ってくるまでに黒尽くめの男がここに来ない事を祈るだけだ。帰ってくると言えばたしか篠崎さんは携帯を取りに行っただけなんだよなあ。だったら明らかに時間が掛かりすぎだし、やっぱり篠崎さんが怪しい所。

「ま、なるよーになるか」

「……縁」

「ん？」

名前を呼ばれたので美奈方を見ると彼女は弱弱しい顔で此方を見ている。まだ目が潤んでいる。

きつとあんな死体を見たから途轍もなくショックなのだろう。よく考えてみれば僕達はまだ十五歳。そんな歳で死体を見る人なんて

余りいないだろうし、しかもあんな滅多刺しにされている死体なんて普通の人ではお目に掛かれないう。

……僕は二度目だけ。

「……縁は、怖くないの？」

「なにが？」

分かっているはずなのに、ワザワザ質問で返す僕はとても意地悪かも知れない。

美奈はぶるぶる震えながら美術室の扉の方を見る。

「あんな……し、死体とか見て」

「大丈夫、ではないな。僕だって怖いけど、男の僕が焦っても回りを不安がらせるだけだからね。せめて平常心でいる様に見せかけているだけだよ」

理性と言ったった一枚の皮で平常心を装っている。理性なんて実際はもういし簡単に壊れてしまう。結局人間は本能には勝てないって事か。

「平常心に見せかけているだけでも凄いわよ、これでもおかげ様で少し安心しているのよ？」

「それを聞いて逆に僕が安心したよ」

「でも……もしあたしが襲われたら助けてくれる？」

「……………！」

びっくりした。

美奈にしてはありえないレベルの質問だったから。

僕は真剣に考える。

果たして自分の命と美奈の命どちらが大切なのか。

「後者でありたいなあ」

「どうしたの？ そんな真剣な顔して」

「え？ ああ、なんでもない」

「結局、助けてくれるのくれないの？」

「助けるよ。たぶん」

「……多分ね、まあ、多分でも縁に助けてくれるって言うてくれる

「んだから縁はやさしいよね」

やさしいのか？ 僕が。

よくよく考えてみると、僕は回りからやさしいなんて言葉は美奈以外一度も言われた事がない気がする。僕は誰か犠牲にして自分が助かるのなら平気で人を裏切る人だし、嘘や出任せはよくするし。どっちかと言えば最低に部類される人間だと思う。

「そう言う風に言える美奈がやさしいだけだよ」

「え？」

予想外の返答だったのか、美奈の顔を真っ赤に熟したトマトのようになった。

「あ、悪い。なんか変な事言った？」

「う、ううん。その逆、ちよっとうれしかった」

俯き加減でそう言う美奈は目眩を起こすレベルに可愛かった。

まったく、そんな事を言われてしまったら思わず守ってしまいたくなるぜ。

「やっぱりこうゆう所が縁のやさしい所だね」

「あんなあ美奈。僕は決して良い人なんかじゃないぞ？」

美奈は即動する。

「うん、縁は良い人じゃないね、やさしいけど」

「どういうことだ？ それ……」

やさしいけど、良い人では無いって矛盾している様な気がする。

美奈は僕に目を合わせて説明を始めた。

「用はアレだよ。やさしい人って言うのは、言葉をかけたりして人を励ます様な人、そして人を信じる人の事だよ。良い人って言うのは、嫌な事をしない人。たとえ、友達が悪い事をしていても注意はしない。つまり人畜無害つてのと同じかな？」

「つまり僕は罵倒を浴びせる人畜有害野郎って事になるな、それは僕の発言に美奈が困った顔になる。」

「なんで縁はそうやってネガティブなのかなー？ もうちょっとプラスに考えた方が楽だよ？」

「むしろネガティブに考えた方が僕の性に合っている。と言うか、そのほうが楽なんだよ。嫌な事が起きる心構えをしていた方が圧倒的に嫌な事が起きたときのダメージは少ないからな」

もしポジティブに物事を考えられるのなら、僕は時をまき戻す事無く、美奈と共に幸せに生きることが出来たのかも。別に今が幸せじゃないわけじゃないけど、もう少し僕だって欲張りしたいんだ。幸せが欲しいんだ。

「ダメージって、そこまで深刻な悩みでもあったの縁には？ あるんなら遠慮なく話してよ」

「たしかに悩みの一つ二つはあるけど美奈に話すような事じゃない。それに僕自体元々マイナス思考なのにそんな話をしたくないよ。余計に鬱になる」

先輩が魔法使いで人を狂気にするからどうしようなんて、アホらしくて話せる訳がない。美奈なら信じない事は無いかも知れないけれど、それで美奈を悩ませてしまったら僕は美奈の隣にいる刺客なんてなくなってしまう気がする。ただでさえ少し神経質なのに、変なストレスを与えてしまったら簡単に壊れてしまいそうで怖い。

「縁……それって——」

「え？」

気付くと美奈の顔が目の前にあった。

酷く近かったと思う。それはお互いの吐息が届く距離、鼻と鼻がぶつかるストレスの距離、そして——

異性ならば今すぐにでもキスしてしまうような距離だった。

二章 仮面の下の狂気（2）

異性ならば今すぐにでもキスしてしまうような距離だった。

「……………」

僕は黙り込む。

美奈は僕を見つめたまま、言葉を付け足した。

「あたし以外なら相談できる悩み？」

そんな事はない。

むしろ、美奈じゃないと相談なんて出来る内容じゃない。

でも、

僕は美奈に重荷を背負わせるつもり微塵も無い。

だから黙る。

ただ、黙る。

「……………」

黙っても引かないのならば、攻めるだけだ。

「ずっとそんな距離で見つめてたらキスするぞ」

普通に考えて、男にこんな事を言われたら引くだろう。引かない訳がない。もし引かないのであればそれは覚悟を決めているかアルコールで酔っているのどちらかだ。

美奈は少しの沈黙の後、僕の目をしっかりと見ながら答えた。

「……………してもいいよ」

「うええ！？」

まて、まてまて。

目が本気だ。覚悟を決めている。

自分でも想像以上、想定外のカウンターパンチだった。まさか許可してくるなんて全く思っていなかった。しかも美奈は覚悟を決めているようだ。

じゃあ、僕は覚悟を決めているのか？

今までろくに自分から行動を起こさなかった。プータローがここで覚悟を決めて残り数センチの空間を埋めるのか、それとも空間を開けて回避するのか。

答えは簡単だ。

出来るわけがない、今の僕では人とキスするなどの強い精神力と行動力は持ち合わせていない。てかすつごく怖い。

「悪いけど、僕からキスを求める自体がナンセンスだ。まあ、これは完全な黒歴史としてお互い無かった事にしようぜ」

「……………そんなにあたしとキスするの——嫌？」

「うん、嫌だ」 つい反射で逆の事を言った。殴られた。しかも、グー。僕は椅子から転げ落ち、そのまま床に頭を強打して仰向けに倒れこんだ。本当に幻覚が見えた。「…………ごめん、我慢できずに殴っちゃったわ」「ああ、別に良いよ…………あはは」 コレは利いた……。少なくとも女の子が出せるパンチではなかったと思う。まったく反応が出来なかったし、口から軽く血の味がするのは気のせいだろうか？ いや、気のせいであって欲しい。ふらふらに成りながらも僕は立ち上がり座っていた椅子に戻る。「もう少し手加減してくださいよ美奈さん…………頭がガンガンするッス」「失言した縁さんが悪いッス」 真似されながら答えられた。取り敢えずは僕たちの交友関係に亀裂が入った訳ではなさそうなので良しとしよう。 そんな事を思って半ば強引に自分を納得させる。そして美奈から視線を美術室の入り口に移すと丁度そのタイミングで扉が動いた。

「——えっ!？」

心臓は恐ろしい速度で加速し、背筋に悪寒が走る。

僕は震えながらも立ち上がって身構えた。

——もし、黒尽くめの男だったらお終いだ。

目を限界まで見開くような勢いで扉を睨みつけていると、そこから現れたのは長く綺麗な漆黒の髪を靡かせた女性。

少し見蕩れてしまっていた所為かその女性が先輩と気付くのに少

し時間が掛かった。

先輩は先ほどとは裏腹に微笑みながら此方に近づいてきた。

「廊下の死体見たわよ。事件ね？」

「ええ、そうですけど」

「で、他人達は？　もしかして校外に逃げちゃった？」

「いや、それが……」

僕はその後今までの出来事をサクツと噛み砕いて先輩に説明した。説明を聞き終わった先輩は何度も肯いて「ふむふむ」と探偵の様な振る舞いをした後テーブルの上にドガツとすわり足を組む。

「つまり黒尽くめの男が犯人なのは大体確定って訳ね、ふふん。面白そうじゃない」

相変わらず、探偵しているなあ。この人は。

「それにしてもあの多野田志乃得とか言う女、邪魔ね。たいした実力も無い癖に出しゃばり過ぎだわ」

あー、出た。負けず嫌い。むしろこの人を負かした人間はこの人の殺される様な気がする。

「まあ、良いわ、取り敢えずその放送とやらが終わったらここにもどってくるでしょ？　あとは篠崎さんを見つけ出して一人ひとりに事情を聞けばまあ犯人なんてアツサリ特定出来るでしょう、今回は犯人探しと言うより、犯人に殺される前にメンバー全員を集めるって感じになりそうね」

得意そうに話す先輩に対して僕は美奈が聞こえない様、小声で先輩に話しかけた。

「あのー先輩。一つ質問良いですか？」

「なに？」

「携帯の電波が圏外なのは先輩が魔法で細工したんですか？」
すると先輩はいきなり真剣な顔になった。

「——いや。たしかに圏外にする事は出来るけど私じゃない。単純に電波が悪いだけじゃないの？」

「でも、僕の携帯と美奈の携帯で試したんですよ？　念のため言っ

ておきますけど、僕と美奈の携帯は違う機種です。どう考えても山奥でも何でもないこの学校の電波状況が悪いって考えるのは少々おかしい気が……」

それを聞いた先輩は喜びを押さえられないのか、最高級の微笑みを僕に見せた。

「さいつこうじゃない。良いわ、とても楽しくなってきた。徹底的に叩き潰してやるわよ」

どうやら先輩の名探偵魂に火がついたようだ。

しかし、これってどうなんだ？ 普通にこの学校が圏外になるほど電波状況が悪くなければ誰かが細工した事になる。

「細工をするのなら明らかに計画的な犯行ね。と言う事はこの交流会、元々この事件を起こす事が目的だったのかも」

計画的な犯行、もし仮に先輩の仮説があっているのならば、犯人は二人になるって可能性が高いなあ。元々反抗を計画していた人プラス先輩が作り上げた殺戮狂気。シャレにならない。

「あのー、さつきから二人とも何を話しているんですか？ 計画的な犯行って」

美奈がもの思わしげに此方に視線を送っていた。

「犯人はこの交流会を狙って襲ってきているかも知れないって事よ。でも大丈夫二人の命は私が責任もって守るわ」

そんな白々しい事を先輩は余裕の表情で言い放った。

先輩の売りは事件を解決するスピードだ。決して人を守る事が得意な訳ではない、むしろ先輩は人を破滅させる方が得意そうだし。

破滅。

先輩が人を破滅させる事に目覚める前はいったいどんな人だったんだろう。

僕はふと考えてみる。美人だからモテたな。邪な想像しか浮かばなかった。「野田君、今何か想像したでしょ？」 見透かされていた。「どんな想像か言って御覧なさいよ」「ああ、いや」 ヤバイ、面倒臭い状況になった。てか、美奈もそんな得体の知れない

物を見るような目で僕を見ないでくれ、苦しい。

なにか、何か話題を変えられる話し——そうだ！

「先輩って好きな人いたのかなー、って唐突に思ったんです」

「え？」

先輩は小さく声を上げて、目を白黒させた。

これが始めて見た先輩に驚き顔だった。

あれ、焦って適当な質問したけどなんかまずい質問だったのか？
ちよつと不安になりながら先輩を見ていると先輩は暫く黙り込んだ後、真剣な顔で口を開いた。

「そういうのは自分から言うべきじゃないのかしら？」

「……………」たしかに。

これは少しフェアじゃない。

見事なカウンター攻撃だ。

「もしも野田君がこの場で私に好きな人を教えてくれるのなら私もこの場で白状してあげるといふ条件はどう？ それともこの場では言えない？」

僕もフェアじゃないが先輩もフェアじゃないな。こんな美奈が目の前にいるのにそんな話を出来る訳がないじゃないか。

「どうしたの？ やっぱりこの場じゃあ恥ずかしくて言えないのかしら？」

人を小ばかにし、見下す態度。まさに先輩そのものだった。

僕がどうしようか困り果てていると、学校に備え付けてあるスピーカーから放送を知らせるコールのようなものが鳴った。その後には放送が入る。

『え、えっと。美術部部長の佐井光です。こ、交流会にご参加の皆さん。び、美術室前でし、死体があります！ えっと、殺した人が多分構内を徘徊しているので……気をつけて、ください！ えっと。わ、私と多野田さんは、途中で、黒尽くめの男と出会ってしまったので、今のところは、私一人で行動しています。誰でも良いんで、早く私のところに来てください！ お、お願いです！ 怖

いんですよ！』

そこで放送は途切れた。

「そうとう焦っているわね、佐井さん。もしも黒尽くめの男がこの学校に関わり深い人だったら完全に殺されてしまう」

「助けに行くんですか？」

「いや、その必要は無さそうね」

先輩は僕の後ろにある窓に指を指した。

僕が後ろを振り向くと窓からゴンツと鈍い音がした。

「きゃ！」

美奈が高い声を上げる。

「——冗談だろ……！」

窓。

そしてその外には黒尽くめの男。

ナイフを何度も何度も何度も窓に打ち付けて。窓はドンドンひび割れる。まるで蜘蛛の巣がドンドン完成に近づいているようだった。

「割られるのは時間の問題みたいだし、さっさと逃げるのが吉ね」
こんな状況でよくまあ冷静に状況観察できるもんだ。僕は感心した。

でも今は確実に逃げる事が吉だ。

僕は急いで美奈の手を取り一目散に駆け出した。美奈を置いて逃げる訳には絶対に行かない。僕達からワンテンポ遅れるようにして先輩も走り出す。その後直ぐに後ろからパアンツと高く拡散する音が聞こえた。

僕は悪寒を感じて体中に力を込めて今出せる限界の力で走った。そして本能的に廊下を右に曲がった。曲がった直ぐの所に大きな扉があったがそれを体当たりに近い感じで開けて中に入る。扉の向こう側はとても途轍もなく広かった。

冷静さを欠いている僕でもそこが直ぐに体育館と言う事は分かった。非常口を見つけたのでそこにむかって駆けてゆく。

「——開かない!？」

鍵が掛かっていた。

非常口なのに非常口の役目を果たせないなんて駄目な非常口なんだ。

僕は当たりを見渡す。しかし僕たちが最初に入ってきた体育館の出入り口、そして用具室しか見当たらなかった。

そこで自分がとんでもない失敗をした事に気づく。

この体育館から脱出できない。

これでは思う壺、やられたい放題、風前の灯。

「馬鹿すぎる」

そう嘆きながらも仕方なく用具室の中に入り込んだ。

用具室の中は想像以上にホコリっぽく体育の授業や部活動で使うもので散乱している。

「くそ、何か身の隠せるものは」

体中から嫌な汗が出る。今僕は確実に恐怖しているのが分かる。最早混乱していると言っても過言ではない恐怖。

「このままじゃ……」

殺される。

半信半疑のまま突きつけられた現実だった。

くそ……くそ……くそ!

「……………痛いよ。縁」

「えっ」

美奈が喋ったので美奈の方を見ると彼女は顔を歪ませて何かに耐えている様だった。

ハッとした。

握った美奈の手を見ると僕は彼女の手を握りつぶすのではないかと思うぐらいに強く握っていたのだ。

「ぐ、ごめん」

「うつん、必死なのは分かるから」

情けない。これでは僕が美奈を引っ張った所為で追い詰められた

も同然じゃないか。もしその所為で美奈を死なせてしまったら笑いのものも良いところだ。

笑いものになるくらいならば……。

「……………困」

しかないのか。

でも、僕は——死ぬ覚悟なんて出来ない。

たしかに僕は成績も良いほうではないし、友達も多いわけじゃない。それに家族ともそこまで仲が良いわけでもなく、唯一中が良いのは犬のペットのゴンと美奈だけ。それでもそんなんでも、死ぬのは怖い。

だから全力で僕と美奈が互いに生きる道を考える。

僕は全力で用具室を見渡した。

バスケットボール、バレーボール用の支柱、バドミントン用のネット、卓球ラケット、体操用マット、掃除道具が入ったロッカー、演劇部の小道具、得点版、跳び箱——使えそうなのはこれぐらいか。用具室の奥には外へ通じている窓があるけど色んな物が邪魔してたどり着くのにかかる時間が掛かるから却下。

「やっぱり手傷を負わずに行くとするばコレしかないか」大して頭が切れる訳でも無い僕にはピッタリだ。

「美奈、この中に入れる？」

「え……………」

美奈が戸惑うのも仕方ない。僕が美奈に入るよう指示した場所は跳び箱の中だった。跳び箱は全部で三つあるのだが、その中で一番大きく段数が多い跳び箱なら美奈の小柄な体を入れる事が出来るはず。

僕が跳び箱を慣れないながらも力任せに持ち上げ、少し抵抗しながらも指示通り美奈は跳び箱の中に入り込んだ。

「もし、黒尽くめの男がこの部屋に入ってきてても絶対に声を出さないでくれ、そして黒尽くめの男がここから出て行った後も直ぐに外には出ないで最低六十秒は数えてから外に出る事、良い？」

「……うん」

「よし」

取り敢えず後は神に祈るだけか。

「さてと、後は僕だが」

僕は当たりを見渡すが、はつきり言つて身の隠せそうな場所はない。残り二つの跳び箱は小さすぎて僕のサイズには合わないだろう。かと言つてロッカーに入るのはベタすぎる。それに掃除用具がじゃま過ぎてたぶん身体がはみ出すだろうし。

「得にねえな……」

ミステリー小説や推理小説の主人公ならばここにある道具を最大限に使つて犯人を撃退する方法を閃くのかも知れないが僕はただのクソガキだ、悪知恵一つ出てこない。

頭のパー加減に呆れていると体育館の方からガラガラと何かを開く音が聞こえた。

——きやがつたか。

ドンドンと体育館特有に足音が近くなつたり遠くなつたりしている。どうやら徘徊している様だ。

僕は近くにあつたバドミントンネットを左手に持ち、右手に演劇部の小道具で何に使うか分からない長い棒状の物を手に扉の前で身構える。

——出来れば来るな。出来れば来るな。

ほとんど念じている様な感じで僕は眉間にシワを寄せて体制を低くし、体中から冷や汗を垂らしながら深呼吸をして、扉を睨みつけていた。

すると足音がドンツと言つて一旦止まる。

「——どうせ来るなら、さっさきやがれ」

そう呟いた途端、足音がまた鳴りだす。しかも今度はさつきと違つて意思がしっかり伝わってくる足音だった。確実に、絶対に、音は此方に向かつて歩いてきている事が扉越しの僕にも伝わってくる。

——入ってきた瞬間にネットを投げつけて、それに怯んでいる隙

にこの棒で思いつきり頭を殴る。

いたってシンプルな作戦。そのシンプルな作戦を僕は馬鹿みたいに何度も何度もシミュレーションをして、備える。

そして、

もう僕と扉を挟んでメートル無いであろう所で足音は止まった。心臓の鼓動と恐怖の鼓動がまるでリンクした様な感覚が吐き気を誘う。

「う……うう……」

僕は唸る。

扉は開かない、そこにいるのが分かるのに……。直ぐ目の前にいるのと同じなのに、扉は開かない。

……なんて焦らし上手な奴なんだ。

もう自分から扉を開けて楽になりたい程の重圧。自然と僕は齒軋りを立てていた。と、

扉からガツと音がなった。

「——っ……く」

扉は開いていない。

扉に手を掛けたただけの様だ。もう少しでネットを思いつきり投げつけてしまう所だったぜ。

やばいな。相当テンパっている。なんだか不安になってきた。

僕はゴクリツと唾を飲んで深呼吸をする。

……大丈夫だ、僕なら出来る。出来なくてもやるんだ。

そう気を引き締めた瞬間、

扉が——開いた。

二章 仮面の下の狂気（3）

全力で吼えた。

全力で吼えながらネットを投げつける為に思いっきり振りかぶる。その動きを阻害する様に空気抵抗が全身に襲い掛かり体の動きがずっしりとスローモーションにされた様な感覚に襲われるが、そこから更に歯を食い縛り床を蹴って重心を移動させつつネットを持っている左腕を振り下ろす。自分のカプラス体重を込めたネットが放物線をえがく事なく目の前の人間に命中した。

後は右手に持っている棒を使い目の前の物体を破壊衝動のままに殴り付ければ良いだけだ。

そう思って棒を振り上げた時だった。

「すとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おつつつつぷ！」

同じ歳ぐらいの男の声が体育館に響き渡った。あまり聞き覚えの無い声。

はて……僕達と同じぐらいの歳で男の人っていただろうか？

そうこう考えている内に僕の右腕は振り下ろす段階に入っていた。

「……あ」

右腕を振り下ろしながらその先に居るネットを被ったまま腰を抜かしてに倒れている。人物を見て、僕はようやくその人が誰なのか分かった。

「篠崎さん？」

そう言ったと同時に僕の右腕が完全に振り下ろされ、篠崎さんの体からほんの数センチの所で激しい音を立てながら棒が床に叩きつけられた。

その衝撃で棒が根元からバキッと折れる。

篠崎さんはそれを見て目が飛び出すんじゃないかと言っぐらい目を見開きネットを身体にまわり付かせたまま立ち上がった。

「アブねえだろうが！ もし当たっていたら骨が折れるぞ！？ いや、それどころじゃない。当たり前所が悪ければ死んでいたかもしれない！」

大声で怒った事にビックリと言うより篠崎さんがこんなに喋る人なのかと言う事に僕は驚かされてしまった。しかし油断は禁物だ。何せ今の段階では黒尽くめの男候補ではこの人が一番怪しい。

「てか、どうしてアンタらはこんな所にいるんだ？ もしかして光ちゃんの放送と関係があるのか？ たしか美術室の前で死体がどうか……」

篠崎さんの様子からしてまだ死体は見えないようだ。しかしそれは少し変な気がする。なんせこの体育館から出て直ぐ左側の廊下を見れば死体は普通見えるし、最初この人が美術室から出て行った理由は教室に携帯を忘れたからと言う理由。普通に考えて時間が掛かりすぎなうえ、用が済んだら速やかに美術室に戻るはずだ。死体を見ていない訳がない。

「……ありますよ。美術室の前に死体。たしか北口高校の人で志乃得さんの後輩だそうです」

「え、マジかよ」 驚いた顔する篠崎さん。「そう言えば何で篠崎さんはここに居るんですか？」 篠崎さんは間を空けず、得に焦った様子も見せないで答えた。「いや、アンタらが物凄い速さで体育館に入って言ったから、気になって来ただけだ。まあ来てそうそうネット投げつけられるとは思わなかったけど」「そうですか」あまり信用は——出来ないな。「取り敢えずのその死体とやらの場所に案内してくれよ。論より証拠って言うだろ？」「わかりました」果たして今、美奈を跳び箱から出して良いのだろうか？ 篠崎さんはさつきからやたら冗舌だし、なんか妙だ……。

「ふう」

まったく、僕は人を疑い出したらとことん疑ってしまうからな。悪い癖だ。

とりま、姫を連れて行こう、此处に置いていくのは心配すぎる。

僕は少し大きめの声で美奈を呼んだ。

「美奈、もう出てきて良いぞ！」

「一人じゃ出られないわよ！ 手伝いなさい！」
やれやれ。

僕はノロノロと跳び箱の前まで移動して跳び箱を無理やり持ち上げた。

「……………」

さっきもだけど、どうもこの跳び箱は重くて腰にくる。まだ十代なのに運動不足が身にしてみるなあ。

美奈が跳び箱の中から出てきた事を確認して、ドスツと跳び箱を下ろす。

「きゃ！」美奈が声を上げた。

なんだろうと思って美奈を見ると――

「は、早く！ 跳び箱を上げて！」

跳び箱を下ろした時に一緒にスカートを挟んでしまった様だった。そのおかげでもう少しで見えるか見えないかの瀬戸際でつつい見入ってしまう。

「なにボーっとしてるの！？ 早く！」

「あ、すまん」

スカートをグイグイ引つ張る美奈はそっぽを向いていた。そんな美奈を横目に僕はもう一度跳び箱を持ち上げる。と、

「きゃあ！」

いきなりスカートが外れた弾みで僕に向かって押し掛かる感じで倒れてきた。僕は反射的に跳び箱から手を離して美奈を支える。ガーンツと跳び箱が落ちた音が鳴り一歩後退しながらも僕は美奈の体を支えきった。

「大丈夫か？」

「……………ウ……………あ」

「ん？」

美奈は俺に抱かれたまま、得に離れる素振りも見せずにブルブル

震えていた。何処かぶつけたのか？ それにしては静か過ぎる。

「……手……が」

「手？」

「触っている」

「え」

「……あ。」

「い、いやあ、あんまりに無かったから気がつかなか——」

「慰めだとしてもその言い方は最低よ！」

そう言われた途端一瞬世界がグラついた。どうやら僕に思いっきり頭突きをしてきたみたいだ。

「ほんともう最低！ 下の下よ！ そんなだから縁は友達が少ないのよ！」

「おい、確かに怒るのは分かるが友達が少ないは余計だ」

「事実じゃない！ あたしがいなかったら一人ぼっちの癖に！」

「悪かったな。貧困女」

「貧困って何よ！ 変体！」

「はいはい変体ですよ、ほれ」

「きゃあ！」

美奈は身体をビクつかせて僕から全力で離れる。

「も……揉んだでしょお！ 変体！ ばかばか！ 死ね！」

美奈にしては珍しく罵倒を重ねてくるなあ。まあ、揉まれたら怒るか……いや、普通に考えて会話してくれなくなるのかな？ てかなんでこんなアホな行動しているんだ僕は。

でも、こうやって美奈にボロクソ言われるのは悪い気がしない。

……マゾか僕は。

「うう………もう………最悪」

「あ………」目が潤んでいる。

さすがに泣かれるとヤバイ、篠崎さんもいる事だし変に気まずくなるのは勘弁だ。

と、一瞬思ったが。なんだか美奈が強がりながら泣くなんて事は

滅多にないのでじつくりと観察する事にした。タチが途轍もなく悪い奴だと思ふ奴は勝手にそう思っていれば良い。

「う……く……く」

鼻をヒクつかせながらも必死に歯を食い縛って涙を我慢し、此方を睨みつけている。そんな美奈を見て僕は美奈の頭を撫でてやりたくなつたが、今の状態じゃそんな事した所で拒絶されるのが関の山なので観賞だけで我慢した。

「ぐ、くう」

そろそろ我慢の限界かな？ 多分泣き出すぞ。

やっぱり泣き出されるのはさすがに困るから謝った方が良いか。

「わるかったよ。謝る」

「謝って済む問題じゃないわよ！」

あ、泣き出した。

美奈は両目からポロポロと涙を溢しながら激昂した。

「人の胸をワザと触っておいて謝るだけ済むわけが無い！ かつこつけて冷静に見せかけていたってあたしにはバレバレよ、この変体胸をさわられた女の気持なんて考えていない癖に！ 縁なんか、大嫌い！」

そう吐き捨てると美奈は用具室から走り去って言った。

僕はそんな美奈を見ながら一人ポツンツと用具室に佇んで考え込む。

すこし調子に乗りすぎた様だ。あそこまで怒った美奈は久しぶりに見た気がする。本当に怒っているのかも。

「やれやれ」

人間関係と言う物はフェアじゃないなあ。人間関係を壊すのと直すのでは全く難しさが違う、いくらなんでも直す方が難しすぎだ、どちらも大体同じくらいの難しさになれば良いのに。

僕がそんな絵空事をしながら用具室から出た。すると、

「お前の彼女、物凄いスピードで体育館から出て行ったぞ。なんだか言い合っていたみたいだが、何かあったのか？」

篠崎さんが興味津々な様子で聞いてきた。

「いや、くだらない事で少し喧嘩になったんです。それにアイツは僕の彼女じゃないですよ」

そう、彼女ではない。

ただの幼馴染。

「ふーん、まあ女の子は大切にする事だな。何時何処で色恋沙汰になるか分かったものじゃないし、好きな人が一人はいた方が人生楽しそうだしな」

なかなかロマンチックな事言う。たしかに色恋沙汰は嫌いではないけれど、人を好きになった分だけ苦しむ。これが僕の考えた。

「てか、殺人事件が一応起きているんだよな？ 女の子を一人で行かせてしまつて大丈夫なのか？ まだ犯人捕まっていないんだろ？」

「ええ、まあ」

篠崎さんの言うとおりだ。今すぐにも美奈を追わなくてはまずい。もしも黒尽くめの男にでも出会ってしまったら美奈の事だ、その場にへたり込んで殺されてしまう様な気がする。

「暇しねーな」

今の言葉はまさに先輩が好きな言葉だろうな。

僕は美奈を追う為に走り出す——ことは、出来なかった。

「……………」

単独行動をしている時に黒尽くめの男に出会う事に恐怖しているのか、それとも美奈に『大嫌い！』といわれた事が今頃になつてまるでボディーブローの様にジワリジワリと効いてきているのか良く分からなかった。

ただ、美奈を追う事が出来なつた。それだけである。

「なあ、どうせあの子を追わないなら俺を死体の場所に案内してくれないか？」

篠崎さんは真剣な顔で僕を見ていた。

……死体は直ぐ近くにあるし、篠崎さんを案内してから美奈を追つても遅くはないよな。

何処からどう見ても、誰がどう見ようと、明らかに逃げている考え。

自分でも分かっているさ、最低な事ぐらい。
でも、別に逃げたって良いじゃないか。

死体がある場所まで篠崎さんを案内した僕は余り視界に死体を入れたくなかったので、廊下の窓から外を見ていた。

「エグイな」

死体の前で篠崎さんは口を押さえる。

たしかにエグイ、普通の精神状態でここまで死体をぐちゃぐちゃにする事は普通に考えてありえない。

「これってここで殺されたんだよね？」

「たぶん、そうだと思いますけど」

篠崎さんは考え込む様な顔をした。

「じゃあ何で美術室にいた人達は何でドイツが殺された時に気付かなかったんだ？ こんな風に滅多刺しにして殺される場合、悲鳴ぐらい上げるだろう？」

「あ……」

たしかにその通りだ。なんて当たり前の事に気づかなかったんだろう。

「俺が携帯を取りに教室へ言った時、死体は無かった。だから俺が出て行った後に殺したんだな。きっと」

僕が同意する。

「そうですね……そうなると思います」

篠崎さんが言う通り、篠崎さん本人が犯人で無い限り彼が美術室から出て行き、その後光さんと美奈がトイレに行ってから戻るまでの時間に限定される。しかしその短時間で誰にも気付かれず、ましてや滅多刺しに出来るものだろうか？

僕は考える。

この血の量からして他の場所で殺して死体を移動させる方法はない。こんな量の血が出ているのならば運ぶ際に確実に血が滴り落ちて何処で殺したのか丸分かりだし、デカイバックとかに死体を押し込んでも結果は同じだ。

この場で美奈と光さんがトイレから帰ってくるまでの短い時間で尚且つ悲鳴を上げさせずに滅多刺しで殺す。

——無理じゃね？

人殺しプロなら分かるが一般の人がそんな熟練された事を出来る訳がない。と、言う事はこの学校の敷地内に殺し屋でもいるのか？ いやでも高校生を殺すために殺し屋まで雇う奴は居ないだろう。それに僕が殺し屋ならワザワザ学校みたいに目立つ場所では殺さない、もっと人気の少ない所でこっそりやる。

「やっぱり計画的に……」

僕は携帯を取り出して時刻を調べた。

十一時三分。

なんだか急に時間の経過が遅くなったような気がする。

僕は頭を抱えた。

厄日だ。と、

すると、学校のスピーカーから放送を知らせるコールが鳴り響いた。

「お、こんな時に誰だ。また光ちゃんか？」

ふむ、あの様子からして光さんがもう一度放送を掛ける気力があるのだろうか。僕が思うに無理のような気がする。

「えーと、あーあー。これで放送されているのかしら？」

先輩の声だった。

「まあ良いわ、多分大丈夫でしょう。さてこの放送は道絵梨紗、道絵梨紗がお送りいたします」

ごらんのスポンサーみたいだった。

「取り敢えず今私は三階の放送室にいるのだけど、参った事に死体が一つ——たぶん格好からして業務の人だと思うわ。これも美術

室前の死体と同じく滅多刺し、たぶん同一犯よ。後、誰でも良いからこの学校の校門の扉が開くか調べて置いてね。もし開くのならそのまま脱出しちゃって結構よ。私がここから校門を見ているから脱出できた人が居たならば放送で皆に伝えるから』先輩は嬉しそうな喋り方で放送を続ける『後、犯人さん。私はここから動かないから是非殺しに来てくださいね、歓迎します。でも、もし校門から脱出出来たら私になんか構っている暇無いですよ？ ま、好きな方を選んでください。じゃ、放送きります』

放送が終了しブツンツと言う音がスピーカーから聞こえた。そしてその途端、目の前に死体があるにも関わらず篠崎さんが爆笑しました。

「あっはっはっはっは！ 凄いなあお前の先輩。自分の居場所を教えちゃったよ」

確かに凄い、さすが死を恐れないだけある。たぶん上手く犯人を誘導するつもりなのだろう。まさに先輩ならではの方法か。

「なあ、野田君……だよな。校門の扉が開いているか一緒に確認しに行かないか？」

篠崎さんが何食わぬ顔で提案してきた。

「大体今この学校にいる男は君と俺しか居ないんだぜ？ ワザワザ女の子に確認させるのも気が引けるし俺達が行くのが筋ってもんだろ」

たしかに篠崎さんの言っている事は間違っていないと思う。僕や篠崎さんみたいな男が動かないでどうするんだ。

「分かりました。いきましよう」

篠崎さんは指をパチンツと鳴らす。

「そうと決まればさっさと行動だな」

そして、外。

僕と篠崎さんは特に問題なく校門の扉の前に来ていた。

「ええつと、これってどうやって開けるんだっけ？」

篠崎さんは上を向いて考え込む。

「たしか……扉の横にボタンみたいな奴があつてそこに鍵を差し込んだら自動で開くんだけ？」

ドアか、じゃあ扉が閉まっている以上開けられないんじゃないか……。

篠崎さんは扉の横に取り付けてあるインターホンの様なものに近づく。

「ああ、やっぱり。ここに鍵を差し込むと扉が自動で開くんだけ。今は扉が閉まっているから鍵を取りに行かないと駄目だな」

鍵か、面倒事にならなければ良いけど。

「鍵は何処にあるんですか？」

「うーん。多分教頭が持つていると思う。多分教頭は職員室居ると思うが……」篠崎さんは嫌そうな顔をして続ける「さつき光が職員室で放送していた所を考えると教頭は職員室に居ないかも知れないな」

納得だった。普通人が殺されたとかそんな物騒な事件が起きたのなら生徒にそれを知らせる放送をさせる訳が無い、教頭自ら放送掛ける筈だ。と言う事は職員室に教頭が居ない可能性は大か。

「あのー、ここ以外に構内から出る所は無いんですか？」

「ああ、ここから間逆方向の場所にも同じ扉があるんだ。結局あそこも鍵が必要だから何も変わらないよ」

なんだ——この学校、時を戻す前に来た時は考えていなかったけど、まるで他者の侵入を拒む様な作りじゃないか。

僕が思っている事を読み取ったかの様に篠崎さんが説明を始める。「たしか、二十年ぐらい前に何処かのイカレタ奴がこの高校で何人も殺傷する事件が起きたんだよ。それがきっかけでこんな面倒臭い扉が作られたらしいぞ。あと、窓も全部強化ガラスになっていたはず……」

「そうなんですか」

黒尽くめの男が窓ガラスを叩き割って美術室に侵入して来た時、

ナイフを使っているのにも関わらずガラスを割るのに少し時間が掛かっていたのは強化ガラスが原因か。

「取り敢えず職員室に行ってみようぜ。教頭が居ないとは限らない――あ」

篠崎さんが口をあけてポカーンと上を見上げる。

「どうしたんですか？」

「あれ」

篠崎さんが指をさす。

僕は素直に指が指された方向を見た。場所は三階、美術実の真上の部屋、放送室。

「……………」

僕は思わず言葉を失った。たぶん篠崎さんもそうだっただろう。放送室には先輩そして――黒尽くめの男が居た。

と、言う事は。黒尽くめの男は――篠崎さんじゃ無いのか？

僕は疑問を浮かべながら放送室を見る。

二人は対峙して此方には気付いていない様だ。先輩が丸腰でただ立っているのに対し、黒尽くめの男の方はナイフを前に出して構えている。

「くそ！」

そう言つて篠崎さんは走りだした。

「ちょ、何処へ行くんですか！？」

僕が叫ぶと篠崎さんは走りながら答えた。

「すまん、俺は彼女を助けに行く！ 野田君は職員室に向かって教頭を探し出してくれ！」

「え、」

篠崎さんは一方的に仕事を僕に押し付けて校舎内へと走りさつて言った。

「……………あー」

どうしたものだろうか、一先ず言われた通り職員室に向かつても良いのだが、どうも嫌な予感がする。

僕はもう一度三階にある放送室を見上げた。

未だに先輩と黒尽くめの男は対峙したまま動かない。良く見ると先輩の口が動いている様にも見える事から何かを話しているのかも。でも篠崎さんがあそこに加わった所で大して何も変わらないだろう、きつと先輩は黒尽くめの男を撥ね退けるだろうし、仮にやられたとしてもあの人は不滅。ただこの次元から居なくなるだけだ。

——まあ正直言うと、僕にとって先輩は消えて貰った方がありがたい。

「……………」

人に消えて欲しいと平気で考えてしまう僕は果たして大丈夫なのだろうかと時々不安になる。こんな状況が続けているとやはり僕も先輩みたいになるのかと、平気で人を殺せる奴になってしまっているのかと。

いや、無いな。僕は今のところ人を殺したいと思うほど人を憎んだ事はないし、人を殺す甲斐性もない。甲斐性無しだから。

「だから甲斐性なしでも出来る行動をしようじゃないか」

今僕が出来る最善の行動、それはこの学校から脱出できるようにする事だな。幸い黒尽くめの男は放送室に居るのだし得に心配する事無く職員室へ向かえる。後は職員室に教頭が居ればそれで鍵を貰い。ここを開通させて終わり——なんだけど、そんな上手く行くとも思えない。と言うか僕の経験上の考えだけど上手く行くはずがないんだ。

「——でも、まあ、結局」行ってみないと分からないか。

僕はそう呟いて職員室に向かって走り出した。

二章 仮面の下の狂気（４）

たしか光さんの話に寄れば職員室は二階だったよなあ。

そう、思いながら僕は小走りで二階をウロウロしていた。二階はほぼ一年生の教室で構成されている様で何処もかしこも教室だらけ、今のところ二年生の教室を見た記憶は無いから大きな学校なんだなあと納得する。

やはり僕も男なので大きい学校だから可愛い女の子も沢山いるのだろう。とかついつい考えてしまう、もし仮に僕がこの学校に入学していたら男女問わずもう少し友達を多く持てたかも知れない。

「なに考えているんだよ、僕」

僕は既に一度やり直しているじゃないか、おかげで美奈と一緒に居られる。それだけで十分だ……その肝心な美奈と今は喧嘩中とは滑稽極まりないが。

自分のアホ加減に呆れながらも当たりを見回しつつ小走りで職員室を探す。

「——ん？」

と、あるものに目が留まった。

演劇部部室。

見た目はただの部室だ。だが——

扉に鍵が掛かっていないどころか扉が開きっぱなしになっていた。「これは——」なんだ？ たしか光さんが言っていたけど学校は交流会に参加したメンバーと業務の人、教頭しか居ないはずなのに全く関係ない演劇部の部室が開いていると言っるのは不自然。

「誰か居るのかー？」

そんな事を言いながら僕は部室の中に入っていた。どうも何か引っ掛かるような気がしたのだ。

「……ふむ」

どうやら中には誰も居なかった。が、

「なるほどね」

だが、明らかに人がいた形跡を発見した。
演劇部の部室には大量の黒いマントと般若のお面が道具箱のよう
な所に入っていたのだ。

つまり黒尽くめの男はこの演劇部からあのお面とマントを調達し、
僕達に誰だか分からないようにした。

現地調達とはやってくれる。

僕は回りを見渡す。

後は特になにもなさそうだな。

そう判断して廊下に出た。確か右方向から来たから方向に向って
探せば良いんだよね？

自分の記憶を頼りにもう一度職員室搜索を開始する。

それにしても見つからないなあ職員室、きつとこの学校に入学し
た人達の中では迷う人とかもいるんだろうな。

こんな状況において途轍もなくどうでも良い事を考えながら搜索
を続ける。

「そろそろ見つかっても——おっ！」

二階を探索する事約数分、思ったよりも時間が掛かったがあつさ
りと職員室に到着した。後は教頭が居る事を祈るだけだ。もしかす
ると光さんも居るかも知れない。

僕は職員室の扉前に立つ。何も危険が無いと分かっているでも扉を
開けるには結構な勇気が必要だった。

僕は扉に手を掛ける。そして二回ほど深呼吸をした。

「——よしっ！」

そして覚悟を決め、扉に掛けた手を横に引いた。

ガラガラと音を立てながら職員室の中が徐々に見えてくる、半分
程扉を開けた所で急にゾクリと鳥肌が立った。

扉の向こうに黒い何かが見えた気がした。

「……………」

「……………」

般若の仮面に黒尽くめ、そして右手赤く染まったナイフ。そして
そいつの足元に倒れている白髪で五十過ぎに見える男性。ピクとも動
かない。

——黒尽くめの男。

彼は身構える事もせずただ此方に視線を向けていた。

僕は予期せぬ事態に完全に混乱していた。

いつの間に此处に来た？

その疑問だけが頭にグルグル回る。

そして黒尽くめの男の左手には――

鍵らしきものが握られていた。

……マジかよ。

「その手に持っているのって校門の扉の鍵？」

僕は焦りの余り唐突に質問をしていた。

黒尽くめの男に、

焦り放題の僕に対し黒尽くめの男はじつと此方を見ている。

「い、いや気になったから聞いたただだよ……余り気にしないでく
れ」

すると彼は首の骨鳴らして僕に近づいてきた。

「え……な、なんですか？」

ビクビクしながら僕はその場にか踏み止まっていると黒尽
くめの男が鍵を持っている左手を前に差し出した。

「……………くれるのか？」

恐る恐る聞いてみると黒尽くめの男はコクリツと肯いた。

……………やけに素直だ、それにいきなり襲ってこない事も妙。

僕は細心の注意を払いながら黒尽くめの男が持っている鍵に手を
伸ばした。と――

鍵の変わりにナイフが僕の顔目掛けて飛んできた。

「――っ！」

僕は体を仰け反らす様にしてナイフを交わす。

やっぱり話が上手すぎると思った。

僕は急いで振り返り、黒尽くめの男に背を向けるようにして走り出す。

こんな近距離から逃げ切れるだろうか、それに僕はどつちかと言
うと足が遅い、下手すれば追いつかれて滅多刺しのミンチみたいな
死体にされてしまう。

体中を感じるゾワゾワした感覚に苦しみながらも、全力で職員室
から飛び出した。それと同時に僕の頬を掠める様にして尖った物が
飛んでゆく。

それに気を取られてしまい僕は何もない無い平らな床に転んでし
まった。

急いで体を上げて正面を見る。正面の壁には真つ赤なナイフが突
き刺さっていた。どうやら黒尽くめの男が僕に向かって投げた様だ。

……下手すれば頭に命中して大怪我だった。

冷や汗を流しながら僕は立ち上がり後ろを見る、黒尽くめの男は
此方に早歩きで近づいて来ていた。

やべえ急いで逃げなきゃ！

あたふたしつつ黒尽くめの男を視界に入れながら立ち上がる。と

気付いた。

奴が丸腰である事に。

右手で握っていたナイフは既に投げて無い、左手には校門の鍵。

普通に考えて右手が開いているのなら今持っている凶器を右手に
握るはずだ。だが事実右手には何も握られていない、つまりアイツ
の武器は壁に突き刺さっているナイフのみ。

上手く立ち回ればアイツから鍵が奪えるかも。

「——僕にしては、随分でしゃばった考えだな」

そう言っ僕体を翻した。

体制を低くし、全速前進。黒尽くめの男に腰に抱きつくような形

でタツクルをかました。

それにより僕が上に重なる様にして黒尽くめの男が倒れこむ。僕は奴が握っている鍵に向かって強引に手を伸ばす。

しかし奴はなかなか暴れるものだから鍵を上手くつかめない。

くそ、もう少しだ、もう少しで、届く！

そして、僕が左手に握られている鍵に触れた瞬間、

「——うっ！？」

わき腹に蹴りを入れられた。

メキメキツと足がわき腹に食い込んでいく様な感覚と同時に痛みが走る。その衝撃により僕は横に吹っ飛んだ。

いってえ、こりや普通の人の蹴りじゃないな、骨にヒビが入っていないければ良いが。

僕はわき腹を押さえながら立ち上がると黒尽くめの男はすでに立ち上がっており壁に突き刺さったナイフへ向かって走っていた。

ナイフを取られたチャンスが水の泡だ。

わき腹の痛みをやせ我慢しながら、僕は黒尽くめの男に後ろから抱きつくような形で動きを止めた。

このまま無理やり床に倒してやれば！

自分の両腕に最大限の力を注ぎ込む。そして、横倒しになるように相手の重心を横に移動させようとした時——予想外の出来事が起きた。

「きゃあ！？」

……………えっ？

高めの叫び声、僕でも抑えられるような華奢な体、そして手の平に残る様な不思議な柔らかさ。

——女？

僕は動揺し腕の力を弱めてしまう。

「んがつ！？」

その隙の黒尽くめは僕の顔に容赦なく肘打ちを浴びせた。

肘は鼻に命中して僕はたまらず黒尽くめから離れる。

鼻を押さえて二、三步後退している内に黒尽くめは壁に刺さっていたナイフと共に僕の視界から姿を消していた。

……畜生、逃がした。

悔しく思いながら指先で鼻をゆっくり触る――変な方向に曲がったかも知れない。そしてＹシャツを見るとシャツは真っ赤に染まっていた。どうやら鼻血が出ている様だ。

「ティツシュと冷やすものが必要だな」

今は血を止めなければ、職員室に行けば、それぐらいあるだろう。フラフラと覚束無い足取りで職員室に入る、職員室の奥には殺された教頭と見られる人物がうつ伏せで倒れており、それ以外の人間は多分ここには居ないであろう。まあ、すでに死んでいる人間を人間と呼ぶのは少し変な気もするが。

職員室をキョロキョロ見渡していたらティツシュはアツサリと発見した。ティツシュ箱ごと頂いてその内一枚を丸めて鼻に突っ込む、やはり鼻が少し曲がっているようで軽い痛みが走った。

そう言えばティツシュを鼻に突っ込んで鼻血を止めるのは余り良くないと聞いた事があるなあ。でもこの方法以外でどうやって止めるのだろうか？

そんな事を考えながら鼻を冷やせる物を探す。

「あれ？ 職員室だから冷蔵庫ぐらいあるよなあ」

むしろ大きい学校だから二つはあると見ていたのだが……考えが浅墓だったか。

ティツシュ箱を片手に職員室を徘徊する事約二分、僕はようやく冷蔵庫を発見した。冷蔵庫と言ってもあまり物が入らなさそうなミニ冷蔵庫だ。

「保冷剤でも入っていれば良いが」

僕はガチャリと冷蔵庫を開けた。

「……………」

冷蔵庫には五〇〇mlコーラが一本だけ入っていた。

コーラか、嫌いではないけれど、どうせならば缶コーヒーとかが

良かったな。でもコーラしか無さそうだから遠慮なく使わせてもらおう。

僕は冷蔵庫からコーラを取り出し、鼻にヒタリツと当てた。ふむ、なかなか冷たい。

左手で鼻にコーラを当て、右手にティッシュ箱を持つと言いついてマヌケな格好で次に僕は教頭らしきうつ伏せで倒れている男の人に近づいた。

「生きてますかー？」

ティッシュ箱で頭突いてみる。もちろん反応は無い。

そう言えばこの死体なんか変だなーと思っていたけど、じっくり見てやつと気付いた。この死体、美術室の死体とちがって滅多刺しにされてない、それどころか刺傷一つ無い。

首の辺りに細い跡があるから首でも絞められたのだろうか？でも黒尽くめの手には血に染まったナイフが握られていた。わざわざナイフを持っているのに首を絞めて殺すような回りくどい事はしないだろう。それとも叫ばれたりされない為に首を絞めたのか？それにあの黒尽くめ、明らかに女の人だった。僕みたいな貧弱な奴でも押さえ込む事は出来たし、体も華奢でそこまで脅威は感じなかった。しかも大切な所は美奈より圧倒的に豊かだったし。

「いかん、いかん」

こんな事を考えていたら何時まで立つても美奈と仲直り出来ない。今は、美奈と合流する事が一番に考えた方が良くもな。

「でも……何処にいるか分からないしなあ」

せめて先輩らへんと合流していれば良いが、先輩は悪い人間だが確実に犯人では無いし、僕がまだ飽きられていない所を見ると美奈に危険は及ばさないはずだし。

「いや、人の事より、まず自分の事を考えるだろ普通」

しかし、僕も変になったものだ。直ぐ目の前に死体があるのに冷静すぎる。死体を見る事自体にはなれないけれど、死体を見てある程度平常心を保てるようにはなったらしい。

平常心。この言葉は一番似合うのは先輩かな？ はっきり言ってあの人が切羽詰って焦る所など想像が出来ない。そう言えば志乃得さんもなかなか冷静だよな。先輩程では無いけれど、この状況を楽しんでいるようだし。

僕みたいな人間はビクビクしながら何とか生き残る事を考えるだけで精一杯なのに。

教頭から視線をはずして顔を上げる。そして立ち上がりそのまま職員室から出ようとした時あるものが目に留まった。

「……生徒使用禁止、か」

壁に取り付けられている箱状の物にそれは書かれていた。良く見ると取っ手ついている。

ま、使用禁止と書かれているのならば使用してしまうのが人間と言う生き物だ、それに僕の知り合いで『決まりごとは破る為にあるんだよ』と言っていた人も居るから問題は無いだろう。

僕は得に躊躇う事なく取っ手にティッシュ箱を持った手の小指を掛けては中を確認した。

「やっぱりね」

中には大量の鍵——講義室、被服室、実験室、調理室、情報処理室、視聴覚室その他諸々。

どつりで生徒使用禁止な訳だ。生徒に自由に鍵を使われたら溜まったものじゃないからな。けど僕はここの生徒じゃないし。好きに使わせてもらおう。

僕は片っ端から使えそうな鍵をポケットに入れまくった。鍵の一つ一つには確りと使える部屋の名前がタグで付いているのでどれがどの鍵か分からなくなる事は無い。

そして、鍵を一通りポケットに入れ終わり。

「ふむ、一先ず今はもうここに用は無いな」

しかし、特にコレと言って行きたい場所も無いなあ。確実に誰かには黒尽くめは校門の鍵を持っている事を伝えなくちゃいけないけど、変に動いて黒尽くめとエンカウントするのはごめんだ。そう考

えるところに留まるという事も一つの手かもしれない。まあ死体がある場所に留まると言うのは余り気が進まないが……。

でも鼻血が止まるまではここに居よう。個人的にこんな格好で学校を歩きまわりたくない。何処かに座って休んでいるのが良いかな。そう思っただけ座り心地が良さそうな椅子を探す。どうも教師達が使っている職員椅子は座る気になれない。いや、職員室にすわり心地が良いイスを求める時点で少し酷か。

そう思い渋々職員イスに座ろうとした時、ある部屋を発見した。

「校長室か」

校長室——どうやらこの学校の職員室は校長室と繋がっているタイプらしい。僕の通っている西高は職員室と校長室が全く別の場所にあるからな。

今はそんな話よりも校長室の中にあるものが重要だ。校長室ならば確実に校長が座る用の椅子がある、それもそこ等への安っぽい椅子とは違う、高級な椅子だ。こんな疲れ気味の状態でそれに座らない訳が無いだろう。

僕はまるで何かに取り付かれたかの用にフラフラと校長室の扉の前まで移動していた。きつと命の危機に何度か面した所為で思考回路が軽く変になっていたのだと思う。

扉の前で意味も無く深呼吸をする。

そして扉をガチャリツと開けた。すると、

「いやあ！ 来ないで！」

女の人の叫び声と同時になにやら重い物体が僕の頭目掛けて飛んできた。

ゴスツと鈍い音が聞こえた後、脳みそが揺れたような感覚が走る。視界がグワングワグワとゆれ、それに伴い僕の手からコーラとデイスシュ箱が滑り落ちる。

あー、意識が遠のいてゆく。

まあ、それも良いかな……ちょっと疲れていたし。

三章 容疑者二名と被害者二名（１）

自分には普通の人間よりも優れた部分が無いと思う。

勉強は平均以下、すっかり勉強したつもりでも勉強していない奴に負ける時がある。運動は団体競技の場合単なる足手まといだし、ましてや友達が少ない僕だ。団体で行動する自体がナンセンスだと思える。特に将来の夢も無いし、やりたい事も特に無い。絵を描く事は好きだけれどそれが直接将来に役に立つとも思えないしね。

僕みたいにも人の役にも立てない人間には今の世界は非常に生きにくい世界だと思う。でも、だからと言って世界を変える気分も気力もない。僕はインドア派の行動を起こさない平和主義な人間だし。

平和主義な僕にとって人生最大のミス選択は先輩の口車に乗せられ時を戻してしまった事だろう。たしかに利益もあつたけどそれ以上に問題が増えた。

道絵梨紗と言う魔法使いを完全に舐めていた。

この世には良い魔法使いと悪い魔法使いが居るのだ。僕は悪い魔法使いに出会った。たったそれだけの出来事。

先輩を鳥に例えれば僕は食べられる虫、先輩を猫に例えるなら僕は鼠、先輩を人間と例えるなら僕は先輩のペットと言った所か。

もし、先輩が神様なら僕は何になるのだろう、従わされる天使なのだろうか？ 神様を恐れる天使なんて聞いたことが無いけどね。

大体こんな自分勝手な神様居てたまるかと言う話だ。私利私欲の為に他人を勝手に殺人犯にしたてあげてその犯人を自分で突き止め、解決する。

誰が何処からどう見ても確実に神様が悪いだろう。仮に世界が、人間がその神様を捕まえたとしよう、その神様に罪に対する刑を言い渡したとしよう。その刑が死刑だったとしよう。

結果は無意味だ。

死すら凌駕した神の前で死に匹敵する程度の罪など無意味、終身

刑だとしても神は永遠に生きるからそれも無駄。

神より位が低い人間が神を裁く事なんて出来ない。

所詮法律なんてものは人間を裁く為に作られたものだ、神に対して適用させようって考え自体が酷なのかも知れない。

それは魔法使いと人間の間でも同じ事だと思う。何せ魔法使いも神とまでは行かないが圧倒的に人間を凌駕した存在だ。

だから、

だから、僕が先輩を裁く事は絶対に出来ない。

なんて、鬱な事考えながら僕は体を起こした。

僕はどうやら気絶していたようで、いつの間にやらソファの上で眠っていたみたいだ。

僕はズキリと痛む頭を抑えながら体を起こした。

「あ、起きました？ おはようございます」

「……………えーっと」

なんで光さんがここにいるんだ？

「頭の傷、大丈夫ですか？ 私も気が動転していて加減と言う物を全然出来なかったんです。ごめんなさい」

「……………」

あー、なんとなく話が読めてきたぞ。そうだ、確か僕は校長室に入ろうとして職員室から扉を開けた途端、女の子の悲鳴と共ににやら重いものが頭に命中した。みたいな展開だったよな。

じゃあここは校長室と言う訳か。

光さんは僕とテーブルを挟んで向かい合う様にすわり俯きながらチラチラと気まずそうに此方を見ている。

……………なんか様子が変だぞ。

「どうかしましたか？」

「い、いえ……………野田君を殴ったのは私なので、そのー、怒っているのではないかと……………」

なるほど、僕を殴ってしまった事を気にしているのか光さんは、
「あ、いや。全然気にしていないですよ。誰でも焦ったらつい思い

切った行動をしてしまうものですから」

「でも、殴ったのは事実ですし……」

「でも、僕は確り生きていますよ、ケガはしましたが、普通に動けるし全然大丈夫です」

「ほ、本当ですか？ それなら良かったです」

光さんはホッと安心したのか息を漏らした。

「とんでもなく強く殴ったので死んじやったかと思ったのですよ。凄く焦りました」

「人はそんな簡単に死ぬ生き物じゃないので、強く殴っても流石に一撃で殺す事はそうとう難しいと思いますけど」

「え、そうなんですか？ 一撃で野田さんが倒れてしまったので、つきり殺してしまったのかと思っちゃいました」

「死にませんよこんな程度じゃ、気絶はしますけど……ちなみに何で僕を殴ったんですか？」

「え……消火器で」

「……………」

当たり所によっては死んでいたかもしれない。てか下手すれば頭蓋骨割れるぞ。

僕はゆっくりと殴られた所に触れてみた、とんでもなく大きいタコプになっている。

こりゃ下手すると後が残るかも知れないなあ。おでこかを殴られなかったただけ良かったけど。あ、そう言えば鼻血が止まっている。そう思っ僕は自分の鼻に触れてみた。

うむ、なんだか少し曲がっている様な気がするなあ。

心配しつつも僕は話を切り替えた。

「ところで光さんはあの放送を終えてからずっとここに隠れていたんですか？」

光さんはコクリと肯く。

「はい、あんな姿の教頭先生を見ちゃったのでなおさら怖くなってしまっ」

怖くなつたか、まあ確かになれない人が死体を見れば怖いと思うのが普通かも知れない。でも僕の場合は怖いって概念じゃないんだよな。なんか、やるせない気分になる。

「あのー、さっき職員室と廊下の方向から大きい音が聞こえたのですけどアレってもしかして野田君ですか？」

多分僕が黒尽くめと取っ組み合いをしていた時の音だろうな。

「きつと僕です。ちよつと色々ありまして」

ここで黒尽くめの奴に襲われたなんて言うのはあまり良くなさそうだ。逆に光さんを怖がらせかねない。

しかし、妙だな。光さんの話によると彼女が放送する前には既に教頭が死んでいたって話だ。じゃあ何で僕が職員室に来た時に黒尽くめの奴は居たんだった？ 単純に教頭から校門の鍵を回収しに来ただけなのだろうか。それに教頭の殺され方も妙だ。明らかに首を絞められて死んでいる。黒尽くめの奴はナイフを持っているのに何でそんな回りくどい事を……

でも光さんが嘘をついているって線も否めない。

よく見るとこの校長室、職員室からだけでは無く廊下からも入れる様になっている。黒尽くめの奴と一戦交えた後、僕は少しの間ティッシュと何か鼻を冷やせる物を探して職員室を徘徊していたのだからその間に僕にバレ無いように校長室に侵入する事はそこまで難しい事ではない気がする。

「……光さん」

「はい、なんですか？」

「——もし、僕が此処の教頭先生やあの池田とか言う人を殺した犯人だったらどうします？」

「え？」

光さんが哑然としながら此方を見ている。

さて、僕のハッターがどの程度通用するのか試してみようじゃないか。

「たとえば、僕と先輩と志乃得さんが共犯で、光さんと美奈がトイ

レに行っている間にその池田って人を殺します。三人でやれば滅多刺しになんてあっさり出来ますし返り血を浴びない様にするのも用意さえして置けば案外簡単です。そして光さんと美奈が死体を発見した時に僕と志乃得さんがあたかも初めて死体を見たような態度を取る。そして先輩が黒尽くめの奴を演じて僕たちを遅い、僕と志乃得さんがまるで犯人ではない様に見せかける。で、僕たちが美術室にいる間に先輩は素早く職員室に向かって教頭先生を殺し、そして流れるように三階の放送室で業務の人を一人殺す。どうですか？筋は——通っていると思いますけど」

「……………」

光さんはじつと此方を見ている。見た感じ、怖がっている訳では無さそうだ。

これは——輕蔑の目かな？

光さんはゆつくりと口を開いた。

「今の発言が嘘だとしても、限度って物がありますよ」

「なんだか、僕が犯人じゃないって感じの言い方ですね」

「ええ。私……野田君は犯人じゃないと思っています」

やけに自信満々な光さんだった。

「だって、野田君丸腰じゃないですか。それに私みたいな人に消火器で殴られて気絶する様なマヌケさんが犯人な訳ありません！」

意外に酷い事を言う光さんだった。

と言うかなんで僕が丸腰な事を知っているのだろう？

その疑問を光さんは悟ったかの様に答えた。

「野田君が気絶している隙にボディーチェックしましたしね」

「え」ボディーチェック？

「ちゃんと下着まで調べました」

しかも下着まで。

「ちよつとまってください。それって色々まずくないですか？」

「え、でも私の命の関わる事ですから、まずくなんて無いですよ」

……たしかに。

でも人生初のボディーチェックをした人が女になるとは思わなかった。結構シヨックかも。しかし、光さんは思った以上に用心深い人の様だ。武器として消火器を所持していたり、僕をボディーチェックしたりとなかなか抜け目がない。

「光さんはここから動くつもりは無いんですか？」

光さんは少し間を空けた。

「一人で動くのは怖いですけど、誰かと行動するのならば全然良いですよ。足手まといになるかも知れませんが」

「じゃあ、一緒に行きませんか？　ここでずっと一人で立てこもっていたら後で疑われる可能性がありますし」

すると光さんはニコツと笑い肯いた。

「そうですね。私も疑われるのは嫌ですから一緒に行きます。でももし野田君が黒尽くめの男に襲われたとしても私はきつと見捨てて逃げると思いますのでそこだけよろしくお願いしますね」

「ああ、はい」笑いながら言う台詞じゃないだろう。

ま、光さんが足手まといや僕が襲われていても見捨てる様な人でも一緒に行動する価値はあるな。犯人が二人だったとしても、僕が単独ではなく誰かと行動していればそれだけで疑われる可能性は低くなるし、黒尽くめの奴に襲われた際に二手に分かれて逃げる事も出来る。しかも光さんはこの学校の生徒だから校内を案内してもらう事も出来るだろう。だが、もし光さんが犯人ならば殺されるリスクが高くなる。けれどそれは仕方が無い、かな。個人的には一人で行動するよりずっと利口だ。

「じゃあ、行きますか」

僕は立ち上がり、廊下に繋がっている扉の前まで移動した、光さんも僕の後ろに付くように移動する。そして僕がドアノブに手を掛けた時、光さんが喋った。

「あのー、野田君。一緒に行動するのは良いのですが、野田君は何処に行きたい場所があるのですか？」

「……………」特に無い。が「美奈と合流したいと思っています。」

だから危険ですけど校内を探索するつもりですけど、良いですか？」

質問に対して、質問で返すと光さんは二回程肯いた。

「分かりました。野田君は小山さんが心配で仕方ないのですね」

「どう、なんでしょうね」

違うとは——言えなかった。

僕は扉を静かに少しだけ開け、その狭い範囲から頭だけを廊下に出して左右を確認した。近くに黒尽くめの奴が居ない事を確認し、完全に扉を開く。

「取り敢えず三階から探そうと思っているんですけど良いですか？」

「ええ、構いませんよ」

「じゃあ、三階に行きます。その際に色々な場所の案内も頼みたいですけど——」

「問題無しです」

そう言つて光さんは親指を立てた。なるほど、頼もしい。やはりこの生徒と行動を共にするだけで得した気分になれるな。それに光さん自体はなかなか魅力的な人だし。

ルンルン気分、とまでは行かないがいつもよりは気分高らかに、

僕は光さんに案内され三階へ向つた。

三章 容疑者二名と被害者二名（2）

三階は基本的に二年生の教室と三年生の教室で構成された階だった。その為、短時間で三階の探索が殆ど終了してしまった。

「何だか、誰もいなさそうですね」

僕はついつい言葉を漏らしてしまった。美奈はおろか、三階に誰も居ないのでは探索など完全な無駄足。時間をロスしたただだ。

「後は、放送室だけですな」

光さんは息苦しそうに言う。

たしか放送室には滅多刺しの死体があるとか先輩が放送で言っていたな。光さんが美術室前の死体を見たときは放心状態だったから、きつと精神的ダメージは大きいはずだ。

僕が始めて死体を見たときは少なくとも嘔然はしたけど放心状態にはならなかったなあ。確か、嘔然した後、嫌になって泣いたんだ。……あんまり思い出したくねえな。

「あ、ここです……放送室」

光さんの声に気づき僕は立ち止まる。

放送室。

この中に――

「じゃあ……入りましょうか」

「あっ！」

「えっ？」

反射的に扉に手を掛けた光さんの腕を掴んでいた。

光さんはビックリした表情で此方を見る。

「な、何です……か？」

顔は薄い朱色になっていた。

「いや……光さんはここで待っていてください。僕が見てきますから」

僕も何故だか恥ずかしくなり、光さんから眼を背ける。

「で、でも……！」

「苦手な物を無理して見る必要は無いと思いますよ。僕も死体が苦手では無いって訳ではありませんけれど一応男なので、こういう時は男に頼っちゃってください」

すると、光さんは上目遣いで僕を見た。

「じ、じゃあ……お願いします」

「はい」

光さんの腕から手を離し放送室の扉に手を掛ける。

これは黒尽くめの奴を確認するために扉を開けるのよりよっぽど緊張するな。

ガラガラツと音を立てながらゆっくりと扉を開けた僕は辺りを見回しながら放送室の中に入る。どうやら誰も居ないようだ。

「あれ」

放送室に入って直ぐ右方向に死体らしき物があつた。らしき物と言ったのは、明らかに死体にしか見えないのだから、何故か布の様な物に包まれている不自然な物体だったからである。勿論布のいたる所は赤く染まり。また血が池を作っている様な感じになっていた。

たぶん先輩が気を使って布を掛けたのだろう。

「さて……」

僕は死体らしき物に近づき、恐る恐る布に手を掛けて中を確認した。

「……………うっ」

酷かった。

余りに酷かった。

美術室前の死体よりも圧倒的に。

死体の顔しか確認しなかったが、顔だけで明らかに数十箇所刺されている。両目は抉られた様になっていて耳には何箇所も斬り込みが入っていてギザギザになっている。鼻にいたっては存在すら抹消されたかの様に、綺麗に無くなっていた。

インパクトが強すぎて僕はその場で餌付いた。

「く……」

ギリギリの所でどうにか嘔吐感を抑えた僕は急いで布を顔に掛けなおす。

「……はあ、はあ」

なんで、ワザワザ見たんだよ……。

涙目になりながら、僕は放送室に誰も居ない事が分かった時点でさっさと出てゆくべきだったと激しく後悔した。

気分を悪くしながら放送室から出ると光さんが心配そうな顔をしていた。

「ど……どうでした？」

「……多分光さんが見ていたら失神していたかも知れません」

「ほ、本当に!？」

一体僕がここで嘘をついてどうなると言っただ。

しかし、本当に酷かった。アレが人の顔だという事を未だに信じられない。それに先輩も少し死体になれすぎだ。アレを発見しておいてあそこまで冷静に校内放送が出来るなんて……。

……ある意味、才能だな。

「そういえば三階を探索しきったのか」

「はい、後は屋上か二階が一階です」

「え、この学校は屋上を自由に行き来できるんですか？」

「いえ、鍵を使わないと行けませんけど」

鍵。

僕はポケットに入っている大量の鍵を一つ一つジャラジャラと音を立てながら確認した。

「——あつた」

【屋上】のタグが付いた鍵。

今僕がこの鍵を持っている時点で誰かが屋上に居る可能性は低そうだが万が一、誰かが合鍵の様なものを入手している可能性が無いとは言いい切れない、丁度三階に居る事だし屋上に向うのも悪くは無いだろう。

「丁度鍵があるので屋上に向って良いですか？」

光さんは特に嫌がる様子も見せないで肯いた。

「はい、わかりました。案内しますね」

「お願いします」

そんなやり取りを交わして、僕は光さんに付いてゆく。

放送室から出て真っ直ぐ廊下を進み、突き当たりで左側に階段が現れた。その階段は他の階段と違ってやたらと角度が付いていて、一段一段の段差が高かった。

「屋上はこの階段の上です」

この階段から落ちたら酷い事になるだろうな。

痛い想像をしながらも僕と光さんは階段を上る。階段が急な為に階段を一段上るだけでも以外力を使う。足を踏み外して落ちたくは無いのでしっかりと手すりに捕まり一段一段確りと登る。

「この階段、段差がきつくて嫌なんですよねー」

「たしかにき……あ」

「ん……？　どうかしました？」

「い、いや。なんでもないです」

今、現段階でこの急な階段を僕よりも先に光さんが上っている状態なのだが、光さんの短めのスカートが手伝ってか、下側にいる僕はスカートの中が見えそうだった。

しかし、見えなくとも僕には十分すぎるほど刺激的で、目に焼きつきそうな光景だった。

ふくらはぎはニーソックスで隠れている物の、そこから上の露出している部分がありえなく綺麗だった。得に内股はスラッとしていて、膝枕されれば直ぐにでも眠りに落ちてしまうのではないかと思える程だ。

こんな人に膝枕されて、耳かきをしてもらいたい。

密かにそんな願望を抱きながら僕は光さんの内股を凝視しつつ階段を上りきった。

「はあ、やっと上までこられましたね。ちょっと疲れちゃいました」

「うわぁ」

階段を上り終わった所で下を見ると想像以上に高くて一瞬恐ろしくなった。余り高い所は得意ではない。まあこんな階段を上ったから光さんの内股を見れた訳だが……。

これは登るのより降りる方が怖いな……。

降りるときの事を想像してテンションを下げながらも振り返り、屋上へ続く扉を見る。なんだか重そうな扉だった。

僕は右手に持っていた《屋上》のタグが付いている鍵を扉の鍵穴に差し込む。鍵が抵抗なく奥まで差し込まれた。が、

「……………お？」

右に捻つても、左に捻つてもピクとも動かない。

僕は鍵を抜いて付いているタグをもう一度確認する。

「やっぱり《屋上》だよなぁ」

「どうかしたんですか？」

異変に気づいた光さんが顔を覗かせてきた。

「鍵が開かないんです」

「ちよつと貸してみてください」

そう言つて光さんは僕から強引に鍵を奪つて鍵穴に差し込み、ガチャガチャと左右に回そうとする。もちろん回るわけも開くわけもなかった。

光さんは首を傾げながら鍵を抜き取りジツと鍵を見つめる。

「たしかに変ですねこれ。でもちゃんと【屋上】のタグが……あつ！」

「どうかしました？」

「これ！」

唐突に光さんは持っている鍵を僕の目の前に差し出した。

「少し曲がつて歪んでいる」

「……ああ、なるほど」たしかに曲がつている。

コイツが原因か、しかしこの程度の歪みで鍵がこうも開かなくなるものだろうか？

腑に落ちなかったが仕方なく光さんから鍵を受け取りポケットに戻した。

「どうしたものか」

あと回る場所と言えば二階と一階。流れるに二階が良いけれど、その階には黒尽くめがいる可能性があるんだよな。

「はあ」と、ため息を付き「まあ、仕方ないか」と呟いて諦めた。

「光さん、二階へ向いましょう」

「わかりました」

光さんは同意して（同意しない理由が先ずないよな）急な階段をゆつくりと下りる。やはり降りる方がずっと怖かった。

階段を降り終わって、左右を確認する。と――

誰かが此方に向って走ってきた。

僕と光さんは思わず身構えたが、走ってくる人物の姿をよく見るとそれは黒尽くめではなくちゃんと見覚えのある顔。

多野田志乃得さんだった。

ただ、少し様子が変わった。めずらしく焦っている様な表情。走っているのが原因かも知れないが不自然な程の息切れ。左手からは――

出血。

「……………」

僕と光さんはその光景にただ、沈黙するばかりで廊下には志乃得さんの呼吸音だけが埋め尽くす。

志乃得さんは僕たちの目の前で立ち止まり振り返って――何かを確認しているようだった。

「……………もう、追いかけて……………来ないみたいね」

汗だくの状態で腕から血を滴らせ、息を切らしながらそう言う志乃得さんは何とというか痛々しかった。

「その腕、どうしたんですか？」

「ちよつとね……………黒尽くめの男にスパツつとやられた……………」

「……………」

普通は切られたり刺されたりすれば気が動転しているはずだけど、かなり冷静だなあ。確りと黒尽くめから逃げ切った事が何よりのも冷静な証拠だ。

「悪いけど、腕に負けるもの無い？ 出血が思ったよりも酷くて……」

何かないかと僕が鍵だらけのポケットを弄っていると横から光さんがハンカチを差し出した。

「こんなものしかありませんけど……」

「別に大丈夫よ。ありがと」

そう光さんにお礼を言っていると志乃得さんは手早くハンカチを腕の切られた部位に巻きつけ、綺麗に縛って固定した。

「取り敢えずコレで応急処置完了ね」

そう言って志乃得さんは自慢げな顔をする。しかしハンカチは既に赤くそまり今にも血が滴り落ちそうだった。コレは応急処置の役目を果たしているのか？

「全快だあ！」

そう言ってハンカチを巻きつけた腕をブンブン振り回す志乃得さん。応急処置で傷が全快するのならばさぞかしその人間の回復力は高いのだろう。

「元気なのは良いですけど。黒尽くめの男に襲われた場所は二階……ですか？」

志乃得さんは腕を振り回すことを止め、僕に視線を移す。

「そうだけど何か？」

そう言う志乃得さんの目は恐ろしく冷たかった。

僕はその目にたじろきながらも答える。

「い、いえ。二階で襲われたのならばまだ奴は二階に居る可能性が高いな……って」

「そうでしょうね。で、そちらさんは何をしていた所？」

僕の代わりに光さんが答えた。

「屋上に向おうとしていたんです」

「屋上に何かあるの？」

「いえ、ただ小山さんを探していたので何と無く屋上を探してみようと言う話に野田君となっただけですけど……」

「何と無く、ね」

志乃得さんは光さんの言葉を繰り返すように呟き腕を組む。

そして目を細めて此方をみる。

僕はその姿に見覚えがあつた。

これはまるで——先輩みたいだ。

「ま、良いわ。何と無く行動するってよくある事だし、じつさいワタシだってよく意味の無い行動をする。意味の無い行動のおかげで得したり損したりもあるのだから意味の無い行動はかなり重要ね。

つまり意味の無い行動は意味のある行動って事、そんな事を考える
と物事一つ一つに運命を感じてしまふわね。少しロマンチックな考
えになつてしまふけれど、運命の力を絶大よ。まるで引力のように
自分が歩む道を引き寄せてくる。誰もが例外なくその道を歩く事にな
つてしまふのよね。たとえそれが死だったとしても……」

マシンガントーク。

ちがう、コレは志乃得さんだ。

多野田志乃得^{たのたしのえ}本人だ。

先輩——道^{みちえりさ}絵梨紗ではない。

でも、あの目は確実に先輩の——

………多分。

いや、絶対に。

僕達を疑っている。

三章 容疑者二名と被害者二名（3）

僕達を疑っている。

「ちよつとワタシにしては暗い話かな？ まあ良いわ。そんな事よりお二人さんは屋上に行ったの？」

「その……屋上に扉の鍵が壊れてしまつて屋上に行けないんです」「壊れている、鍵が？ ちよつとその鍵を見せて」

光さんを圧倒するかの如く志乃得さんは一歩前に出て手を光さんに差し出す。光さんは身構えながらも怯んで一歩後ろに下がった。

「あ、あの……別に私が鍵を持っているなんて訳じゃないですよ」「じゃあ誰が持っているの？」

「僕ですよ」

このままいけば志乃得さんが光さんを蹴倒してしまいそうだったので仕方なく答えた。

僕はポケットの中から【屋上】のタグが付いた鍵を志乃得さんに渡す。

「これね……うん、たしかに曲がっている。でもこんな程度で鍵が開かなくなるものかしら？」

「信じられないのならば、自分で試して見れば良いじゃないですか」「たしかに言うとおりでね、全く持つてその通り。論より証拠って奴だ」

志乃得さんは二、三度肯いて軽快なステップで屋上へ続く階段を上る。

「本当だ！ 開かない！」

怪我しているのに元気な人だ。それに俺と志乃得さんの位置関係上、丸見えなんですけど。

なんだかな。光さんみたいに、瀬戸際が無いからどうもドキドキしない。志乃得さんの事が魅力的では無いとは言い切れないが……

なんか違う気が……ふむ、水色が。

鍵が開かない事を確認し終わった志乃得さんは、ダンッダンッと音を立てながら階段を豪快に下りてきた。

「たしかに開かなかったね。はい、鍵」

僕は差し出された鍵を受け取りポケットにしまった。

「それで、これからお二方はどうするの？」

「僕は美奈を探しますけど」

「ふーん。佐井さんは？」

「私は……する事も無いので野田君を手伝います」

「そ、じゃあ、ワタシは……」

志乃得さんはワザとらしく考えた後にニヤリと笑った。

「だったらワタシも手伝ってあげるわ。一人で動き回るのは危険だしね」

危険……か。

このなかに黒尽くめが混じっていたら危険だな。僕の考えが外れていなければ黒尽くめは声、そして胸の大きさからして女性だ。今日の交流会で集まったメンバーの中で大半が女性を占めているけれど、先輩、美奈、志乃得さん、光さんの四人だけだ。先輩は手を降さない魔女だから除外。先輩は美奈には手を出さないといっていたから美奈も除外。残りは二人。

行動を共にする二名の内——どちらかが黒尽くめ……。暇しねーな。ちくしょう。

「どうしたの少年。急に黙りながら怖い顔して」

志乃得さんが体を屈めて僕顔を下から覗き込んでいた。

「いえ、少し考え事を……」

「考え事ね、それって——黒尽くめの男は実は女かも知れないって事？」

「えっ!?」「——っ」

志乃得さんの発言に光さんが声を上げた。僕はまさか志乃得さんがそんな事言うとは思わなかったので声すら出ない。

「凶星って顔しているね」

「なんで、分かったのですか？」

「ちょうどワタシもそう思っていた所だから」

「ちょうど、という事は」

「多分さつきワタシを襲った黒尽くめ——女性よ」

「……え……え……ええ！？」

光さんはわけが分からないと言った顔をして、混乱している。

「多野田さんはさつき黒尽くめの男を男だと言っていたじゃないですか！」

「ええ、確かに男って言ったわ。でも、もう一人の黒尽くめが女じゃないだなんて一言も言っていない」

「え……も、もう一人って」

「犯人はきつと二人いるわ」

「そ……そんな」

光さんは脱力した様にその場に座り込んでしまった。

犯人が二人。

その片方が男でもう片方が女か。

「もし本当にワタシを襲った黒尽くめが女性だったら犯人はその佐井さんか小山さんね」

志乃得さんは光さんが目の前にいるのに躊躇いなく言い放った。

流石に黙っていられない。

「志乃得さん、勝手な決めつけは酷いですよ。それに業務の人が犯人って可能性もあるでしょう？」

志乃得さんはまたもや目を細める。

「ふーん、業務の人ね……たしか光さんの話よれば業務の人は多くて三人。さっきの道さんの放送で一人亡くなったらしいから多くてあと二人って所、こんな状況で誰も常務の人を見ていないって事は既に殺されたかその二人が黒尽くめのどちらかよ。でもワタシの勘が当たっていれば業務の人は殺されている」

なんて勝手な考えだ。そして決して当たっていて欲しくない勘だ

な。

「だったら何で先輩が犯人候補から外れているんですか？　せめてそれを説明してください」

「名探偵だから。名探偵が事件を起こすわけが無い」

僕と同じ考えを持っている。でも何だか気に入らないな。

「たしかにそれはあるかも知れませんが光さんがこの場に居るのにそう言うのはどうかと思いますよ？」

「そう思うのならば校内を探索し尽くせばよいんじゃない？　多分業務の人の死体が見つかると思う。まあ。どちらにしろ野田君は小山さんを探すのだから手間が省けるわよ。まあ小山さんが単独行動しているのなら犯人の可能性が大だけど」

志乃得さんの発言について僕は力チンと来た。

「手間も省けるも何も、美奈が犯人なわけがない。それじゃあまるで先輩と同じだ」

まるで魔女。

勝手な決めつけから犯人を割り出す強引な手口。そして、大胆な行動。

「人の為に感情的になれる事は素晴らしいけど、それじゃあまるで光さんが犯人みたいな言い方だね。少年」

「それは志乃得さんが犯人の可能性がある人を絞った場合の結果でしょう。勝手に決めないでください」

「じゃあ、野田君が予想する犯人は誰なの？」

僕の予想かまあ、悪あがきぐらいしてやる。

「僕が女性で疑っているのは志乃得さん……彼方です」

子どもが仕返しをするかの如く僕が言っていると志乃得さんは笑った。

「あはは、疑っている理由を教えてくださいませんか？」

「理由は僕が女性の方の黒尽くめに襲われている時、光さんは近くの校長室にいたので僕を襲う事は不可能。先輩は志乃得さんと同じ理由で除外。あと僕は黒尽くめと取っ組み合いになったとき、つい胸を触ってしまったんです。あれは明らかに美奈より大きかった。

それで最後に残るのが志乃得さん彼方です」

「え、野田君って小山さんの胸を触るほどディープな関係だったんですか!？」

何故かこのタイミングで光さんが会話に入ってきた。

「やっぱり少年も発情期なんだよ。女の子胸ぐらい触りたいって。

それに男と言う生き物は異性が喘ぐ事に非常に敏感だ。多分モミモミして喘いでもらう事が一番の前提だと思うよ。あんっ、あん、もつとお。見たいな感じで」

「あ、なるほど。私が男の人同士でキスしたり抱き合ったりするのを見て興奮するような感じですね!」

「……………」なんだこの力オス。

「ところで少年は童貞を卒業したのかい？」

「明らかにそんな話題じゃなかっただろーが!」

「なーんだ。そのリアクションからして童貞か」

あーくそ。さつきから志乃得のクソ野郎にムカツク事されまくりだ。イライラする。

「言う志乃得さんはどうなんですか？」

皮肉タップリに聞いてみた。すると、

「え……学校では腐れビツ」「やめろ!」

何とか阻止した。

「なによ。そんな必死になって」

「誰でも必死になるわ!」

「でも、高校三年生にもなれば誰でも卒業するわよ。光さんも目の前の童貞と違ってビツ」「やめろって言ってるんだろが!」

あれ、何でこんなに必死なのだろう僕。

「え、私処女ですよ?」

「そうなの? 美人だからてつきりビツ」「いい加減にしるおおお
おおああああ!」

ついに叫んでしまった。

「志乃得さん。いい加減にしてください! この状況をわかってい

るんですか？」

「なによ。童貞は童貞らしく黙ってなさい」

「黙れ、志乃得」

「うわ！ 切れた」

ついつい年上に対して呼び捨てをしてしまった。

「ふふ、でもコレだから年下を苛めるのは止められない」

「おい、アンタ自分の後輩にも同じ事をしていたんじゃないだろうな」

「え、していたけど？」

……池田とやら。お前は苦労していたのだな。

てかシリアスな展開から急に会話がふざけすぎだろ！

「まあ、おふざけはここまでにしてなるほどね。ワタシを疑うに事件は少年にとつてそろつている訳だ。困ったわ」

「どうして困るんですか？」

「ワタシはありもしない疑いをかけられる事が大嫌いなものよ」

人の事を散々疑つておいて自分が疑われるのが嫌つて、なんて自分勝手な人なんだ。なんか本当に先輩と似ているなあ、この人。

「でも、彼方達と行動をともしにしていればもし女側の黒尽くめが襲つて来た時に疑いは晴れるわね」

「なんですか、その疑いを晴らすために僕達を利用するみたいな言い方は」

「実際その通りなのよ、許してね。それともこんな危険な所に女の子一人を放置するつもり？」

「別にそんな事は」

「じゃ、決定ね。皆で行動する」

なんだか無理やり押し切られてしまった様な気がする。ここで確り言えないのが僕の悪いとこだ。分っているの治せない。

「で、何処を搜索するの？ ワタシは基本的に何処でも良いけど二階には黒尽くめが居るかも知れないからお勧めはしないわ」

志乃得さんの言うとおり二階は危険かも知れない。でも、もし

志乃得さんが言っている事が嘘の可能性だってある。例えば二階に見られたくないものがあるとか……。

「二階から探索してみます」

すると志乃得さんはため息を付いて嘆息した。

「どうせそう言うと思った。少年は疑り深いなあ。人を信じないと幸せになれないぞ」

「もともと人をそこまで信じる人じゃないんで」

「そんなのはただのカッコ付けが言う台詞じゃない？」

「志乃得さんには関係ないですよ」

「まあ良いけど。ふふ」

何故だか分らないけれど志乃得さんは小さく笑い僕から視線をそらし、座り込んでいる光さんに手を差し伸べた。

「ほら、佐井さん立って」

「どうもです」

光さんが立ち上がった事を確認すると志乃得さんは光さんから手を離し、ハンカチを巻きつけている部分に触れた。

「こりゃ、こっちの手で重いものは持てないわね」

「あー、大丈夫ですか？」

「まあ、普通に使う分には大丈夫よ。そんな事より自分の心配をした方が良いわ、こんな状況なんだから」

たしかに志乃得さんの言うとおり人の心配をしている余裕は無い。でも僕的美奈を探すと言う行動は心配からきた物だからもしかするとこのような状況では場違いな行動なのかな。

そんな疑問を持ちながらも美奈を見捨てる事は出来ないのが僕なのだ。

所詮は疑問、葛藤とは違う。

僕は迷う事なく二階に向って歩き出した。

二階に付くと予想外の人物が血を垂れ流して待っていた。

壁に腰掛けながら肩から血を流し、その人は階段を下りて直ぐの所で待ち構えていた。

「……………」

意識はある様だが黙りながら此方を見る。僕もどうすれば良いのか分らずただ硬直状態で彼を見る事しか出来ない。

数秒の沈黙の後、それを一番初めにそれを破ったのは光さんだった。

「あー！ けーちゃん大丈夫！？」

……けーちゃん？

目の前の光景よりも先ずそこに疑問が湧いた。

僕の目の前で床に座り壁に腰掛けていたのは篠崎さんだった。

「血が出ているよけーちゃん！」

篠崎さんは黙り込んで光さんを無視する。

「取り敢えず何か血を止められるもの、じゃなくて巻きつけるものがー、えつとええと！」

怪我した本人よりも焦っている光さん。

光さんは木を動転させながらも頭に着けていたりボンを外し篠崎さんの肩の傷に巻きつけた。

「こ……これでよし、かな？」

不本意そうにも光さんはまきつけたリボンを結ぶ。巻きつけたリボンは余りにも短く、全く篠崎さんの傷口を覆えていなかった。

「ありがとう」

篠崎さんが無愛想にお礼を言う。

「え……あ、いや。そんな事……ないよ」

なんだか二人は普通の関係では無さそうだった。友達でも恋人でもなさそうな、そんな関係。

そんな二人の雰囲気をぶち壊す勢いで志乃得さんが会話に割り込んだ。

「良い所悪いけれど、どうせワタシも怪我をしているし、篠崎さんもそんな状態だから保健室に言って包帯ぐらい調達した方が良くと思うわよ。ワタシは別に大丈夫だけれども、明らかに篠崎さんの怪我の方が酷いわ。そんなリボンを巻いた程度じゃ心許無いし」

すると篠崎さんが眉間にシワを寄せて志乃得さんを睨みつけた。まるで殺そうとしているかの目で……。

「悪い悪い！ 悪かったわよ。だからそんな目で睨み付けないで」
両手を前に出して手を振る志乃得さん。

「そうだよけーちゃん。今はこの人の言うとおり保健室で包帯巻いた方が良いと思うよ」

「……………わかった」

不貞腐れながらも手で肩を押さえ立ち上がる篠崎さんだった。てか一人で立てるんだ。

「で、佐井さん。保健室の場所は何処？」

「ええつと……………保健室は一階です」

「一階ね……………少年、この際だから先に一階を探して二階を後回しにするのはどう？」

志乃得さんが考え深そうに提案してきた。

確かに今は怪我人が二人いるのだから保健室で応急処置は必要に思える。それに先ほど志乃得さんが言った二階で黒尽くめに襲われたって言うのも、この篠崎さんの状態からして嘘ではないだろう。つまり今黒尽くめは二階に居る可能性が高い。

わざわざ危険を冒して二階を探す必要も無いし丁度一階にある保健室にも様があるのだ。一階から探しても良いだろう。

「分りました。一階に行きましょう」

「じゃあ、決定だね。佐井さん案内頼める？」

「任せてください」

と言う訳で二階に来て早々一階に向う僕達であった。

三章 容疑者二名と被害者二名（4）

想像以上に光さんは包帯を巻くのが上手かった。

篠崎さんの肩の傷も、志乃得さん腕の傷も物凄い手際によさでグルグル巻きになった。

で、今のところは篠崎さんから事情を聞くため保健室に待機中と言っ訳なのだが……。

「それで、彼方は何処で襲われたの？ その黒尽くめに」

「……………」

「なんでさっきから答えないの？ そんなに答えたくない？ ワタシの事がそこまで気に食わないの？」

「……………」

「あー、もう。じれったいわね！ 男ならビシッと何か言いなさいよ！」

「……………」

このように志乃得さんの質問を篠崎さんは何故だか分らないけれど悉く黙秘している。おかげ様で志乃得さんは先ほどから機嫌が悪い。

「ねえ！ なんでも良いから喋ったらどう？」

「……………」

「あー、もうやめた！ 質問するだけ無駄ね」

「あの一」

「ん、何？」

光さんはビクビクしながらも志乃得さんに声を掛けた。

「けーちゃんは無視しているんじゃないかとただ、女の人と話すことが苦手なだけなんです……………」

「……………？ どういうこと？」

志乃得さんは首を傾げた。

「けーちゃんは女の人と話せないぐらい女の人のが苦手なんです。だ

から彼方みたいに魅力的な女性がけーちゃんと話すのは無理なんです……すいません」

まるで自分の事かの用に頭を上げて光さんは謝った。まったく篠崎さんも片隅に置けない人である。

「なにそれ。じゃあ佐井さんでも篠崎さん、だったわよね。篠崎さんと話す事は出来ないの？」

「はい……私でもけーちゃんと話すことは余りなくて」

「あだ名で呼んでいる割に余り話さないって、全くじれったいわね」
そう吐き捨てると志乃得さんは俺の方をグイッと視線を向けた。

……嫌な予感がするぞ。

「しょうねーん、頼みが有るぞ！」
やっぱり。

「何と無く言いたい事は分ります。で、何を聞けば良いんですか？」

「そうね、黒尽くめに何処で襲われたのか。て事を聞いてくれれば良いよ」

「分かりました、責任持って聞きますよ」

個人的に聞きたい事もあるし、丁度良いと言えば丁度良いかも知れない。

「じゃあ保健室から出ましょう」

「え、此処から出ないと駄目なぐらい女苦手なのそいつ。てか、絶対童貞だろ！」

いちいち余計な事を言う人だな、マジで。

ぶつぶつ言いながらも（主に志乃得さん）二人は保健室から出て行った。

そして部屋には僕と篠崎さんが二人きり。

「……やれやれ、よく喋る女だな」

そう呆れた様に篠崎さんが口を開いた。二人がいなくなった途端に喋りだしたと言う事は本当に女性が苦手なようだ。

「本当に女性が苦手なんですネ」

「まあね、トラウマとかある訳じゃないけど何十年たってもこの癖

だけは治らないんだ」

「——— なんだか大変そうですね」

「そうだな。本当に参るよ。光ちゃんとともに話したこと無いし」
「なんだか切ないな。俺は美奈とかと普通に話せるのにこの人は話せないなんて。」

「あー」と篠崎さんは声を上げて頭を掻きながら言葉を付け足す「
そんな話よりも俺が何処で殺人犯に襲われたかって話したよな」

「あ、そうです」

話しが早くて助かる。

「俺が襲われた場所は二階のトイレ前だよ。いきなり鉢合わせして
ね、ナイフでざっくり肩をやられた。しかも無効は血まみれのナイ
フを持っていると来たから焦ったのなんのって」

たしかにそれは焦るよな。僕も追いかけられた時は冷静でなんて
いられなかった。まったく心臓に悪いものだ。

さて…… 今度は僕の—— 個人的な質問と行こうか。

「そう言えば篠崎さん、放送室に走っていった後、黒尽くめと先輩
には会ったんですか？」

「ああ、それだけ」篠崎さんは気の抜けた顔をする「俺が着いた
時には二人とも消えていたんだよ。拍子抜けしちゃってさ…… あ、
でも死体があつたからイーブンかな。アレは焦った」

死体を見ながらも軽そうに喋る篠崎さんだった。

「よくあそこまでグシャグシャな死体を見て焦ったですみますね。
僕なんて吐きかけましたよ」

本当にアレはやばかった。【殺人】と言うより【破壊】に近い。

「まあ、分らなくもないぜ。俺も本当にビックリしたよ。放送室に
入ったらいきなり死体が出迎えるからな」

とても呆れた口調のようだった。

「あの、話しが変わりますけど篠崎さんを襲った黒尽くめって血ま
みれのナイフ一本で襲ってきませんでした？」

「ん？ たぶんそうだと思うぞ。それで肩切られたし」

やはりナイフ一本か、という事は篠崎さんを襲った黒尽くめは志乃得さんと同じ女性。

「やっぱり名探偵とやらの後輩だけあって、なんか引つ掛かる事でもあるのか？」

「い、いえ。特にコレといったものは……」

「ふーん、怪しいもんだけどな」

なんか知らんが怪しまれているらしい。まあいいや。取り敢えず確認のため一つ質問しよう。

「もう一つ質問しますけど、黒尽くめは女性でしたか？ 男性でしたか？」

と、

篠崎さんの眉がピクリツと動いた。

「……たぶん——女だ」

「そうですか……」

女性の黒尽くめは血まみれのナイフを持っている、という事で間違いなさそうだ。ただ、篠崎さんの様子が変だったけど……。

しかしまいったなあ。容疑者が二名と被害者が二名、コレだとなり犯人が特定されてくる。この様子だと、業務の人とやら二人が犯人の可能性が高い訳だ。いくら犯人でも自分を傷つける事をあまりしないと思う。あくまで予想だけど。それに美奈が心配だ、一体何処にいるんだよ、アイツ。

……調子に乗って変な事しなければよかったな。

「てか、殺人犯って女だったんだな。てつきり男かと思ってた」

「いえ、多分犯人二人いると思いますよ」

「へ……なんだそりゃ」

「犯人は男女で一人ずつ居るって事です、現に僕や光さんが襲われた時の黒尽くめは明らかに男性だった。で、そのあと志乃得さんや篠崎さんを襲った黒尽くめは明らかに女性。必然的に犯人は二人になるって訳です」

すると篠崎さんは物珍しそうな顔をして「なるほどね」と言った。

「つまり、もし業務の人が全員死んだら、必然的に俺が男の犯人になってしまう訳だな？」

そう言っただけ冷たい笑みを僕に向けた。

「なあ、野田君。俺が犯人だったらどうする？」

「逃げます」

即答した、女性の黒尽くめならまだ何とかなるかも知れないけれど、男は流石に無理だ。マジで殺されてしまう。

口を大きくあけて篠崎さんは笑う。

「はっはっはっは！ そうだよな、俺だって逃げる。普通だ」
普通って……僕を妖怪か何かかと思っていたのかこの人は。それともこの人も僕を疑っているのだろうか？

「野田君はその二人いる犯人で誰が怪しいと思っているんだい？」
「え」

「いやあ、何せ名探偵の後輩だから少し気になってね。なんだかんだ言っただけで疑り深そうだし、名探偵と付き合っていれば推理癖とかも付きそうだしね」

「なんですか、その理由」

篠崎さんは指を立てて前に出し、得意そうな顔をする。

「まあまあ細かい事は気にするなって。単なるお遊びみたいなものだ」

「お遊びって……」

まったく、何でも皆先輩見たく推理ごっこが好きなんだ。悪ふざけも大概にして欲しい所だな。僕だって多少は推理の真似事をするけれど、先輩みたいに頭が切れる訳でも、行動力がある訳でもない。ただのクソガキだ。

そんな事を思いながら犯人を割り出そうと思っている僕に虫唾が走る。くそ、先輩の思う壺だコレは。

「個人的にですけど、篠崎さん、業務の人、光さん、志乃得さんあたりが犯人だと思います」

「なんだ、ちゃっかり犯人候補に入っているのね、俺」

「篠崎さんと行動していた時に放送室で見た黒尽くめは男性なのか女性なのか分らなかったの、仕方ないですよ」

「まあ、そうか」

納得してくれたみたいだ。でも篠崎さんからしたら僕も疑わしいんだろうな。何せこの交流会、女性は沢山いても男性は僕と篠崎さんだけだもんな。

「で、質問は終わりか？」

「あ、ええっと」

他に何かあったかな。大体の事は聞いた気がするけれども……あー、何も思いつかないから大丈夫そうだな。

「はい、聞きたい事は聞いたので……二人、呼んできますね」

「おう、分った」

そう言つて手を上げる篠崎さん。こうやってフレンドリーに喋る人がこれからまた黙り込む事を想像するとなんだか不気味である。

僕は二人を呼ぶ為に保健室の扉を上げる、と。

「うわっと！」

扉を開けた途端目の前にいた篠崎さんが大げさな声を上げて後退した。

この女……話を盗み聞きしていやがったな。

「おお……少年。なんだか顔が怖いぞ」

「人の話を勝手聞かれていれば顔も怖くなりますよ」

「まあまあ硬い事言わずに、ね！ その童貞との会話をワザワザワタシに説明するのも省けたわけだしさ！」

志乃得さんがそう言った直後、背後から舌打ちが聞こえた。たぶん、確実に篠崎さんだ。

「げ！ 舌打ちされた！」

「……………」

……空気読めないって言うか何でも関係無しだなこの人。

騒ぎ倒す志乃得さんの後ろでは光さんが苦笑していた。苦笑ですんだ所を見ると光さんの心の広さが伺える。

「まあとにかく、話しは聞いたよ。ワタシと童貞の応急処置も終わった事だし小山さんを探しましょう、その童貞が付いてくるかは知らないけど」

あ、そう言えば美奈を探す事を篠崎さんに言っていなかった。一緒に行動してくれるだろうか？

「篠崎さん、僕と志乃得さんと光さんは美奈を探しに行くんですけど付いてきますか？」

すると、篠崎さんは黙ったままコクリと肯き、腰掛けていたベッドから立ち上がった。

「……じゃあ行きますか」

そんな時だった。唐突に放送を知らせるコールが鳴り響いたのは。そして放送が流れる。

『えーと、速報ね。うん』

先輩だった。

四章 消去法。(1)

『調理室にて、業務の人と思われる格好をした滅多刺しの死体を二名発見』

……。

……。

……二人、死んだ。

と、いう事は――

「あらら、コレじゃあ業務の人が犯人って線、無くなったね」

志乃得さんは篠崎さんが居る方向を見る。

「つまり――男の黒尽くめはその童貞って訳だ」

「……………」

黙りこむ篠崎さん。いや、女性が前に居るから話せないだけか。

志乃得さんの発言に光さんが声を上げた。

「待ってください！　けーちゃんがそんな事する人なんかじゃないです！」

すると志乃得さんは目を細くして光さんを睨み付けた。

「人って案外分らないものよ。心の中では人を簡単に殺してしまう様な奴かも知れないし」

「そんな事ないです！　けーちゃんとは幼馴染で長い付き合いだからそんな事しない！　出来るはずがない！」

光さんはとつても必死そうだった。いや、きっと必死なのだろう。大切な人の為に頑張っているのだ。でも――でも、消去法で行くのならば確実に篠崎さんが犯人だ。

「じゃあ、ワタシ達が最初に襲われた黒尽くめは何？　明らかに男でしょう。その時は少年も一緒に居たからどう考えてもその童貞が犯人よ」

「ちがう！」　今まで見たことの無い顔で激怒する光さん「絶対にありえない！　けーちゃんの事を勝手に彼方が決めないで！」

こりや本当に怒っているな。まあ、そうだよな。僕も志乃得さんが美奈を疑っていると言うだけで腹が立った。篠崎さんが完全に犯人だと言われれば怒らず済むはずがない。

志乃得さんは呆れ顔で腕を組む。

「だったらその童貞が犯人じゃないって証拠をだしてよね……」

「しょ、証拠ついていわれても……！」

胸をグツと押さえて倒れこみそうになる光さん。すると後ろから物凄いスピードで篠崎さんが光さんの元へ走って光さんの体を支えた。

「……………」

「……………」

そして沈黙。

しかもただの沈黙じゃない。殺意が立ち込めている沈黙だ。

篠崎さんの方が歯軋りの音が確りと聞こえる。

そしてにらみ合い。

重い。

やたらと空気が……重い。

「あー、わかった。わかった。今は犯人よりこの脱出方法を考えましょう。それで良い？」

面倒臭さそうに言う志乃得さん。たしかにこんな雰囲気と一緒に行動をするなんて僕も嫌なところだ。でもコレが先輩だったらお構い無しなんだよな。あの人ほど人の言う事聞かない人は世界で三人居れば良いほうだろう。

「う……………」

光さんは悔しさが爆発したらしく泣き出した。篠崎さんは無言でその光さんの背中を摩っている。

しかし、男の黒尽くめはどう考えても篠崎さんしか考えられない。それとも外部犯なるものでもこの学校に潜んでいるのか？

僕は当たりを見回す。

泣く光さん。

怖い顔の篠崎さん。

呆れた顔の志乃得さん。

「……………」

ああ、こんな状態で生き残れるだろうか。

「こんな所で不貞腐れても何も変わらないしさつさと小山さんと道さん見つけてここから脱出しましょう。まあ正門の鍵を手に入れないと脱出できないけどそれを考えるのは後まわしって事で」

自分で空気を悪くしたのにも関わらず、えらそーな事を言って場を纏める志乃得さん。とんでもない自己中心っぷりだ。

ん、まてよ。

確か僕が職員室に行った時に女の黒尽くめが教頭から鍵を回収していたよなあ。業務の人が全員殺された所を見ると、女の方の黒尽くめは光さんか志乃得さんのどちらか。て、事は――

この二人をボディークェックすれば犯人を割り出す事が出来る上に脱出できるじゃないか。

……僕にしては冴えた考えだな。上出来。

「あの――志乃得さん」

「ん、なんだい少年？」

「あの、まだ誰にも話していない事なんですけど」

「お！　なんだ、なんだ？　やさしいお姉さんにもつたいぶらず教えてくれ！」

「……………」

余り教える気分になれないのは何故だろう。でも、今は僕の気分よりも犯人特定の為を優先するのが……まあ、お利口……て、言うか普通だな。

「僕が女の黒尽くめに襲われた時、その黒尽くめが教頭先生の死体から校門の鍵を回収していたんです。もしもこの中に女の黒尽くめが居るのならボディークェックする事でその鍵が出てくるんじゃない

いでしょうか？」

すると志乃得さんはグワツと目を見開いて僕の両肩を掴み前後にブンブン振りながら歓喜した。

「それ名案じゃん！　良いね良いね、少年ヤルー！　後でハグしてあげる！」

なかなか美人の志乃得さんに抱き着かれる予定が立った事に心の奥底で歓喜したのは内緒である。

「つまりワタシが佐井さんに佐井さんがワタシに対してボディイチエックすれば女の方の黒尽くめは誰が犯人か分るからね。コレで事件解決って訳だ！」

僕は体を降られて定まらない視界の中言った。

「ちよつとまってください。美奈を疑っているわけじゃ無いんですけどちゃんと彼女のボディイチエックもしないと完全ではないのでは？」

この質問に志乃得さん聞いたことない笑い声を上げた。

「ふっひーん、それは大丈夫。もしワタシと佐井さんから鍵が見つからなかったら必然的に小山さんが鍵を持っている事になり小山さんが犯人さ！」

ああ、なるほど。てか『ふっひーん』てなんだ『ふっひーん』て、いくらなんでもそんな変体じみた笑い方をする奴がいるわけが――

ガンッガンッ！

「え」

それは僕の背後からやってきた。

この雰囲気。この状況。このメンバー。

それを乱す、完全に決定的な――出来事。

聞き覚えのある音――

それは先ほど聞いた音と同じ……。

背中に悪寒が走る。

これは——これは。
これは——っ！

此処まで振り向く事に恐怖したのは始めてだったかも知れない。
今まで味わって来た恐怖とは質が違った。

死ぬのが怖いとか。
痛いのが怖いとか。

そう言うのとは全く違う。

それは現実を知る怖さだった。

ガンッガンッと言う音が今度はバリッバリッと言う音に変わる。
まるで何か、粉々になったものを剥がす様な音。そしてバラバラと
何かが散らばる音。

振り向いたら——振り向いたら駄目だ。知ってしまう。後悔する。
悲しむ。

そんな。そんな事があつて良いはずが無い……のだ。
約束がちがう！

先輩との約束が違ってしまふ。

だって、

だって、光さん、志乃得さん、篠崎さん全員がそろっているこの
状況で……。

僕たちに奇襲をかける事が出来る人間なんて——

僕は——

僕は振り返った。

黒い、黒い、全身が黒い。そして顔に般若のお面。

右手は真っ赤に染まったものを持っている。

黒尽くめは窓を叩き割り、保健室に侵入しようとしていた。

それを見てなお、僕は動かなかった。

確認しなければならなかった。

「……………」

小柄な体。

ああ、そうだよな。

僕を最初に襲った時もそんな華奢な体だったもんなお前。いつの間にか良いところだけ成長しやがって。て事は俺、二回お前の奴を触ったのか。罪深いな僕も。でも、

どうしてこんな事に…… なっちまったんだよ。教えてくれよ。馬鹿で頭の悪い僕じゃ全然分らないんだ。どうして。

どうしてこんな結果になったんだよ。美奈。

黒尽くめの美奈は、保健室に侵入して僕と向き合うように……いや、対峙する。

僕は、僕は。

「……………ううぐ……………」

頭が割れてしまいそうだ。

黒尽くめの美奈が僕に向って先行する。右手に持っている真っ赤な刃物を僕に直ぐ振り下ろせる様な体制で。

——刺される。

そう思った。

でも、そんな事より優先する事があった。

彼女が何を考えて何でこんな行動に出ているのか確認する必要があった。

原因はほとんど分っているようなものなのに確認しないといけない気がしたんだ。だから僕は動かなかった。

刃物が僕に向って振り下ろされる。

悲鳴は上げない。逃げもしない。

ただ僕は刃物を体で受け止める覚悟を決めた。が、
「何ボーっとしているよ！　っ馬鹿！」

志乃得さんに腕を思いつき引つ張られて刃物が僕の頬ギリギリの所を通過した。

「佐井さんと篠崎さんはとくに逃げているのに、どうしてワタシは人ひとり見捨てられないのかなあ！　ワタシのバカア！」

そう嘆きながら僕の腕を掴み物凄いスピードで走り出す志乃得さん。まるで僕は引つ張られると言つよりも引きずられる様な感覚に襲われる程強い力だった。

とにかく早かった。

それは黒尽くめの美奈が追いかけて来ているのに、直ぐ僕の視界から消えてしまう程のスピードだった。僕は思わず息切れすることすら忘れてしまった。

国体に出られそうだな、この人。
唐突にそう思った。

四章 消去法。(2)

僕がようやく息切れを起こしたのは黒尽くめの美奈を振り切り志乃得さんと一緒に一息ついた所であった。

場所は美術室。何だか分らないけれど志乃得さんに引っ張られる用にして行き着いた場所がここだった。

志乃得さんは軽く汗を流しながらも呼吸は既に整っている。僕はと言うとゼエゼエと喉を鳴らしながら死に掛けの年老いた犬のように呼吸をしている。肺が破裂でもしていなければ良いが……。

「まったく、少年はあのまま刺されて死ぬつもりだったの？ 信じられない」

罵られた。

「ホントに疲れたわ。少年も女に助けられて情けないと思わないの？」

相当怒っている様だった。

不機嫌な態度を取り、志乃得さんは近くにある椅子に腰掛ける。

「あきれ返るほどボーっとしているから焦ったのよ！ あーもう」

「……すいませんでした」

「はぁ……謝って済むと思ってるの？ コレだから少年は」

「……あ」

良くみると志乃得さんに巻かれている包帯がジンワリと赤く染まっていた。

きつと僕を引っ張りながら全力疾走した所為で傷が……。

志乃得さんは僕の思っている事を感じ取ったのか、無愛想な態度で声をかけてくれた。

「別に傷は気にしなくて良いわよ。てか気にするな。ワタシが困る」
きつと志乃得さんの的に気を使ってくれたのだろう。

僕はその言葉を聞いた途端何故だか途轍もない無気力感に襲われ、

近くの椅子に腰掛けて「はあ」と大きいため息を付いた。

これから如何した物か、なんだか動く気分にもなれないし考える事自体なんだか面倒くさいな。それに犯人の特定も大体済んだからここでボーツとするのも悪くないのかも。

………近くに死体がある場所でボーツとするのって何だか変な感じがするな。

ふと、僕は黒尽くめが美術室に侵入する際に叩き割った窓ガラスを見た。すると、

「ん……」志乃得さんが何かに気付いた用に声を上げた「ねえ、この窓ガラスって何で割れているの？」

「え……ああ、そうか」あそこの窓ガラスを黒尽くめが叩き割った時に志乃得さん、この場に居なかったな。

「志乃得さんが光さんと一緒に職員室に向った後に僕と美奈が黒尽くめに襲われたんです。あの窓ガラスはさっき僕達を襲った時みに黒尽くめが外からここに進入する際、割られた物なんです」

「へー、なるほど。あの真っ赤なナイフでガンガンやったって訳ね」「ええ、真っ赤なナイフで………ん？」真っ赤なナイフ？

そう言えばこの窓ガラスを割った時に黒尽くめが持っていたナイフって血の色に染まっていたっけ？

「……………」

「お………どうした少年何か気づいたのか？」

「いや、そう言えば黒尽くめがこの窓を割った時、タップリ血の着いたナイフじゃなくて、普通の新品みたいなナイフを使って窓を割っていたなーと思って」

そうだ、真っ赤に染まったナイフは僕と志乃得さんが撃退した時に投げつけてきたんだ。つまりこの窓ガラスを血に染まったナイフで叩き割る事は物理的に不可能だ。

そう言えば投げつけたナイフは篠崎さんが書いた絵に刺さって――

「……………！」

無い。

絵にはナイフが刺さっていたと思われる穴が開いていた。でも——
——そこにあつたはずのナイフが消失していた。

「これは——」

黒尽くめの男が回収したのか？ いや……違う、違うな。僕の記憶が正しければそこあつたナイフと僕が職員室で遭遇した黒尽くめの女が持っていたナイフは同じナイフだったはずだ。

だからこそ、僕は職員室で出会った黒尽くめの女が最初に襲つて来た黒尽くめの男と同一人物だと思い込んでしまった。って事か？ そうだ、普通に考えれば女性の黒尽くめと男性の黒尽くめでは体格に違いが出てくる筈なのに気付けなかった。それは多分人間の防衛本能の所為だ。

人間はどうしても相手が凶器を所持していると、凶器ばかりに気を取られて相手自体を確り確認することができないのだ。

それが原因で僕は黒尽くめの女を押さえつけるまで相手が女性と言ふ事に気付かなかつた。

と、いう事は篠崎さんの絵に刺さっていたナイフを回収したのは黒尽くめの女つて事になるのか？ たしかにその場合黒尽くめの女はナイフを一本しか持つてなかった事も全く不思議では無い。辻褄があつた。

普通人を殺す予定があるのならば殺すための道具は基本的に現地調達などしない。しっかりと用意するはずだ。でも黒尽くめの女はここで回収したナイフ一本で学校を徘徊している所を見ると確り予定を立てた犯行では無さそうだ。つまり、

つまり——女性の方の黒尽くめは今日誰かを殺そうと決めた。

そんな事を唐突に決める事が出来るのは先輩が書いた絵を見て心を狂気にされた人間だけだ。だから女性の黒尽くめは先輩によつて作り出された殺戮狂気で間違いないだろう。

そしてその殺戮狂気が………美奈。

幼馴染。

友達。

でも僕の中ではそれは少し違う。

そんな言葉で表現しきるにはとても足りない。

それは、それは大切にしている。

僕の世界で一番大切な――

「少年！」

「え」

「どうしたの？ さっきからボーッとして。声かけてもまったく反応しないからワタシ焦ったのよ！ この世の終わりでも見ている様な目をしてずっと放心状態だったから、もしかして黒尽くめに立って続けに襲われてしまった為に精神的にも体力的にも限界を超え、精神崩壊と全身の筋肉が断裂でもしたのかと思った。まあ仮に少年がそんな状態になったとしてもワタシは少年を見捨てずに助けるから安心したまえ。こう見えてもワタシは困っている人を見ると放っておけない性格だね。結構相談とかに乗ったりするのよ。同級生の人達からは相談請負人多野田志乃得と呼ばれている程だ。だから少年、少年にも悩み事があるのならワタシに相談しなさい。特に色恋沙汰の悩み事だったら全力で乗ってあげるから」

まさか悩み事に乗ってあげるよと僕に伝える為にマシンガントークしたのかこの人。結構と言うか、かなり回りくどい。

「……………はあ」

なんだかな。志乃得さんが元気そうで何よりだけど、どうしても僕自身の気分が優れない。

僕の様子を見て志乃得さんがハイテンションで絡んでくる。

「ほらほらどうした、少年。悩み事があるのならお姉さんに相談しなさい。んん？」

なんだこのウザキヤラは……いくらなんでも僕と志乃得さんとの温度差がありすぎる気がするだろコレ。

「ほーおら！ 少年何に悩んでいるんだい！ 早く教えてよー」

「志乃得さん」

「ん？ なになに？ 悩みを打ち明けてくれるの？」

「ちょっと黙ってください」

「……………けっ、つまんね」

「!？」

いま、志乃得さんが女性らしからぬ事を言っていた様な気がする。それに年齢が十歳程プラスされた様に見えるほどの顰め面。顔芸と言われれば確実に信じてしまうほどの印象に残る顔だった。

これは一応注意しておいた方が良いな……。

「あの、志乃得さん。彼方は一応女性なのだからそんな顔しないほうが良いと思いますよ」

「あら、少年でもやっぱりワタシの事を女として見ているんだあ」
にやけ面になる志乃得さん、しまった。調子に乗らせてしまったようだ。

うわー、明らかに誘っているような台詞だよ。参ったなあ。

「年上つて言っても志乃得さんは僕と……あれ？」そう言えば志乃得さんが何歳なんて聞いた事なかったな「志乃得さんって何歳なんですか?」「こらあ!」

志乃得さんが大きい声を上げて僕の頭を殴った、しかもグーで、タンコブが出来るのではないかと思うほど痛みが頭に走る。

「あのね、少年。いくら若い人でも女の人に年齢を聞くのは失礼よ。ワタシみたいな心の広いお姉さんじゃなかったら今頃少年の頭は地面に転がっている所ね」

まるで首を切られて暗殺された人みたいな感じで表現しないではない。僕は何処かの大名かよ。

「まあ、参考までにワタシの年齢は十七歳の高校二年生よ。道さんと同級生」

予想通りの年齢だな。と思った。何気にスタイル良いし。

流し目で志乃得さんを見ていると志乃得さんはテーブルに頬杖をして此方を見てきた。

「ねえ、少年、ワタシと道さんと佐井さん。この三人の中で誰が一番好み?」

「えっ？」何言っているんだこの人。

「あ、性格とかは無し！ 見た目だけ、性格だけだとワタシと道さんは圧倒的に光さんに不利だからね」

それってまるで自分が性格悪い事を分っているような物言いだよな。自覚しているのに治さないって酷い話だけれど。

しかし、見た目だけでその三人をの内一人を決める、かあ。

先輩はあの長い髪と薄く笑っている時が魅力的だけど、でも普通に笑った時は邪気を感じるんだよなあ。光さんは……太股が良いよな、うん。顔も綺麗だし魅力的。悪い所は無し。志乃得さんは……ん？

………あー、何気に妄想している自分が情けない。

「黙り込んでその表情って事は少年。しっかりと妄想していたようだね。こんなお姉さんも前で妄想できるなんて幸せだの極みだと思わんかね？ で、誰が一番なの？」

「光さん」

「うっわ！ ひっど！ 即答すること無いでしょう、一応女だよワタシ！ 乙女なんだよ！ 少しは悩んでくれたほうがマシなのに！」

ほんと減らず口だな。この人は。もしかして五分喋らなかつたら口が腐るんじゃないのか？

「じゃあさ、ワタシと道さんの二択は！？」

なんか必死そうな顔してるよこの人。いや、実際必死なのか、そうだよな。流石に魅力的な女性が多いって言うてもビリなのはショックだよな。

だからと言って志乃得さんの心を気遣うつもりは無いけれど。

とは思った所で僕の中では先輩と志乃得さんは大体同じ位の魅力なんだよな。性格とかをあわせるのなら志乃得さんだけれど容姿だけってなると同じ位……。

「……………」

駄目だ。決められない。

僕が悩みまくっているとシビレを切らしたのか志乃得さんがとん

でもない行動をしだした。

「あー、仕方ないなあ。決めかねている少年に少しだけサービス」
「えっ」

志乃得さんは躊躇する事なく胸元のボタンを一つ——外した。

「どう？ エロい気分にもなっちゃった？」

おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい！ コレは、コレはコレは——

心臓が……加速して——

「さらにサービス」

「なっ！？」

志乃得さんはさらにもう一つボタンを外した。

当たり前に胸元の肌がさらに露出される。

「うーん、胸は結構自信があるんだけどなあ。少年コレでも駄目？」
「あ、いやー……ええっと」

気が動転している所為なのか何を言えば良いのかさっぱりわからん。なにがどうなっているんだ。こんな展開になるような状況じゃなかっただろ！？

「うーん、じゃあ大サービス！ もう一つだけはずしちゃえ！」

「——つつつつつ」

声が出なかった。

こんな経験が無いからなのか。それとも僕がエロいだけか？

もう殆どが見えて——

僕が完全硬直しながらも胸元を直視していると志乃得さんは立ち上がり僕の目の前に来た。

「どう少年。萌え死んじやいそう？」

いやいやいやいや！ 萌え無い！ けっして萌えてる訳ではない！
でもエロい超絶エロスだよこの人！

すると志乃得さんは前屈みになって僕と視線を合わせた。

「顔真っ赤だね」

そんな格好で前屈みになった志乃得さんの胸元にしか目が行かな

い。志乃得さんの顔も結構近くに有るというのに……

「少年にリアクションいちいち可愛いね、食べちゃいたいぐらい」

「……………」

思考が停止しそうだった。

何だか苦しい。

——食われる。と、

志乃得さんが僕の頭にポンツと手を乗せた。

「やっぱ少年はまだ子どもだね、うん」

「へ？」

そう言った志乃得さんは僕から離れて外したボタンを全て付け直す。

「ふー、慣れてない事するって体力使うわ」

「慣れていないって、なんでわざわざそんな事をしたんですか……」
はつきり行ってさっきの行動は異常だ。

志乃得さんは「はは」と軽く笑う。

「いやー、少年元気がなかったからね。元気にさせようと思ってさ、ほらそのスイッチの切り替えって言うのかな？　そのきっかけを与えようと思っただけよ」

切り替えって、思いつき変体な行動を行なっただけじゃないか。とか思いつつも志乃得さんの胸元に見とれていたのは言い訳も出来ない事実なのだが……。

「で、どう？　元気になった？」

「なんねーよ！」

「それぐらい元気なら問題ないわね」

くそ！　策略にはめられた気分だ。

まあ、しかし。

切り替えには——なったかもな。実際にまだ頭がぐちゃぐちゃだけど、まともにツツコミが入れられる様にはなった。

「少年よ」

「ん、なんですか？」

志乃得さんは笑っていた。

さっきの笑い顔とは違う、コレは微笑むという表現が正しいかも知れない。

「少年の中では黒尽くめ——二人の犯人は篠崎さんと小山さんって考えているんでしょう？」

的確に、僕の考えを当ててくる。

多野田志乃得、さすがに勘が鋭い。そこ等へんは先輩と同じだな、この人は。

「ええ、まあそうですね……」

認めたくない事実。

まったく……暇しないな。くそ。

「やっぱり苦しいの？」

「……………」

「きつと篠崎さんが犯人なのは良いのよね。でも小山さんが犯人と言う事実を認めたくない。苦しい。ちがう？」

「……………」

いや、凶星。

苦しい。つらい。

黙りこむ僕に対して志乃得さんは頭いきなり撫でた。

「よしよし」

「……………いきなりなにするんですか」

静かにその行動を拒否すると、志乃得さんは僕の頭から手を離し、その手の中指を僕のおでこにトンツと当てた。

「苦しいのなら……辛いのなら、その状況を打破する状況を作り上げなさい」

状況を——打破。

「ほら、推理とかは案外こじ付けでも何とかなるのよ。だって現実世界でも嘘の情報はそこら辺に転がっている。様は誰かが信じてし

まえばそれは嘘ではなく事実になってしまつたのよ。だから少年は事実を認めるのではなく事実と戦つてそれを塗り替えてしまえば良い」

事実の――塗り替え。

「悪いけどワタシは今少年が考えている犯人で決定だけだね。それがワタシのはじき出した答え。ただそれをぶち壊すほど力を持った現実を少年がはじきだせば良いんだよ。ちょっとぐらい嘘が混じつていても道さんぐらいしか気付けないだろうし……」

先輩しか気付けない。

……うーん、先輩か。もしかして僕にとって今回の敵は先輩なのか？ 大体あの人は何をしているのかさっぱり分らないや。全然姿表さないし。きつと姿を表さないのは先輩の考えがあつてだろう。もしかすると先輩は既に僕や志乃得さんの持つている事実を超える事実を持つているかも知れない。

と――言う事は。

先輩の持つている事実には僕の嘘を足してさらに力のある事実になれば良いって事か。

……まったく。推理小説とかの物語にするのなら最低最悪の方法だなこれは。でもまあ良いだろう。どうせ美奈が犯人だったとしてもそれは先輩が狂気にした所為だろうし、結局僕は美奈と犯人以外の方が生きてこの騒動が治まればハッピーエンドなのだからその方向で動くのが一番かな？

つまり今行なうべき行動は先輩と出会つて先輩の持つている情報を出来る限り聞き出すって事か。先輩が何の情報も手入れずにボケツとしている訳じゃないしな。

………なんだよ。僕、志乃得さんの思惑通りやる気出してんじやん。

本当、暇しないな。

「お、やる気を出したな少年。目が凛々しくなったぞ」
そう言つて志乃得さんは僕のおでこから中指を離した。

「で、少年はどんな行動を起こすの？」

「先輩を探します。手伝ってください志乃得さん」

「おー、遠慮ないね少年。まあ、良いけど……うーん二手に分かれて探すのかい？」

「はい、見つかったら放送で教えてください。分っていると思いますけど放送で場所を指定した場合は黒尽くめにバレるので見つけた事を知らせる放送だけで良いです。集まる場所はここ——美術室にしましょう」

「でも、もしワタシがその黒尽くめだったたら？」

「あ……」その可能性を考えていなかった……いや「この際なので僕は志乃得さんを信じて見ます。仮に黒尽くめだったとしても先輩は彼方にやられる様な人じゃないので、それに黒尽くめなら僕の考えている事は厄介だと思ってこの場で僕を殺すはずです」

「おー、カッコいい事言うね、あ、かつこ付けた事、かな？ まあ良いわ。疑われていないって事はワタシにとっても好都合だし、取り敢えず協力は確りするから安心して」

「ありがとうございます。僕は一階を探すので志乃得さんは二階をお願いします」「わかった。その代わり後でワタシのお願い一つ聞いてね」お願い？ ……なんだか良からぬ匂いがするのは気のせいだろうか。もうこれ以上犠牲者をだすわけにも行かないし、あーだこーだ言っている場合じゃなさそうだからなあ。「わかりました。僕の力で叶えられるお願いなら良いですけど……」「うん、じゃあ決定だね。ちゃんと約束だよー」「分っていますよ。じゃあ、行きますか」「了解！」そう言って志乃得さんは元気よく敬礼をした。

五章 事実（１）

「もうそろそろ来る頃だと思っていたわ、野田君」

「どういう意味ですか、それ」

一階、ボイラー室にて名探偵、道絵梨紗を発見した。発見である。何故だか分らないが彼女はボイラー室にあるよく見ないと気付けないような場所に体を小さくして隠れていた。僕がボイラー室を見て回っている時に先輩が声を掛けたてくれたおかげで如何にか気づく事が出来た訳なのだが……。

「私を探していたのでしょうか？」

「まあ、そうですね……なんでこんな所に隠れていたんですか？」
基本攻めの体制を取る先輩が隠れる、なんて行動をするのは異例だ。

僕の言葉が気に入らなかったのか先輩は不機嫌そうに言う。

「ふん、隠れていたのではなくてチャンスを探っていたと言うのが正確よ」腕を組み先輩は続ける「どうやら今回の事件、犯人の目的は私みたいだからね」

「え……それって」

先輩狙いの反抗なら、なんで他の人まで殺す必要があるんだ？

余計と言うか無駄に警戒させているだけじゃないか。

先輩は悟りきった様に喋る。

「犯人はきつと私の事が邪魔で、邪魔で仕方がないはずよ。だからもし私が犯人と二人きりになったら多分確実に殺されるわね。参ったものよ。やっぱり野田君を連れてきて正解だったわ」

「えっ？」

僕を連れてきて——正解？

一体何を考えているんだこの人。志乃得さんのお願い事よりもずっと凶悪な匂いがするのだが。

「ねえ、野田君。悪いのだけど私の変わりにこの事件——」

——解決してくれないかしら？」

「……………」

「どう？」

「どうって……」そんな事を言われても困るしかない。今の僕には情報が不足しすぎだし、嘘を混ぜた所で事実を塗り替えられるだけの事実は作り出せない。

先輩はクスクスと笑う。

「そんな顔しなくても大丈夫よ。もう私は大体の事実にとどり着いているからね。私の情報と推理全てを野田君に託してあげる」

「……………！」

好都合。

むしろ僕が一番望んでいた状況かもしれない。僕の持っている情報と先輩の持っている情報と推理、そして僕の嘘を組み合わせれば

たぶんどうにかなるはずだ。

「その顔……どうやら引き受けてくれるみたいね。じゃあ、約束どおり私の推理と情報を——」

「——ちよつと、まってください」

「ん？ 何かしら」

これだけは聞いておかなくてはならない。僕にとっては一番重要な事だ。

「美奈は絶対に百パーセント狂気にしていないですよね？」

すると先輩は黙り込み、手のひらを自分のおでこに当てた。

「……………ふーん」

そして先輩は目を細くして笑みを浮かべた。

「ふふ……んふふ！」

先輩は不気味に笑い、口を手で抑える。どうやら本当に可笑しくて笑っている見たいだ。何だか途轍もなく気味が悪い。そして――

嫌な予感がした。

「どうやら——バレてしまったようね。野田君これは少々彼方にとつて残酷な事実かも知れないけれど……仕方ない事だわ」

「え……」え……え？

——え？

「ご苦労様。まあ、もう一度時間を巻き戻したいのならば……まあ、してあげない事も無いけれどね」

それって……じゃあ。そんな——

「まあ、私としては面白い方向に転がったわね。事件解決に立ち会えないのが残念だわ」

「ま、待ってください！ 話が全然つかめませんよ！」

そう言つと先輩はいきなり僕の頬に触れた。

そして目を細くし、口を三日月みたいににして僕を見る。

——その表情に僕は心が溶かされるような感覚に襲われた。

「もう、わかつているのに白々しいわよ。野田君」

「……………あ」

何も分っていない。

何も分りたくない。

何処かで違ふと思つていた。ありえないと思つていた。

でも——でも先輩がそれを言つてしまつたら、事実を言つてしまつたら。

それこそ残酷な事実はない。

嘘でも捻じ曲げられない事実。

それは刃物のように鋭利で、僕に突き刺さる。

僕は——僕の世界が。

壊れていつて、しまう。

「黒尽くめの……女の犯人は——」

やめろ、やめてくれ。分っている。分っているのにワザワザ……なんで。辛いだけじゃないか。苦しいだけじゃないか。そんな事を思つたところでどうにかなる訳では無いけれど。聞きたくない事だ

つてある。僕は人間だ。

「小山美奈って所かしら？」

彼方みたいに人間を捨てた人とは違うんだ。

五章 事実（2）

「ふう」

屋上に着き、僕は一息ついた。既に脱力感があるがまだ僕にはするべき事がある。

「僕にしては大役過ぎるよな」

屋上——今まで唯一侵入できなかった場所。

「まさかこうも簡単に入れるとは……」なんだか拍子抜けした。

さて、と。何人集まるだろうか？ 一応先輩が放送で屋上にみんな集まるように言っただけ、普通に考えて黒尽くめも表れるリスクもあるからぶっちゃけ賭けみたいなものだ。

そんなネガティブな事を考えながらも屋上から街の風景を眺める。

……なかなか綺麗な町並みだ。都会って感じがするね。

田舎者らしい感想を心の中で述べていると、後ろから扉を開ける音が聞こえてきた。

僕は急いで振り返り手に持っているナイフを前に出して身構える。もし黒尽くめだったらシャレにならない。

扉が完全に開く。一番初めに現れたのはポニーテール姿の女性。

まあ、最初に現れる人物としては妥当だと思えた。

「おー、少年。ここに居たのか、なんだか物騒な物を構えているね」ナイフを構える僕に怯える事なく軽快に喋る志乃得さん。

「ええ、一応現れる人物が黒尽くめじゃないとは限らないので」

「ふーん、そのナイフは何処で手に入れたの？ それに何で屋上の扉が……」

「このナイフは先輩から護身用で貸して貰った物です、ここの扉が開いている事は皆さんが集まった時に説明しますから待っていてください」

すると志乃得さんは先輩が護身用ナイフを持って居た事に驚く事は無かったものの、怪訝そうな顔をして僕のナイフをジロリと見る。

「……そう。ところで道さんは？ 放送した本人が居ないってどういう事なのかな？」

「それも……皆さんが集まってから説明しますよ」

「少年は勿体ぶるねー、まあ良いけど」

そう言つて志乃得さんはナイフを持った僕を警戒する様子も見せず僕に隣の隣まで移動して屋上から町を眺める。

「意外と良い眺めだね」

「そうですね」

「都会には一度でも良いから住んでみたいわ」

「僕もです」

他愛の無い会話で適当に場を和ませる。なんだか吹き付ける風がくすぐったかった。

「あ、そうだ志乃得さんコレを受け取ってください」

「ん？」

僕はポケットからクレジットカードほどの小さい絵を志乃得さんに渡した。

「先輩から彼方へプレゼントらしいですよ」

「良くこんな小さいものにこんな綺麗な絵が描けるわね、ワタシには無理だわ」

愚痴のようなものを漏らしながら絵を凝視する志乃得さん。

「ま、良いわ道さんからのプレゼントならばありがたく受け取っておく」

そう言つて志乃得さんは絵をポケットに収めた。

はあ、あとは光さんと篠崎さんを待つのか。

これからの大仕事が待っていると言うのにこのモチベーション。果たして上手くいくだろうか。と、まあ心配みたいなものをしていると、

「あ、野田君……え？」

光さんと篠崎さんが来た。

光さんは僕の手を持っているナイフを見て驚愕する。

「な、なななんですか、それ!？」

ドジっ子の焦り方みたいだった。光さんはドジではないけれど天然と言うか……すこし抜けているような雰囲気だよな。

僕は急いで状況説明をする。

「いえ、これはもし黒尽くめが来た時のための護身用ナイフですよ」

「そ、そうなんですか？ ふう……」

そこまでアツサリと人を信じる事が出来る光さんって凄いなあ。

世界中がこんな人だらけならもつとまともな世界だったのだろう。

まあ皮肉は程ほどにしておくとして取り敢えず――

必要最低限の役者はそろったな。

美奈は居ても居なくても何とかなる。解決編の始まりって奴だ。

僕がこの事件の真相なるもの説明すると思うと何だか急に心拍数が上がった様な気がした。どうやら緊張しているらしい。軽く深呼吸を三回ほどして無理やり気分を落ち着かせる。

「――ふー」

何だか全然落ち着けそうな気配が無いな。仕方ない、このまま行こう。

「では皆さん。僕から何故皆さんが此処に集まったのか説明しましょう」

「おー」

パチパチパチッと拍手をする志乃得さん。何だか痛い。それに何だか司会みたいな感じになってしまったなあ。まあ良いや、終わりよければ全てよしって言葉があるし。

「ええっと何故皆さんがここに集められたのかと言うと僕の先輩……道絵梨紗が黒尽くめ――つまり今回の犯人が分ったので集めたって訳です。用は良く推理小説とかで犯人が特定した際、登場人物全てを集めてその真相を解き明かすって奴と同じですね」

自分で言っておきながらも思うが何だか胡散臭いなあ。でも、こうしないと……ん？ よく考えて見たら犯人はもう分っているのだからワザワザこんな場を設けなくても、見つけ次第捕まえて拘束し

てしまえば事件解決のような気がするぞ。

「……………」あの先輩シチュエーションにこだわりやがったな。

僕が今更になってこの状況に軽い後悔を覚えていえると志乃得さんが質問をしてきた。

「ねえ少年。黒尽くめが誰なのか分つたのは良いけど、そろそろこの場に呼び出した道さん本人が何故居ないのか説明してくれないかな？」

一応真面目な状況なので僕は気を取り直して質問に答える。

「それは——片方の黒尽くめが先輩の命を狙っているからですよ」「えっ？」

声を上げたのは光さんだった。僕の話聞いて志乃得さんは少し驚いた顔、篠崎さんは無表情で此方を見ている。

「どうやら今回の事件……元々先輩を狙った事件みたいです。だから先輩は僕に自分の立場を譲って別の場所に身を潜めているんですよ……つまり僕は先輩の代理です」

僕の言葉に志乃得さんは不思議そうな顔をした。

「あの名探偵が身を潜めるって……何だか想像できないわ」

僕も想像出来なかった。今回はきつと異例なのだろう。たしかに異例になるような状況は納得できる。

「で、今回は少年の推理をお披露目と言う訳なの？」

「いえ、僕は先輩に言われたとおりに真実を語るだけです。だから代理なんです」

志乃得さんは首を二回程振って「うんうん」と唸った。

「それなら納得、それに後輩の彼方が言う事なのだからそれはきつと本当ね。で、犯人は誰なの？」

なんだか真相が早く知りたいと言った様子の志乃得さん。まあ、焦らしても良い事なんて一つも無いのだから。さつさと真相……いや、事実か。事実を話してしまおう。

「えっと……黒幕を言ってしまうのならば犯人は——篠崎さんですよ」

シーンと自然に、ごく当たり前の様に場が沈黙する。

最初に沈黙を破ったのは志乃得さんだった。

「——理由は？」

理由、証拠ではなく——理由。

「理由は——篠崎さんの行動です」僕は平常心を装って続ける「最初、交流会で集まったメンバーの中で一番に美術室から出て行ったのは篠崎さんという事。僕と美奈が黒尽くめに襲われた直後に体育館で篠崎さんと出会った時、普通に考えて体育館に入るのならば美術室前の死体が目に入るはずなのに篠崎さんは死体を見ていないといった事。最後は僕と篠崎さんで正門が開いているか確認をした際に放送室で黒尽くめと対峙している先輩を見た途端に僕を放置して放送室へ向った事です。最初に言った事以外お二人は知らないと思います、篠崎さん本人はしつかりとこの事を覚えていてるはずですよ」僕の理由を聞いた志乃得さんはなんだかつまらなさそうな顔をしないで、篠崎さんを一瞥する。

「あー、なんだかワタシの予想と大体あっているわね。名探偵さんの事だからもつと度肝を抜かれる様な推理を期待していたのだけど」「先輩だからと言って人を驚かせる様な推理が出来るわけじゃないですよ」

大体この理由はほとんど消去法で構成された理由だし。

「んー、そんなもんなのかな？ まあ良いやつまり男の黒尽くめはその童貞で決まりって事だね」

「ま、まってください！」

「ん」

僕と志乃得さんの考えに唯一意義を唱えたのは勿論——光さんだった。

光さんは訴える。

「それはあなた達の勝手な予想じゃないですか！ もしけーちゃんを犯人とするのならけーちゃんがそれを行なったと言う証拠が必要じゃないんですか？ 決め付けで犯人にするなんてあんまりです！」

大切な人を守ろうとする気持の表れか、光さんは体ガクガクと震わせながらも力のある目で僕たちを睨みつける。

——証拠か……証拠ね。

……はあ。

「ありますよ、証拠ぐらい」

「——えっ!？」

僕のたった一個発言で光さんの顔がこの世の終わりでも見るような絶望に換わる。

……どうもなんだかな。まるで僕が悪者みたいだ。

僕はポケットから【屋上】のタグが付いた鍵【調理室】のタグが付いた鍵、最後に何もタグが付いていない鍵を取り出して見せた「この三つの鍵です」

「……………?　それが証拠?」

光さんは口を開けて頭を少し斜めにしている。まあ、犯行に使用したものを上げられても証拠なんて思えるはずないよな。うん。「説明しますね。男性の黒尽くめは自分が黒尽くめになる際に使う般若のお面と黒いマント、そしてナイフをこの屋上に隠す為に利用したんです、だから今この場に、般若のお面、黒いマント、そして僕が持っているナイフがある訳です」

まあ、実際はもう一つ重要な物が置いてあったのだからこれは後で説明しよう。

「で、光さん。僕と彼方が行動を共にしていた時この屋上の扉——鍵を使っても開きませんでしたよね?」

「え……うん、開かなかった」

これは実証済み、光さんも鍵を使って開くかどうか試したからな。「じゃあ、何でこの扉が開いているのか、それは元々鍵に付いていたタグが交換されていたって事です」

そう言つと篠崎さんの症状が一瞬、眉を潜めた。その態度を少し気にしながらも僕は説明を続ける。

「この【調理室】と書かれたタグと【屋上】と書かれたタグを交換

して鍵に取り付ければ変えた本人以外に気づく事は無い、今考えてみれば僕と光さんと志乃得さんは【調理室】の鍵で屋上に入ろうとしていた訳です」

「なるほどね、何で鍵があんな程度曲がった位で開かないのかな？
と思っていたけど、タグを交換されているとは……どうりで開かない訳ね」と、志乃得さんは言う「でも何故タグを交換されている鍵がその【調理室】のタグが付いている鍵と分ったの？」

「それはこの【調理室】のタグが付いている鍵を先輩が女性の黒尽くめから奪い取ったからですよ。先輩が一回目の校内放送をした際に黒尽くめを挑発して自分の所に来るように仕向けましたよね？」

「あー、そう言えばそんな事も……」

「その挑発に乗った黒尽くめが放送室に来たんです。その際に奪い取った鍵がこの《調理室》のタグが付いた鍵だった、て訳ですね。
さつきも言いましたけど僕と篠崎さんは放送室で黒尽くめのと対峙するのを目撃しているのだからこれはほぼ確実です」

まあ、確実とは言ったが、普通は狂気を持った人間から素手で立ち向かって鍵を奪うなんて……いや、先輩は今僕がもっている護身用ナイフを持っていたのか、抜け目ないなあの人。やはり魔女か。

志乃得さんは顎に手を添えて俯きがちに考え込む。

「うんうん……確かにそれなら——いや、変ね」

何か閃いたらしく顔を上げた。どうやら気付いた様だ。

「道さんと黒尽くめが対峙した事は信じてあげる。挑発に乗るのは人間的に普通の行動だからね。でもワタシが納得できないのはそこでは無く、それを目撃した少年達よ」

「……どういう意味ですか？」

分っているのにワザと聞いてみた。理由は特に無い。ただ探偵っぽく振舞ってみたかっただけ。

「その状況を目撃した時、少年はそこに居る童貞と一緒に居たんでしょ？ 今回の事件で男の黒尽くめの可能性があるのは業務の人が全員殺された時点で少年と童貞しかないのよ？ それなら必然的

に道さんと対峙していた黒尽くめは女つて事になるじゃない。それじゃあ、この屋上にある物は童貞を黒尽くめと決定付ける証拠ではないく、女の黒尽くめが利用していた場所と言うと言う事にしかないわ……名探偵と言われる人物にしては欠陥だらけの推理ね」

僕に呆れた顔を向ける志乃得さん。
まあ、明らかに変な推理だよな。性別の関係で立証が出来ていない。でも、

「じゃあ志乃得さん。男性の黒尽くめと女性の黒尽くめが手を組んでいた。と考えるのはどうです？ もしもボディーチェックかでもされたら確実に鍵を発見してしまうし、どこかに隠すと言ってもなにかの拍子で見つかってしまいかも知れない。やはり持ち歩くのが一番良い。でも、黒尽くめと疑われる事を嫌った犯人は女性の黒尽くめに屋上の鍵を渡した。これでもしも自分がボディーチェックされても安心です。なにせ自分は鍵を所持せず、別の人が鍵を所持しているのだからね。それなら男性の黒尽くめがここを利用していた事は矛盾無く説明出来ますよ」

「ハイストップ！」

志乃得さんがいきなり手を使って僕の口を塞いだ。

「手を組んでいた、ね。確かにそれならば辻褄は合っている。でもその童貞が一体誰は誰と組んでいたの。小山さん？」

「ふ、ふおふえふあ」

志乃得さんに説明しようとしたが口が塞がれている為上手く話せない。ええい、その手をどけろ！

「その顔からして何か別の答えがあるみたいね。ふふん、どんな答えかしら」

期待している様な口振りのわりに僕の口から手を離そうとしない。どうやら話させる気が無いようだ。何処の悪ガキだよ、この人。

僕は志乃得さんの腕を掴んで力任せに手を引き剥がした。

「うわ、女の子に容赦なし！」

「うるさい！」

腕を引き剥がすと同時に怒鳴ってしまった。なんてけしからん女なんだこの人は。

「まあ良いわ、いい加減焦らさずにその童貞とは誰が組んでいたのか教えてくれない？」

「焦らしたんじゃないくて彼方が妨害したんでしょう」

「男の癖にそうやって人の所為にするの？ 決してワタシはワタシ自身の推理が外れている事を認めたくないから口を塞いだ訳じゃないのよ」

「……………」

「うわー、人として最低だ、この人。」

「まあ良いから早く童貞と徒党を組んでいた人を教えてちょうだい！」

「はあ、元気な人だ。」

でも、志乃得さん。彼方は僕が作り上げた事実を聞いて何時までその余裕をしていられるのでしょうか？ ま、ウォーミングアップって所だな。

さて、ここからが問題、僕の事実はこの三人に何処まで通用するか——だな。

「志乃得さんの焦る気持ち分りますけど、ここで皆さんに問題です」

「おい！ ワタシの意見は無視するんかい！」 「黙ってる志乃得」

「うわ！ また呼び捨て！」

どうもこの人と一緒に居ると調子が狂う。まあ良い、続けよう。

「——皆さんの予想では女性の黒尽くめは誰ですか？」

「……………」

この沈黙は予想通り。そしてきつと頭の中に思い描いている人物も一人を除いては共通しているはずだ。

「取り敢えず一人ひとりに当てますので答えてくださいね、じゃあ……」

最初に志乃得さん、どうぞ」

ワザと考えるような素振りを見せて志乃得さんは答える。

「うーん、小山さんだね。このメンバーの時に黒尽くめでワタシ達

を襲えるのは彼女だけだし」

ま、そうなるよな。

「じゃあ次は光さん、どうぞ」

光さんは険しい顔をして、意義あり。と今にも言ってきそうな雰囲気醸し出すながら僕を見る。

「それじゃあまるでけーちゃんを犯人と認めるみたいで嫌です。答えたくありません」

「いえ、篠崎さんを犯人と確定する訳ではなく、彼方が考えている女性の黒尽くめが誰なのか教えてほしいだけです」

すると光さんは気に障ったのか、光さんはプイツとそっぽを向いた。

「嫌です、絶対に答えません」

断固拒否か。まったく篠崎さんにも良い人が居るもんだな。

「分りました。じゃあ篠崎さんはどうですか？」

「……………」

篠崎さんは答えずただ僕を無表情で見るだけで黙り込んでいる。

この人の場合きつと女性が近くににいるから答えられないだけだろう。別に答えられなかったから問題がある訳じゃないし。今は説明を続けてしまえば良い。

「じゃあ、今は志乃得さんが上げた美奈が女性の黒尽くめって線で行きましょう」

「うんうん」

志乃得さん以外肯く事も返事をする事もなかった。多分嫌われたな僕。まあ光さんに嫌われてしまったのは少し残念だけど仕方が無い。これが僕の役目だ。

「美奈が先ほど僕たちを襲った犯人、つまり黒尽くめの女——辻褄が合う所か、絶対に美奈が犯人でなければ犯行は不可能です。先輩も出来ない事ありませんけれど先輩は立场上犯人では無い事は暗黙の了解と言って良いほどわかっていますよね？」

名探偵イコール犯人ではない。と言う反則敵な公式を持っている

からなあのは。

「それを踏まえて、考えてみるとますます美奈が疑わしい。僕が美奈と揉めた時から何一つ僕に美奈の目撃情報が無い所を見ると百パーセント限りなく美奈が犯人だ。でも、僕からすれば美奈に人を襲えるような甲斐性も体力も無いって考えになるんですよ、先輩を襲い、志乃得さんを襲い、僕を襲うなんて体力はともじゃないけど美奈にあるとは考えられない、では誰が篠崎さんと強力関係にあった黒尽くめだったのか？」

「野田君！ もういい加減にけーちゃんを疑うのは辞めてくださいよ！ 大体さつきから彼方の考は少し変です！」

先ほどから僕の発言に不満を漏らしまくりの光さんがまたもや不満を漏らす。

「野田君の考えではけーちゃんが犯人なんですよ？ それならば何でけーちゃんは肩にナイフで刺されたような傷があるんですか！ 犯人は女性の黒尽くめとも手を組んでいるってそう言いましたよね。だったらけーちゃんが男性にせよ女性にせよ黒尽くめに襲われた時点でおかしいじゃないですか！」

すでに光さんは涙目になるほど声を荒げて喋っていた。すこし、いやかなり悪い事をした気分になる。でも僕もここで引くわけには行かない。

「その説明は簡単です、単純に篠崎さんが誰かを襲った時に自分が使っていたナイフが何かの拍子で肩に刺さった、と考えればおかしくとも何とも無いですよ。たとえば志乃得さんを襲った時に思わぬ反撃を食らったとか」

と――

僕が志乃得さんをチラリと見た。

志乃得さんの顔が――無表情になっていた。

――ビンゴか。

「そ、そんな事を彼女の口から実際に聞いた事なんて無いですよ！」
「じゃあ今聞いてみるだけです。どうなんですか？ 志乃得さん」

無表情の志乃得さんはたつぷりと十秒程黙った後に口を開いた。

「もしかしたら……反撃したかも知れないし、していないかも知れないわ」

「曖昧ですね」

「必死だったからちゃんと覚えていないの、それにワタシが襲われた黒尽くめは女性だから童貞がワタシを襲っている訳が無いわ」

「なるほど、たしかにそう言われれば納得ですね。志乃得さんは真つ赤なナイフを持った黒尽くめに襲われたって事ですよね」

「そうそう、そう言うことよ」

なんだか適当な感じに肯定されたな。まあ、それでも大丈夫だ。

肯定は肯定なのだから変わりはない。一先ずこれで先手はとったな。

「真つ赤なナイフですか……変ですねそれは――」

「え」

多野田志乃得の顔が驚きに変わる。

「何を言っているの、少年。さっきワタシが彼方と童貞の話盗み聞きした時も童貞は赤いナイフで刺されたって言っていたじゃない。たとえ童貞が犯人で襲われていなかったとしても辻褃合わせの為に変なホラは吹かないと思うけど？」

さすが志乃得さんだ。確実に墓穴を掘らない言葉で回避してくる。僕の実力で押し込めるか心配だぞこれは。

「僕が思うに赤いナイフを持ったイコール女性の黒尽くめって言う考えが変なんですよ。たとえ男性の黒尽くめだとしても誰かを襲えばナイフは血の色に染まる。志乃得さん、その自身は一体何処から来ているんです？」

「それはワタシ自身が女の黒尽くめに襲われたからよ。実際に顔は見えていないけれど体つきは確実に女性だったわ。それ以外に理由は無い、それともワタシが嘘をついているとでも？」

ドスの聞いた喋り方で僕を威嚇する志乃得さん。軽く圧倒されながらも僕は喋り続ける。ここで喋るのを止めたら絶対に押し負けてしまう。

「いえいえ、それが志乃得さんにとって事実とするのならばそうなのでしよう。でも志乃得さん、僕は数分前にある事に気づきました」それはどんな勝負やゲームでも使われる事、当たり前前の出来事。

「自分と相手の力が同じの場合、自分が使える先方は相手も使えるって事です」

まあ、状況にもよるけど。

「志乃得さんは僕に『誰かが信じてしまえばそれは嘘ではなく一つの事実になってしまう』と言いましたよね。つまり志乃得さん自身がこの方法を使っただけでいいとは限らない」

僕はさらに続ける。

「と、いう事は何処かで志乃得さんは事実の塗り替えを行なった可能性が出てくる。じゃあ何処の事実を塗り替えたのか？　ここが一番難しい所です。でもヒントが一つありました」

志乃得さんにマシンガントークはおろか一言も喋らせる隙を与えてはいけません。

僕はもうさらに続ける。

「それは誰も美奈と遭遇しない事です。美奈が女性の黒尽くめと言っただけでおしまいですけど。先ほども言ったように僕の想像では美奈に人を連続で襲える様な体力は在りません。でもそうなるとうとうと犯行が行なえるのは先輩だけになってしまいます。まさか名探偵兼犯人だなんてふざけた話がある訳がありません、という事は――」

これは先輩が作り上げた事実だから敗北の心配は無い。終わりだ。多野田志乃得。

「志乃得さんの後輩が女性の黒尽くめじゃないのですか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167x/>

名探偵魔女

2012年1月14日22時45分発行